

子どもたちによる「送り神」行事

—静岡県掛川市—



2012



雨垂区の笹振り（平成22年）



野中区の笹振り



浜区の笹振り（平成16年）

さなぶり



岡原区の笹振り・鉦叩き・電灯持ち（平成14年）



新井区の笹振り（平成14年）



野賀区の大笹・鉦叩き（平成14年）

ヨイトコサツサア・ヨイトコサツサー



水垂区上組の笹振り集合



正道区の笹振り（平成16年）

ヨイトコ



平野区の笹振り道中



平野区の精霊送りの行列

ヨイトコモイト



篠場区東方の笹振り道中



篠場区の山車（屋台）

チャンチャカチャン



高御所区本村の笹振り道中



高御所区新田の笹振り道中



高御所区南の笹振り道中

チャンチャカチャン



領家区 2 区の笹振り道中



領家区 3 区の笹振り道中



岡津区の屋台

山の神



笹振り道中



山の神参拝後の豆腐の会食

例

1. 本書は、平成23年度文化芸術振興費補助金（文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業）を得て実施した静岡県掛川市における、子どもたちによる「送り神」行事に関する報告書である。
2. 本書に掲載した「送り神」行事は、「さなぶり」「送り盆（ショーリョー送り）」「山の神」である。
3. 本書作成の目的は、次の3点である。

まず、将来の資料とするために現在行われている行事の形態を記録する。次に、本来の形態を考察できるように、過去に行われていた方法等を記録する。さらに、廃れてしまった行事も記録し、後世に伝える。
4. 本書作成のための調査は、それぞれの行事の実施状況の現地観察と記録の作成、聞き取り調査を行った。
5. 本書に掲載した行事の記録作成、本書の作成等にあたり、地元の方々の多大な御理解と御協力をいただいた。御協力をいただいた方々の芳名を序章第2節「調査の概要と経過」に記して、感謝の意を表したい。
6. 本書作成のための調査は、岡本佳通（掛川市教育委員会社会教育課文化財係）を中心に実施した。
7. 本書の執筆は、以下のとおりである。
 - ・小杉 達（掛川市文化財保護審議会委員）
序章第3節、第4章、第5章
 - ・前田庄一（掛川市教育委員会社会教育課文化財係）
序章第1節・2節、第1章、第2章、第3章
8. 本書の用語については、次の事項に留意した。
 - (1)民俗語彙の表記は、伝承者の表現をカタカナで示し、必要に応じてカッコ内に標準的な語句、あるいは意味を示した。
 - (2)同一の物の名称、同一の所作の名称が伝承者によって異なっていて、表記が煩雑になるため、下記のように表現を統一した。

言

- ・「さなぶり」・「山の神」で笹に付ける小型の幣束はシデ（垂・紙手）、梵天竹に付ける大型のものを御幣と表記した。
 - ・鉦は、直径30cm前後のものを指し、それより大きなものは双盤とした。
 - ・撞木は、木槌を含め撞木とした。
 - ・太鼓は、通称小太鼓と呼ばれる締太鼓のことである。
 - ・笹振りは、軒先を払う、払う真似をする、庭先で笹を振ることも含む。
 - ・行事で子どもが言う「チャンチャカチャン」等の言葉は、唱えごととか囃子ことばと表現されるが、唱えごとと表記した。
9. 本書で引用した『掛川誌稿』『校正郷里雑記』『遠淡海地志』の概略は、以下のとおり。

『掛川誌稿』は、文化文政年間(1804～1830年)に掛川藩により編纂された掛川藩領内の地誌。

『校正郷里雑記』は、嘉永3(1850)年から安政元(1854)年まで横須賀藩の藩校教授長を務めた八木美穂が編纂した横須賀藩領内の地誌。

『遠淡海地志』は、森町の山中豊平が天保5(1834)年に編纂した遠江国の地誌。
 10. 本書で使用した写真は、撮影年の記載のないものが平成23年のもので、22年以前のものには撮影年を示した。
 11. 行事における位置関係を示す地図上の表現は、下記のように統一した。
 - ・破線は、集落の範囲を示す。
 - ・赤色で示したものは、現在の行事に関するものである。
 - ・青色で示したものは、過去に関するものである。
 - ・黒色で示したものは、現在と過去の両方に関するものである。

目 次

口 絵 例 言 序 章

- 1 調査に至る経過と目的 …… 1
- 2 調査の概要と経過 …… 1
- 3 行事の概説 …… 4

第1章 さなぶり

- 1 地区の概要 …… 7
- 2 行事の概要 …… 7
- 3 実施地区 …… 8
 - (1) 雨垂区 …… 8
 - (2) 藤塚区 …… 11
 - (3) 野中区 …… 16
 - (4) 浜区 …… 19
 - (5) 岡原区 …… 23
 - (6) 中新井区 …… 26
 - (7) 新井区 …… 30
 - (8) 野賀区 …… 33
 - (9) 浜野区 …… 36
 - (10) 南大坂 …… 38
 - (11) 報地 …… 40
 - (12) 三俣区 …… 42

第2章 送り盆（ショーリョー送り）

- 1 ヨイトコ系
 - 1 地区の概要 …… 45
 - 2 行事の概要 …… 45
 - 3 実施地区 …… 46
 - (1) 水垂区上組 …… 46
 - (2) 正道区 …… 50
 - (3) 平野区 …… 53
 - (4) 篠場区 …… 59
- 2 チャンチャカチャン系
 - 1 地区の概要 …… 65
 - 2 行事の概要 …… 65
 - 3 実施地区 …… 66
 - (1) 高御所区本村 …… 66

- (2) 高御所区新田 …… 70
- (3) 高御所区南 …… 74
- (4) 領家区1区綱川 …… 78
- (5) 領家区1区新家 …… 82
- (6) 領家区2区 …… 85
- (7) 領家区3区 …… 89
- (8) 岡津区 …… 94
- (9) 原川区 …… 101
- (10) 徳泉区 …… 104
- (11) 各和区 …… 107

3 ススハライ系

- 1 地区の概要 …… 111
- 2 行事の概要 …… 111
- 3 実施地区 …… 112
 - (1) 寺ヶ谷区 …… 112
 - (2) 影森区 …… 115
 - (3) 宮村区 …… 118
 - (4) 海老名区 …… 121

4 ショーリョー送り系

- 1 地区の概要 …… 124
- 2 行事の概要 …… 124
- 3 実施地区 …… 125
 - (1) 柚葉 …… 125
 - (2) 東山区 …… 128

第3章 山の神

- 1 地区の概要 …… 131
- 2 行事の概要 …… 131
- 3 実施地区 …… 131
 - (1) 川久保区 …… 131

第4章 掛川市における送り神行事の特徴

- 1 さなぶり …… 136
- 2 送り盆（ショーリョー送り） …… 138
- 3 山の神 …… 143
- 4 子どもの行事の特徴 …… 144
- 5 静岡県の中における位置づけ …… 148

第5章 資料・参考文献 …… 149

序 章

1 調査に至る経過と目的

掛川市は、静岡県西部に位置し、およそ東西15km、南北30kmと南北に長く、中央部でくびれた形状をしている。北部は、赤石山脈から派生した山地が占め、その南側に平野が東西に広がる。くびれ部に標高260mほどの小笠山が存在する。小笠山より南側には平野が広がり、遠州灘に面した海岸沿いには10kmほどにわたり砂浜が続く。

平成17年4月1日、掛川市、大東町、大須賀町が合併して新たな掛川市が誕生し、指定文化財の数は、107件を数えるに至った。この中に、子どもによる「送り神」行事である「大淵おおぶちのさなぶり」という掛川市指定無形民俗文化財がある。この行事は、平成14年に旧大須賀町教育委員会により記録が作られ、平成16年に大須賀町の文化財指定を受け、合併により市指定文化財となった。

「大淵のさなぶり」は、現在、平成14年の調査時とは異なる所作も見受けられる。また、市内の「送り神」行事は、このほかにも、高御所区の「チャンチャカチャン」、篠場区の「ヨイトコモイト」等が存在する。

しかし、これらの行事は、男児だけで行われていたものが、少子化によって女兒も参加するようになったり、環境面への配慮から川で燃やして送っていたことが可燃物のごみとして出すように変更になったり、と変化してきている。

そこで、現在の様子を記録し、行事について後世に伝えるだけでなく、できるだけ元の形態をたどれるように過去の様子についても記録することとした。

2 調査の概要と経過

市内の子どもたちによる「送り神」行事は、5ページの分布図に示すように市内各所に分布し、実施日は、3ページの一覧表のとおり、6月から8月に集中するが、12月に行っているところもある。

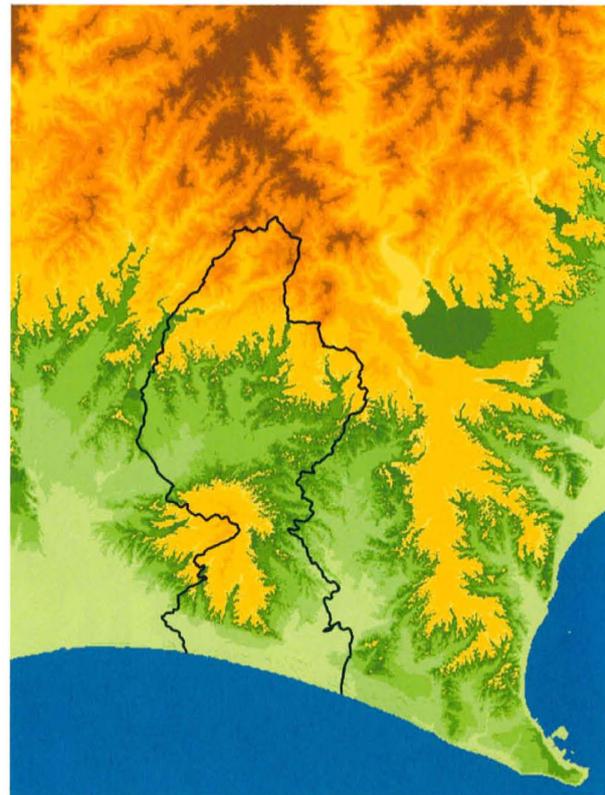
今回、これらの行事をできるだけ写真で記録することにした。まず、6月に行われる「大



提供：宇宙航空研究開発機構(JAXA)陸域観測技術衛星「だいち」撮影

陸域観測技術衛星「だいち」は、2006年の打ち上げから5年間にわたり、全世界を約650万シーン撮影しました。災害状況の観測や自然環境保全、農業分野などの幅広い分野で観測データが活用されており、上記の写真の「だいち」の撮影によるものです。

掛川市の位置



標高値	段彩色
600m以上	Dark Brown
500m - 600m未満	Medium Brown
400m - 500m未満	Light Brown
300m - 400m未満	Orange
200m - 300m未満	Yellow-Orange
100m - 200m未満	Yellow
80m - 100m未満	Light Green
60m - 80m未満	Green
40m - 60m未満	Light Green
20m - 40m未満	Green
10m - 20m未満	Light Green
最低標高地 - 10m未満	Lightest Green

掛川市の位置

国土地理院数値地図50mメッシュII

「川のさなぶり」は、8区の中から藤塚区、中新井区、新井区を選んで職員が取材を行った。

7月17日に実施された水垂区上組、24日の高御所区は職員が取材に行った。同日に行われた寺ヶ谷区、影森区は、事前の情報収集が十分でなかったため取材ができなかった。8月24日の平野区、篠場区、領家区、岡津区については、職員だけでは人手が不足したため、業者に委託して撮影を行った。12月4日の川久保区は、職員が取材を行った。今回、取材できなかった区、取材したが詳細が不明な区については、聞き取り調査を行った。

調査に当たって御協力をいただいた方々の芳名を記し、重ねて感謝の意を表する（敬称略、順不同）。

金原興四郎・永田浩章・久野文義（雨垂区）、金原稔・進士明彦（藤塚区）、神谷政行・平松繁・平松孝八・松本初男（野中区）、加藤信夫・鈴木浩・小林誠矢（浜区）、櫻田勲・夏目正秀・石川諒磨（岡原区）、富田実・赤堀邦好・上野正夫（中新井区）、水谷鈴一・水谷英治・勝田千春（新井区）、松本静男・大石世生・栗田稔（野賀区）、鈴木良紀・鈴木寿弥・八木宏之（浜野区）、岡本耕太郎（南大坂）、増田忠吉（報地）、宇田明（三俣区）、小野田實英・小関正典・大石善路（水垂区上組）、杉山博志・鈴木正彦（正道区）、橋本和己（平野区）、松浦哲司・松浦久治・斎藤有司・伊藤伸幸（篠場区）、高柳忠男・築山恵子・高柳伸男（高御所区本村）、小嶋喜代司・高柳理恵（高御所区新田）、松井貫治・松井猛・竹久好美（高御所区南）、中山正健・早瀬数馬・松浦豊（領家区1区綱川）、松浦定男・松浦武男（領家区1区新家）、橋本幸男・松浦末芳・永野千都代（領家区2区）、松浦徳一・大庭博雄・石田勝紀（領家区3区）、松浦稔・鈴木勲・伊藤孝二（岡津区）、鳥居康男・鳥居俊彦・榛村喜久江（原川区）、高橋登喜男・鈴木和正・鈴木保男・窪野俊明・高橋悦男（徳泉区）、内田敏明・山田海音（各和区）、齊藤文夫（寺ヶ谷区）、川村圀光（影森区）、市川敏美・山本良秋（宮村区）、加藤英明（海老名区）、杉本君平（柚葉）、杉山茂男・杉山善雄（東山区）、赤堀俊平・牧野るみ子（川久保区）、湖西市教育委員会、島田市教育委員会



掲載行事一覧表

番号	行事の名称	実施地区名	実施日	郡(江戸時代)	村名(江戸時代)
1	さなぶり	<small>うたり</small> 雨垂区	6月19日	城東郡	雨垂村
2	さなぶり	藤塚区	6月19日	城東郡	藤塚村源左衛門方 藤塚村庄左衛門方
3	さなぶり	野中区	6月19日	城東郡	上野中村 下野中村
4	さなぶり	浜区	6月19日	城東郡	浜村
5	さなぶり	<small>おかばら</small> 岡原区	6月19日	城東郡	岡原新田村
6	さなぶり	中新井区	6月19日	城東郡	中新井村
7	さなぶり	新井区	6月19日	城東郡	大新井村
8	さなぶり	野賀区	6月19日	城東郡	野賀村
9	さなぶり	浜野区	(6月末頃)	城東郡	浜野村
10	さなぶり	南大坂	(6月末頃)	城東郡	西大坂村
11	さなぶり	<small>ほうち</small> 報地	(6月末頃)	城東郡	東大坂村
12	さなぶり	<small>みつまた</small> 三俣区	(6月中下旬)	城東郡	三俣村
13	ヨイトコサッサア	<small>みずたり</small> 水垂区上組	7月17日	佐野郡	水垂村
14	ヨイトコサッサア	<small>まさみち</small> 正道区	8月17日	佐野郡	正道村
15	ヨイトコ	平野区	8月24日	佐野郡	平野村
16	ヨイトコモイト	<small>しのば</small> 篠場区	8月24日	佐野郡	篠場村
17	チャンチャカチャン	<small>こうごうしょ</small> <small>ほんむら</small> 高御所区本村	7月24日	佐野郡	高御所村
18	チャンチャカチャン	<small>しんでん</small> 高御所区新田	7月24日	佐野郡	高御所村
19	チャンチャカチャン	高御所区南	7月24日	佐野郡	高御所村
20	チャンチャカチャン	<small>つながわ</small> 領家区1区綱川	8月24日	佐野郡	領家村
21	チャンチャカチャン	<small>しんけ</small> 領家区1区新家	8月24日	佐野郡	領家村
22	チャンチャカチャン	領家区2区	8月24日	佐野郡	領家村
23	チャンチャカチャン	領家区3区	8月24日	佐野郡	領家村
24	チャンチャカチャン	<small>おかつ</small> 岡津区	8月24日	佐野郡	岡津村
25	ジャンジャコジャコジャン	<small>はらがわ</small> 原川区	(8月24日)	佐野郡	原川町
26	ジャンジャカジャカジャン	徳泉区	(8月24日)	佐野郡	徳泉村
27	ショーリョー送り	各和区	(8月24日)	佐野郡	各和村
28	ススハライ	<small>てらがや</small> 寺ヶ谷区	7月24日	佐野郡	伊達方村
29	ススハライ	<small>かげもり</small> 影森区	7月24日	佐野郡	影森村
30	ボンボン	宮村区	(7月24日)	佐野郡	宮村 鴨方村
31	オトロー (お灯籠)	<small>あびな</small> 海老名区	(7月24日)	佐野郡	海老名村
32	ショーリョー送り	<small>ゆずっぱ</small> 柚葉	(8月17日)	佐野郡	田代村
33	ショーリョー送り	東山区	(7月16日)	佐野郡	東山村
34	山の神	川久保区	12月4日	城東郡	川久保村

※ () は過去に行われていたもの。

3 行事の概説

子どもたちによる「送り神」行事が、掛川市の各地で行われている。それは次のようなものである。

夜中に、笹竹を持った子どもたちが、集落のすべての家々の軒先を払って悪霊、厄災、疫病、害虫、精霊（おショーリョーさん）などをとり除く。大きな声で唱え言を唱和しながら鉦や太鼓を叩いて回ると、寝ている家も起きてきて「ご苦労さん」といって、お金を渡してくれる。集落のすべてを回って笹竹を納めてから、夜が明ける頃にもらったお礼を分け合って解散する。

もちろん場所により違いはあるが、掛川市内でこのような「送り神」の行事を行っているところが、23か所ある。過去にもやっていたところを合わせると34か所にもなる。

これは全国的に行われている「送り神」行事に含まれるものであるが、1つの市域の中で、これほど多くの地区で行っているところは少ない。掛川市は古い文化を温存しながら集落内の絆が強いところであるといえることができる。これは大人の地域社会が落ち着いているからこそ、子どもたちが安心して伝統の行事を行うことができるということを示している。

ただ、地域によって名称や実施時期が異なっている。これは、地理的条件が異なっているからである。

地理的な特徴と行事の分布

掛川市は北に大尾山^{おびさん}と粟ヶ岳^{あわがたけ}、南に小笠山という3つの霊山がある。これらの山に囲まれた細長い盆地状の中を、古代以来の東海道とほぼ同じところを国道1号線が東西に走り、その北側を国道1号バイパス、南側をJR東海道線と新幹線、東名高速道路が並行して通っている。掛川城は盆地の真ん中であって城下町を形成し、JR掛川駅と結んで市街地となっている。川は東北の山の中から西に流れ、市街地の真ん中を横切って袋井市に及んでいる。

この川に沿った農村地帯で、お盆の時期に「ショーリョー送り」が行われる。現在もやっているところは14か所、過去にやっていたところが7か所ある。

小笠山の南では遠州灘に沿って国道150号線が東西に通っている。山と海に挟まれたこの水田地帯は傾斜地であるため、川は一時的な出水はあっても少しずつ流れて田を潤すという水がない。このため溜め池を作って水を確保しなくてはならなかったから、田植が無事に終わる喜びは大きかった。

このため田植が終わった6月に「さなぶり」を行って豊作を祈り、災害を防いだ。現在やっている集落は8か所、過去にやっていたところが4か所ある。

小笠山の東南の下小笠川の流域は里山と水田が入り混じっていることから山の神が祭られている。ここでは12月の8日に近い日曜日に「山の神」行事が行われる。市内では1か所だけである。

内容的な特徴

(1) ショーリョー送り

これはお盆の精霊送り（ショーリョー送り）で送り盆ともいう。お盆は7月13日からご先祖さんを迎えて供養し、親族が集まって先祖と身内同士が交流を深める行事である。しかし16日になれば盆棚に供えたものをすべて川に流して（今は地区で決めたところへ）先祖を送り出して終る。ところが、17日に精霊送りをするところや、24日の「ウラ盆」に送っているところがある。

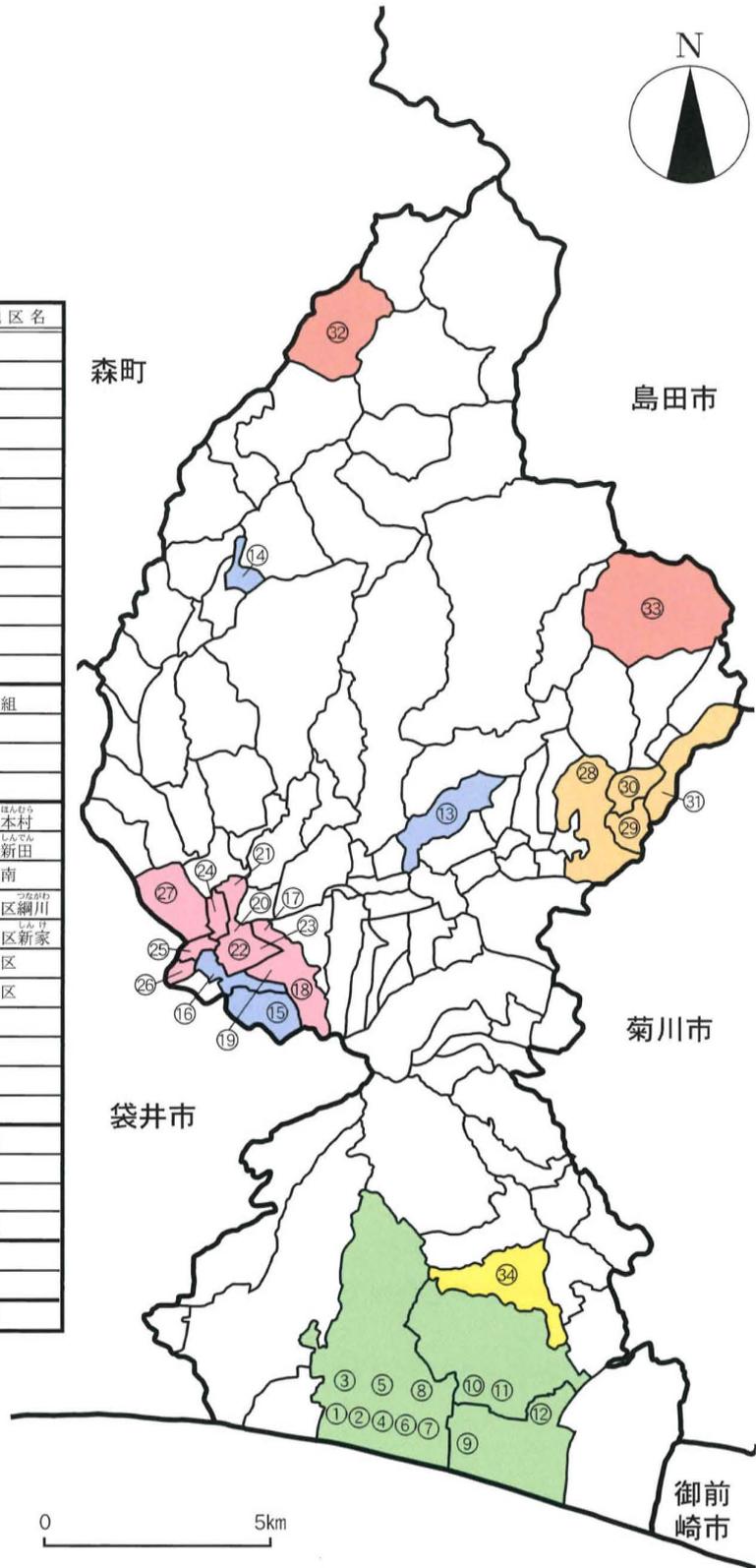
「ウラ盆」に行くところは、7月24日と月遅れの8月24日に行くところに分かれる。市街地に近い高御所や水垂など東の方は7月盆であり、袋井市に近い西の方は8月盆である。

行う時間帯は、8月盆のところは夜中であるが、7月盆のところは午後に行く。7月の場合は田植とか稲刈りの農繁休暇が多かったために夏休みになるのが遅かったころの名残であろう。

面白いのは名称である。西の方では「チャンチャカチャン」という。子どもたちが歩きながら叩く鉦の音が行事の名前になった。東の方では「ススハライ」という。笹で軒下を払う様子が大掃除の時の煤払いとよく似ているからである。

17日に行っている水垂区上組や正道は「ヨイトコサッサア」といい、前者は7月、後者は8月

色	番号	行事の名称	実施地区名
緑	①	さなぶり	雨垂区
	②		藤塚区
	③		野中区
	④		浜区
	⑤		岡原区
	⑥		中新井区
	⑦		新井区
	⑧		野賀区
	⑨		浜野区
	⑩		南大坂
	⑪		報地
	⑫		三俣区
青	⑬	ヨイトコサツサア	水垂区上組
	⑭		正道区
	⑮		平野区
	⑯		篠塚区
赤	⑰	チャンチャカチャン	高御所区本村
	⑱		高御所区新田
	⑲		高御所区南
	⑳		領家区1区綱川
	㉑		領家区1区新家
	㉒		領家区2区
	㉓		領家区3区
	㉔		岡津区
	㉕		原川区
	㉖		徳泉区
黄	㉗	ススハライ	寺ヶ谷区
	㉘		影森区
	㉙		宮村区
	㉚		海老名区
赤	㉛	ショーリョー送り	柚葉
	㉜		東山区
黄	山の神	山の神	川久保区



「送り神」行事の分布図

に行く。北部の山間地である柚葉は8月17日に行くが「ショーリョー送り」と言い、地域の人みんなで行っていた点が他と異なる。

(2) さなぶり

南の海岸部は、田植が無事に終わった日のお祝いをサナブリと呼んでいたもので、その日の夜中に行く行事も「さなぶり」というようになった。6月中頃の日曜日の夜中に鉦を叩きながら「ネンネコヤイト ホーホラヤイト」とか「送り神の勸進や、鉦にいっぱいおくんない」などと唱えて回る。

(3) 山の神

里山に接する川久保は、「山の神」を12月の8日に近い日曜日に行く。袋井市岡山の山の神祭りは真夜中に行っているが、ここは午後から始めて暗くなるころに山の神に笹竹を納め、お供物の豆腐を供えてから全員で分けて食べ、お菓子をもらって解散する。

行事の意義

以上のように、掛川市内では3種類の送り神の行事が行われていることがわかった。

なぜ、このような行事を子どもたちだけで、主に夜に行っているのだろうか。これを考えると日本人の根本的な生き方に関わる問題が見えてくる。それは危険なもの、不安なことを取り除いて清浄な気分に戻り、心新たに次の段階に進んでいこうという前向きな意思である。神に最も近い純真な子どもたちが、神が降臨する真夜中に、生命力が強い笹竹で悪霊を払うことは、もっとも効果があることである。これが行事の核心であると思われる。

子どもたちにとっては先輩たちがやってきたことをそのまま受けついでいるだけであり、小遣いかお菓子がもらえる喜びがあるけれど、それだけでなく行事を行うことが地域の文化の継続となっていることと、自主性と協調性を得ていることを無意識に感じている。

このことについて、浜松市西鳴江の6年生の言葉を紹介しておく。「ヤイトウ」というのは12月8日の夜中に行く「送り神」行事のことである。

ぼくはヤイトウを1年生からやり始め、今年で6年目になります。初めて夜中に行った時は、ねむさと寒さがまんし、昔もこうやってやってきたんだと思いながらやっていました。6年生ではみんなをまとめるのが大変で苦労しました。

ぼくがヤイトウでいいと思うのは二つあります。一つ目は、一年生～中学生までみんな協力してできることです。二つ目は、自分達の地域のことをもっと知ることができるということです。

(平成12年、静岡県教育委員会編『静岡県の祭り・行事』より)

高御所の6年生も

チャンチャカチャンをやって、どこにどんな人が住んでいるか分かりました。100年も続いている行事が今もまだ残っているなんてすごいと思いました。

と言っている。

子どもの行事が子どもたちにも、地域のためにも活力になっていることは間違いない。

第1章 さなぶり

1 地区の概要

掛川市のほぼ中央に小笠山があり、その南側の山裾から遠州灘の海岸線の間には細長い平野が広がっている。この海岸沿いの大淵地区で、さなぶりは現在も行われている。大淵地区に隣接する睦浜地区、大坂地区では、戦後から昭和40年代に廃れてしまった。これらの地区は、江戸時代には城東郡に属していた。

大淵地区は、野賀、新井、中新井、岡原、浜、東大谷、野中、藤塚、雨垂の9区から成り、東大谷を除く8区で行われている。東大谷の名は、江戸時代の地誌に見えないので村ではなかったと考えられ、残る8区は、江戸時代に村があった集落である。

大淵地区の西には、横須賀城の城下であった西大淵（旧西大淵村）があり、南西には、『校正郷里雑記』に「戸口多くして田圃少なし。昔より水子（かこ）・楫師（かじとり）及舟匠（ふねたくみ）を業とする者多くあり」と記され、主に操船と船大工を生業とした沖之須の集落（旧沖之須村）が存在する。この西大淵と沖之須では、さなぶりは確認されていない。

睦浜地区の浜野・三俣は、江戸時代の浜野村、三俣村であるが、大坂地区の南大坂は西大坂村に属し、報地は東大坂村に属していた。

睦浜地区と大坂地区の東側の市内には、江戸時代に6か村が存在した。明治22年にこの6か村が合併して千浜村となったが、千浜村でさなぶりが行われていたという記録はなく、聞き取り調査でも知っている人はいなかった。

2 行事の概要

大淵地区のさなぶりの日程は、地区の区長の会合で決められ、現在6月中旬の日曜日の深夜から早朝にかけて行われる。参加者は、かつては男児だけであったが、現在は男女で行っているところもある。唱えごと、シデを付けた笹で軒先を払う、鉦を使用するという共通点がある。さらに藤塚では、御幣を付けたボンデン（梵天竹）が加わる。

浜野・三俣・南大坂・報地のさなぶりは、大淵地区とは異なり、午前または午後に行われていた。参加者は、浜野・三俣が小学生で大淵地区と共通するが、南大坂と報地は小学生と青年団が担っていた。唱えごとは、浜野が「ネンネコヤイト ホーラヤイト」、報地が「デンドコヤイト ホーライヤイト」、三俣が「デンドコヤイト ホーラヤイト」と大淵地区と同じかほとんど同じで、南大坂だけは「ヤーラ エントー」と異なる。浜野と南大坂は、シデの付いた笹と鉦を使用し、報地はこれにボンデンが加わり、藤塚と同様の構成になる。三俣は、シデの付いた笹とボンデンである。



さなぶりの分布図

3 実施地区

(1) 雨垂区

1) 地区の概要

大淵地区の南西隅の海岸沿いに広がる平野の南半を占める。『遠淡海地志』に、戸数40、貞永寺（臨濟宗）末小寺江岳寺、産物ハタミ貝（コマタガイ）とある。江戸時代の雨垂村が浜村等と明治10年に合併して東大淵村となり、現在は大淵地区の区名として残る。

世帯数は、昭和29年に65、40年に66、45年に102、50年に80、平成22年に107となっている。

2) 平成23年の概要

i 準備

6月18日（土曜日）の午後、小学生の男女15人が江岳寺に集まり、区の役員と一緒に裏山から、笹振りと鉦を吊るす竹を切り出す。その後、区の伝統行事に詳しい人からさなぶりについての話を聞き、シデの作り方と笹への付け方を教えてもらう。笹に付けるシデの枚数は決まっておらずバランスを見て付ける。鉦担ぎ用に竹を束ね、中央に鉦を吊るす。シデを付けた笹で予行演習を行い、その後、鉦叩きと唱えごとの練習を行う。

当日、2班に分かれて集落を回るため、15人を8人と7人に分け、役割を決める。役割は、親方（6年）、鉦叩き（5年）、笹拾い（4年）、大笹（3年）、中笹（2年）、小笹（1年）があるが、人数が少ないため、親方以外の全員が笹を持つことにする。さらに、6年生が1人しかいないため、親方は1班だけで、もう1班は親方なしで回ることにする。

ii 当日

6月19日（日曜日）の午前2時30分頃から、親方と鉦叩き（鉦担ぎ2人、鉦叩き1人）が、寺の周辺1kmほどの範囲を鉦を叩いて回り、区内にさなぶりを知らせる。

午前3時、全員が寺に集合し、2班に分かれて笹振りに出発する。最近では、児童の安全確保のために、区長、副区長、保護者が笹振りに同伴する。笹振りは、各家の玄関の軒先を笹で払う。この時に「おくりがみのかんじんや かねにいっぱいおくんない」と3回唱える。笹振りが終わると、家人が出てきて親方にお礼を渡す（500円以下）。お礼の挨拶をして次の家に移動する。笹・シデが落



位置図



集落の景観



江岳寺



シデ付け

ちた場合は、笹拾いが回収する。各班は、分担する範囲が終わると寺に集まり、裏山に笹を納める。

全員が集まったところで、親方が、お礼にもらった金を学年、役割に応じて分配する。金額は、学年が上がるにつれ多くなる。午前6時頃に終了する。

3) 昭和39～46年頃の例

昭和34年生まれの男性の記憶による。

さなぶりは、田植えが終わった後の週末に行っていて、参加者は、幼稚園から小学6年までの男児であった。役割は、親方（6年）、鉦叩き・笹拾い（5年）、大笹・小笹（4年～1年）があった。さなぶりの1～2週間前に撞木採りに行った。遊びを兼ねて東大谷や岡原等あちこちの山に行つて、イマメの木（ウバメガシ）の枝を2本くらい採つてきた。前日、江岳寺で笹採りを行い、自分たちで用意したシデを笹に付けた。鉦を布で磨いた。これらも、寺で行つた。

当日の午前1時から鉦叩きが鉦を叩いて区内全域を回り、さなぶりを知らせた。鉦叩きは、さなぶりが始まると笹拾いを務めた。

午前3時頃、江岳寺から出発し、2班に分かれて回つた。笹振りは、「おくりがみのかんじんやかねにいっぱいおくんない」と家人が出てくるまで唱え、お礼をもらった。出てこない時は、また戻つてきたり、何度も行つたりした。使つた笹は、東大谷川に流してしたが、昭和40年代の半ば頃から海岸沿いの区有地に納めるようになった。

お礼の金は、親方が分配した。親方の年代が多いと割当てが少なくなつたり、逆に人数が少ないと多くなつたりした。

4) 戦前の例

平成13年度に大須賀町教育委員会が行つた「さなぶり・早苗饗」の調査票にある記録で、内容から戦前と考えられる。

さなぶりは、田植えの進行状況により大淵地区の区長が相談の上、6月下旬に実施していた。参加者は、尋常小学校1年から6年までであった。2～3週間前に4～6年生が東大谷の山へ撞木採りに行った。ウバメガシ等の木の適当な曲がりの枝を切つて、撞木を5、6本作つた。寺で、6年の親方が、5年の鉦叩きに叩き方を教えた。鉦を磨いた。笹拾いは、小さなかごを用意した。親方は、麦を入れる布袋と下の子にやる小銭を用意した。

当日、鉦叩きの鉦で起床し、暗い道を集落の西端の家に集合した。親方が頃合いをみて指示を出し、笹振りを開始した。1軒ごとに全員が順に笹振りを行い、親方が麦または金を謝礼にもらつた。

終了後、寺に集合した。使つた笹を折つて積み上げ、中心に鉦を据え、買ってあつた酒2合を親方から順に口に含み、吹き掛けた。その後、笹拾いが車に笹を積んで、柳瀬川（東大谷川）まで運び納めた。川からの帰り道に後ろを振り向くと、悪いものがつくと言つて、初めからやり直させた。謝礼の麦を横須賀の町に売りに行つて換金し、分配した。



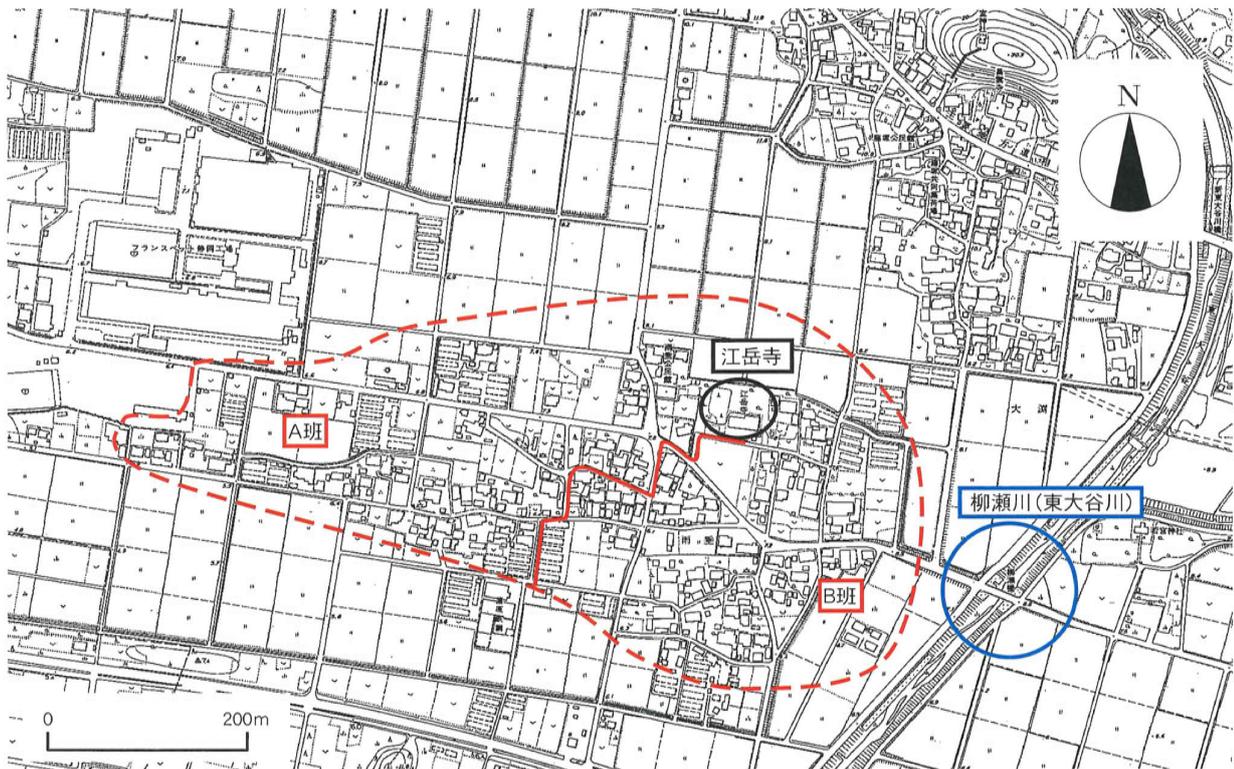
鉦叩き



柳瀬川



国土地理院撮影の空中写真（昭和37年）



さなぶり関係の位置図

(2) 藤塚区

1) 地区の概要

大湊地区の南西端近くに位置する。『遠淡海地志』等の幕末の地誌によると、藤塚村庄左衛門方と藤塚村源左衛門方に分かれていた。庄左衛門方にたかぼこ（高室）権現社、昌雲寺、源左衛門方に東雲寺、若宮権現の記載があるので、現在の藤塚区の西半が庄左衛門方、東半が源左衛門方に当たる。

明治10年に藤塚村庄左衛門方、藤塚村源左衛門方、雨垂村等が合併して東大湊村となり、現在は大湊地区の区名として残る。

小笠山の山裾に沿って走る県道相良大須賀線（旧国道150号線）の沿線に集落が形成されていたが、昭和48(1973)年に600mほど南側の海岸線沿いに国道150号線が開通すると、国道沿いにも住宅が建築されるようになった。

世帯数は、昭和40年に65、国道150号線の開通後の昭和54年に72、平成22年に108と推移している。

2) 平成23年の概要

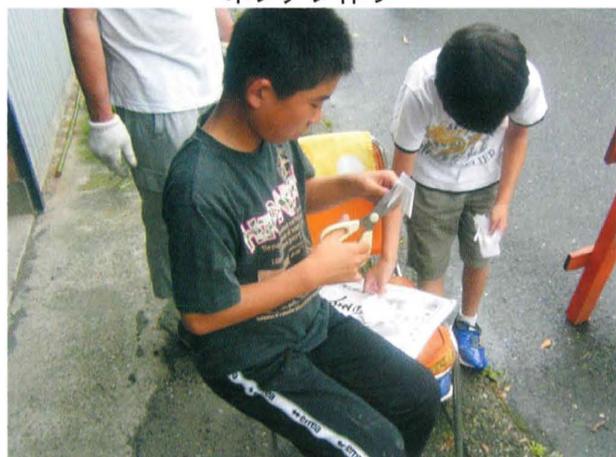
i 準備

6月18日（土曜日）の午後、小学生から中学1年までの男児3人と保護者がネリ小屋（祭りの練り・山車の保管庫）に集まり、高室神社北側の竹藪に笹振り用の竹、ボンデン（梵天竹）、鉦担ぎ用の竹を採りに行き、ネリ小屋に戻る。

笹振り用の竹は、長さ3.1mと4.6mの2本。ボンデンと鉦担ぎ用の竹は、1本の太い竹を切って作る。ボンデンは、下端の直径9cm、上端の直径8.5cm、長さ1.54mで、上端に鉦で10cmほどの深さの切れ目を入れ、あらかじめ作っておいた御幣を挟む。鉦担ぎ用の竹は、直径7.5cm、長さ1.5mほどの竹に、同じ向きにならないように笹の枝を巻き付けて鉦をぶら下げる。笹の枝を竹に巻くのは、担いだ時に肩が痛くないようにするためである。このボンデン・鉦担ぎ用の竹の準備は、保護者が行う。

笹振り用の笹に、子どもがシデを付ける。シデの枚数に決まりはなく、「全体的なバランスを考えて付ける。」と保護者は言う。

シデを付け終わったところで、鉦叩きの練習を行う。鉦を叩く役が最年長の中学生で、



鉦を吊るした竹を担ぐ役は小学生。今年は身長差があるため、前の子が肩に担ぎ、後ろの子は小脇に抱える格好になった。鉦叩きの練習は、ネリ小屋の前の道を60mほど行って戻ってくる。ボンデン・鉦・笹振り用の竹を、ネリ小屋に収納して終わる。

ii 当日

6月19日(日曜日)の午前0時30分頃、男児3人と保護者がネリ小屋に集まり、ネリ小屋から鉦を吊り下げた竹を出す。

まず、鉦叩きを行う。鉦を吊り下げた竹を2人が担ぎ1人が叩きながら、ネリ小屋の周辺を10分程度叩いて回り、さなぶり当日であることを知らせる。

藤塚区では、どんなに男児が少なくなっても、男児だけで行うのがしきたりである。今年の参加者は3人しかいないので、役割は、1人が親方兼ボンデン兼集金係、残る2人は笹振りで、笹拾いはない。本来の役割は、親方、ボンデン、鉦叩き、笹竹(笹振り)、笹拾いがある。

この役割分担によって、年長者がボンデンと集金用の袋を持ち、年少者が笹振り用の笹を持って区内を回る。保護者は、その後ろを見守って行く。

区内の巡回は、集落の北端の家から行う。親方が玄関先まで進み、ボンデンを2回「コツコツ」と玄関先の地面に打ち付け、「家内安全、五穀豊穡」と唱える。その後、親方の「イッセーノ」の合図で、後ろに並んだ笹振り2人が、「ネンネコヤイト ホーラヤイト」と唱えながら笹を振る。軒先を払うことはしないで、竹を左右に振るだけである。

この笹振りと唱えごとは、家人が出てくるまで行う。家人が出てきたら「おはようございます。」と挨拶し、お金を受け取って「ありがとうございます。」とお礼を言って、次の家に向かう。このようにして、県道相良大須賀線(旧国道150号線)沿いにある昔からの集落を回った後、自動車^で600mほど離れた国道150号線沿いの新しくできた家々に移動して笹振りを行う。区内の笹振りが終わると、東大谷川の河口から300mほど上流の白砂橋^{しろすな}まで自動車で行き、橋の上から笹振りに用いた竹を川に納める。

竹を納め終わるとネリ小屋へ戻り、親方が各家からもらった金を計算し、みんなに分配



鉦叩き



ボンデンと笹振り(平成16年)



菓子配り

して午前3時頃に解散する。

午後1時頃から、親方と保護者が、新生児から未就学の男児がいる家8軒（11人分）、竹を採らせてもらった家、御幣を作ってくれた家に菓子配り、すべて終了する。

3) 昭和40～45年頃の例

昭和33年生まれの男性の記憶による。

さなぶりは、田植えが終わった後の週末に行っていて、参加者は、小学生の男児で、20人くらいいた。役割は、親方（と言ったか覚えがないが）と金の管理（6年）、ボンデン（5年生2人）、大笹（6年、5年）、鉦叩き（5年）、中笹（4年、3年）、小笹（2年）、笹拾い（1年）であった。

準備は、前日の午後、笹採りを行った。ボンデン用の御幣は、老人に作ってもらった。

当日は、午前2時から鉦叩きが集落を1周回った。笹振りは、東西2班に分かれ、各班にボンデンがあった。

親方が玄関先まで進み、ボンデンを2回「コツコツ」と地面に打ち付け、「家内安全、五福成就」と唱えたと記憶している。

笹振りが終わると、笹を海に納めた。その後、出荷場（現在のネリ小屋の隣にあった）に行き、6年生が年齢ごとに金を分けた。初めてもらった時は、30円だった。

4) 昭和23年頃までの例

昭和10年生まれの男性の記憶による東藤塚の様子である。

この頃、藤塚は、東藤塚、西藤塚で別々にさなぶりを行っていて、東藤塚には、東雲寺、若宮神社があり、西藤塚には昌雲寺、高室神社があり、それぞれに鉦があった。東と西が合同でやるようになったのは、戦後5年くらい経ってからだと思う。

さなぶりは、6月下旬に行っていた。自分が中学1年で親方の時に、さなぶりが終わってから学校に行き、せわしなかった覚えがあるので、平日にやっていたと思う。参加者は、数え年で14歳までの男児のみであった。役割は、ボンデン（親方）、鉦、大笹、中笹、小笹があったが、笹拾いという役割はなかった。

撞木は、硬い木だと鉦に疵が付くといっていて、藤のつるを使ったこともあった。鉦は、普門寺草（ハナカタバミ）で磨いた。準備は、東雲寺の南に農業協同作業所があり、ここと東雲寺で準備をやった記憶がある。

鉦叩きは、笹振りが始まる前に区内を回り、さなぶりを知らせた。鉦のリズムは「カーン カンカンカンカンカン カーン カンカンカンカンカン」の繰り返しであった。

さなぶりは、親方の家から始めた。唱えごとは、「ネンネコヤイト ホーホラヤイト」と唱えた。さなぶりの詳しい時間は覚えがないが、終わってまだ暗い時もあったし、薄明るい時もあったが、日が昇ってしまっていたことはなかった。

若宮神社の裏辺りの堤防の草がボサボサしたところに使った笹を納めていた。お礼にももらった粗麦を親方が売りに行って金に換え、分配した。幼児の家には、紅白の煎餅菓子を配っていたと思う。

5) 昭和14～21年頃までの例

昭和8年生まれの男性の記憶による西藤塚の様子である。

さなぶりは、田植えが終わった後の6月下旬に実施していて、日にち・曜日は決まっていなかった。参加者は、尋常小学校1年から高等小学校2年までの男児であった。役割は、最年長者が親方、次の年の年長者がボンデン持ち、以下年齢順に鉦叩き2人、大笹、中笹、小笹、小学1年は笹拾いを務めた。鉦叩きは、鉦をぶら下げた竹竿を前後2人で担ぎ、後ろの者が叩く。

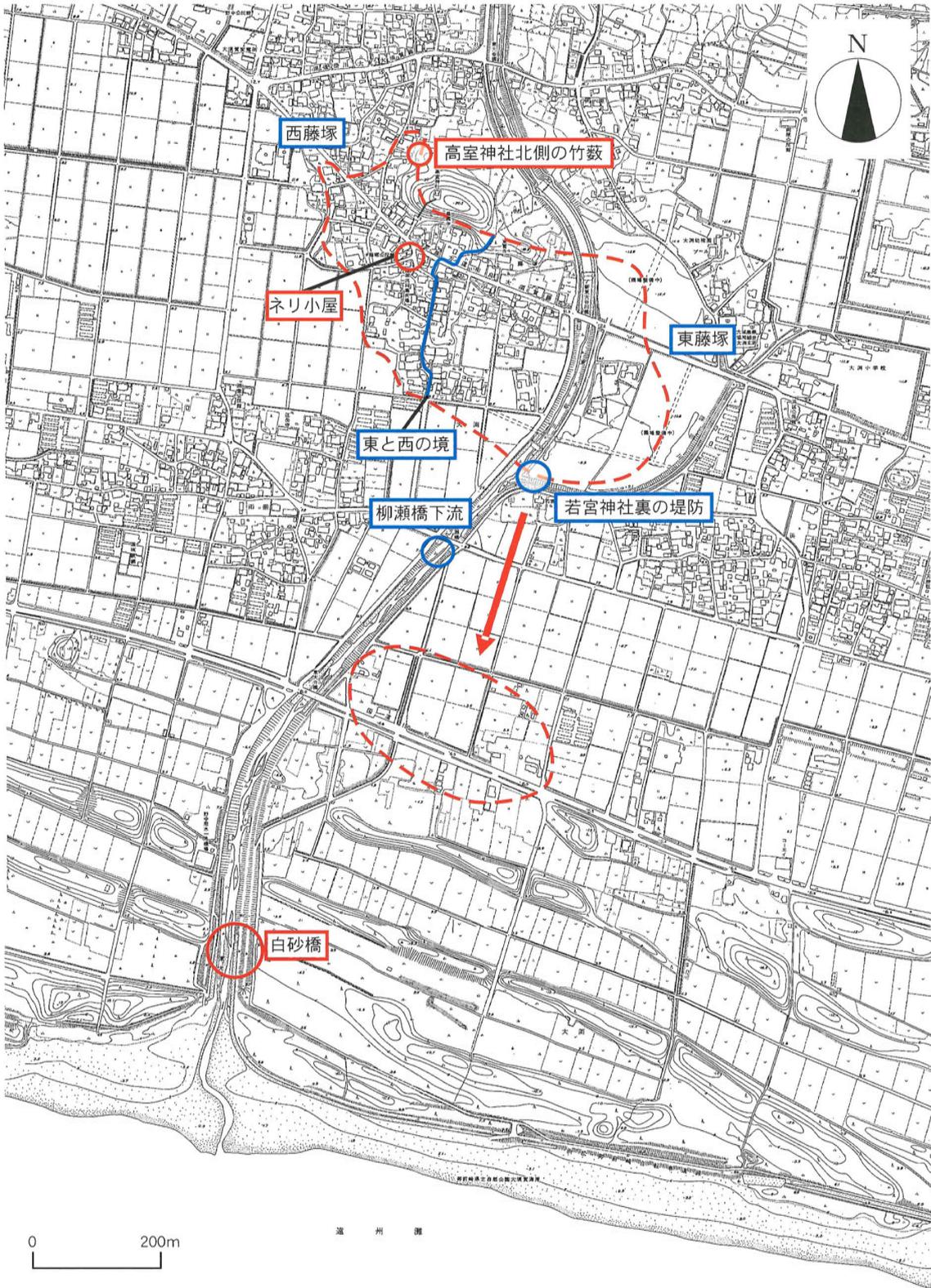
前日の午後、区長の家で準備した。撞木は、砂防林のグミの木を切って使用した。ボンデンは、太い竹を1.5mほどの高さに切って使用した。大笹・中笹・小笹に付けるシデは、子どもが作り、ボンデンに付ける御幣3、4枚は老人に頼んだ。鉦を担ぐための竿は、細い竹を何本か束ね、そこに御幣を何枚か付けた。

午前1時頃からさなぶりを始めた。鉦叩きが、さなぶりの前に鉦を叩きながら集落内を一回りした。次に中笹、小笹が各家を回り、小笹が軒を払った。次に、ボンデン、大笹が各家を回る。ボンデンは、玄関先に2回打ち付けて「家内安全、五福成就」と唱えた。その後に大笹持ちが「ネンネコヤイトホーラヤイト」と唱えて玄関先で笹を払った。親方がお礼の金や麦をもらった。先に家々を回っていた中笹と小笹の担当は、もらった麦を入れるための麻袋を乗せたリヤカーを引いて後をついて回った。区長の家から集落の北端に移動し、そこから南下して最も南の家が最後と決まっていた。笹は、柳瀬橋の下流に納めた。

学校から帰ってきたその日の午後、麦を売りに行って金に換え、区長宅で年長者が分配した。小学1年で初めてもらった金額は、1円銅貨1枚だった。男の幼児には煎餅を配った。



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



さなぶり関係の位置図

(3) 野中区

1) 地区の概要

大淵地区の中央西端に位置し、江戸時代後期から明治10年までは上野中村と下野中村に分かれていた。『遠淡海地志』によると、上野中村は戸数が50戸ほど、村内に福松寺、薬師堂、三切坊があり、下野中村は5、6戸とある。明治10年に野賀村等と合併して東大淵村となる。

藤塚区同様、小笠山の山裾に沿って走る県道相良大須賀線（旧国道150号線）の沿線に集落が形成されていたが、この道路の北側に大規模な住宅団地が形成されたりして、昭和40年代後半から急速に世帯数が増えた。

世帯数は、昭和40年に81、45年に95、50年に117、54年に141、平成22年は355である。

2) 平成23年の概要

i 準備

6月18日（土曜日）の午後、小学1年から中学2年までの男児の参加者と保護者、区の役員が公会堂に集まり、準備を行う。竹を大笹、中笹、小笹に切り、シデを付ける。鉦はワックスで磨いて、笹を巻いた太い竹に吊るす。

役割は、親方（中学2年）、鉦叩き（中学1年）、大笹（小学6年）、中笹（5年、4年）、小笹（3年～1年）で、笹拾いという役はない。総勢39人が、3組に分かれて区を回る。



ii 当日

およそ東西1.1km、南北300mと東西に細長いため、東西方向をほぼ3等分して西組、中組、東組とし、午前1時にそれぞれの集合場所に集まる。区の公会堂が中組と東組の境に位置するため、

中組と東組は公会堂に集合する。西組は、公会堂から離れているため、出発点である中組との境に集合する。

鉦叩きは、親方から「適当に区内を回って。」と言われていて、組とは別行動で西から東へ移動しながら、さなぶりの間、叩き続ける。

笹振りは「ネンネコヤイト ホーラヤイト」を2回唱えながら、軒先を払ったり、左右に振ったりする。落ちた笹・シデは、付き添いの保護者が拾う。

各組は、笹振りが終わると区の公会堂に集合し、笹を建物の脇に置く。後日、区で笹を処分する。

笹振りは午前4時頃に終了し、一旦解散する。

午前7時から8時頃までの1時間ほど、小学6年から中学2年までが手分けして各家に集金に回る。その後、9時頃から参加者全員が公会堂に集合し、お礼の金を分配する。親方が、小学1年から学年で100円ずつ差をつけて分配し、残りを親方で分ける。

3) 昭和5～11年頃の例

大正13年生まれの男性の記憶による。

さなぶりは、さなぶりの日に行っていた。参加者は、尋常小学校1年から高等小学校1年までの男児で、当時は15人くらいいた。

役割は、親方（高等小学校1年）、鉦叩き（尋常小学校6年）、大笹（5年）、笹拾い（4年）、中笹・小笹（3年～1年）であった。大笹はとても大きく、1本を2人で持った。

さなぶりの2、3日前に撞木採りを行った。ヤマモモを食べながら山に入り、木に登ってなるべく90度の角度になっているものを選んだ。

鉦は、2、3日前に親方が区長のところに借りに行き、苗代田からもらってきた残りの早苗とつき粉（米を臼で挽く時に使用する粉）で、上級生が流水に浸しながらピカピカになるまで磨いた。鉦に付いている綱も一緒に洗った。

当日は、午前4時頃に区長宅から出発した。区長の家には、前日に準備した笹が屋根に立て掛けてあった。「笹を地面に倒して置いてはいけない。」と言われていたので、立て掛けてあった。

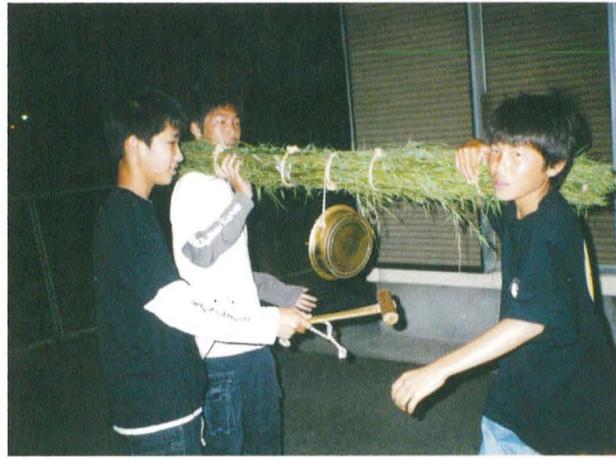
笹振りは、藁屋根の家が多かったので、藁が落ちないように静かにゆっくり払った。唱えごとは「おーくりがーみのかーんじん」を2、3回唱えた。集落内を、時計回りに回った。鉦は太い竹に吊るして前後2人で担ぎ、後ろの者が叩いていて、笹振りとは別行動だった。

回り終わると、笹を納めに行く準備に移った。使った大笹、中笹、小笹を、2mくらいの長さに折ってひとつの束にして縄で縛った。縄は垣根結びで縛るが、結び方は、最後に回った家で教えてもらった。鉦は、竹から外した。笹の束を前後2人で持ち、練りながら川に向かった。この時、親方が鉦を手に持ち、叩いていた。

鉦のリズムは、笹振りの時は、「チャーン チャンレンボンレンチャン チャンレンボンレンチャン」で、川に納めに行く時は、唱えごとと一緒に「えーらやいと チャーン ねんねこやいと チャーン」だった。

東大谷川の橋から、笹と撞木を納めた。午前6時頃には終わっていたと思う。

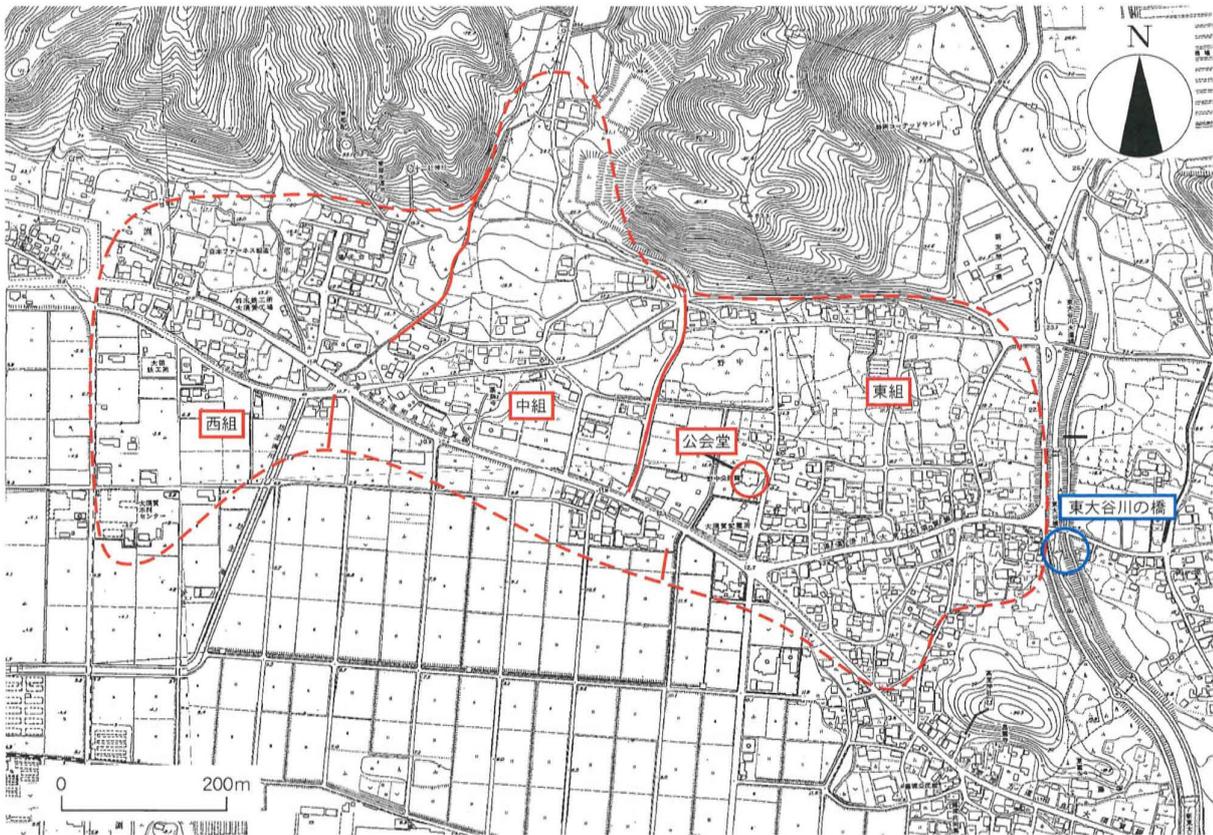
学校から帰って、上級生がお礼を集めに回った。お礼は、麦や金だった。集めた麦を荷車に乗せ、町に売りに行った。麦を売った金を区長に渡し、区長から学年ごとに金を渡された。



鉦叩き(平成14年)



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



さなぶり関係の位置図

(4) 浜区

1) 地区の概要

大淵地区の南端中央に位置し、江戸時代後期から明治10年までは浜村であった。『遠淡海地志』によると、戸数53、寺社は貞永寺末の小寺瑞雲寺と産土神若宮八幡宮がある。

明治10年に雨垂村等と合併して東大淵村となり、現在は大淵地区の区名として残る。

集落は、県道相良大須賀線（旧国道150号線）から南側400mほどの範囲に集中している。『大須賀町誌』に「江戸時代に横須賀から東に、雨垂、新井等を海沿いの村々を経る道があった」と記載されていることから、この道沿いに発達した集落と考えられる。

世帯数は、昭和29年に88、40年に85、54年に93と、戦後から50年代前半にかけては横ばいから微増傾向にあったが、平成22年には199とその後増加した。

2) 平成23年の概要

i 準備

6月18日（土曜日）の午後、小学生から中学生の男児30人ほどが、集落のほぼ中央にあるネリ小屋に集合して、竹を採りに竹藪に向かう。竹採りは、参加者の体格に合った竹を中学生が選び、切り出して参加者に渡す。渡された子どもは、ネリ小屋に持って行って、間違えないように自分の名前を竹に書く。保護者が作ってくれたシデ1枚を付け、明日に備えネリ小屋の前の水路の上に寝かせておく。

役割は、鉦叩き・お礼の配分（中学3年）、4班のリーダー（中学2年）の他は、笹振りになる。

ii 当日

6月19日（日曜日）の午前2時、中学3年がコミュニティーセンターはまかぜ（公会堂）に集合する。鉦叩きが歩いて区内を回り始める。鉦叩きは、鉦をぶら下げた竹を前後で担ぎ、別の1人が鉦を叩く。今年は鉦叩きが4人いたので、交代で鉦叩きを行った。区内を一回りして公会堂に戻り、笹振りが集まってくるのを待つ。午前2時30分頃に参加者がネリ小屋に集まり、自分の名前を書いた笹を持ってさなぶりに出発する。笹振りは、全員で400mほど西の区の西端にある若宮神社に行



位置図



集落の景観



水路の上に寝かせた笹(平成14年)



さなぶり集合(平成14年)

って、全員で集落の方を向いて「ネンネコヤイト ホーホラヤイト」と3回唱えながら笹を払う。そこから4班に分かれて区内を回る。各家では、笹振りが玄関前に一列に並び、リーダーの「セーノ」の合図に従い、全員で「ネンネコヤイト ホーホラヤイト」の唱えごとに合わせて軒先を払う。

午前4時頃になると、早い班は公会堂に戻ってくる。4時30分頃になると、すべての班が戻ってきて、中学3年が一言話をして一旦解散する。

午前10時に全員公会堂に集合する。中学3年と小学生は公会堂に残り、中学1年と2年が自分の回った班へ集金に行く。中学3年は、集金して戻ってくると金額を集計し、全員に配分する。金額は学年ごとに決めて配分する。昼前に配分が終わり、解散する。

笹振りに使用した竹は、ネリ小屋の前の区有地に置いておき、区で処分してもらう。

3) 昭和34～40年頃の例

昭和27年生まれの男性の記憶による。

さなぶりは、田植えが終わった後の6月中旬の土曜日に準備を行い、日曜日の早朝に行っていて、参加者は、小学1年から中学1年の男児であった。

役割は、親方（中学1年）、鉦叩き（小学6年）、笹拾い（5年）、大笹（4年）、中笹（3年）、小笹（2年、1年）があった。

さなぶりの1月ほど前に撞木採りを行った。4年から中学1年までが、小笠山に撞木になるイマメの木（ウバメガシ）の枝を採りに行った。この時は、4年が弁当持ち、5年が運搬、6年が撞木用の枝を切る、中学1年が全体をまとめる役であった。弁当持ちは、青竹に全員の弁当を包んだ風呂敷を通して山まで運んだ。運搬は、撞木用の枝を南京袋に入れて担いで帰ってくるが、全部で50本くらいあった。採ってきた枝は、さなぶりの前日まで「どんぶち」と呼んでいた用水に漬けておいた。

前日に用水から引き揚げて、小学6年と中学1年が木の皮を剥いた。きれいに剥けた50本の中から1本を選んだ。剥いた皮は5年生が片付ける役であるが、6年と中学1年はわざと遠くに投げるので、回収するのがたいへんだった。

鉦叩きは、親方が「よし。」と言うまで鉦を磨いた。笹を採るところからシデを付けるところまでは保護者が行ってくれたので、自分で笹を準備したことはなかった。シデは、笹の先っぽの方に1枚付いていた。

当日、さなぶりが始まる1時間前から、鉦叩きが単独で区内を「チャン チャンレンボンレン チャン チャンレンボンレンチャン」を繰り返し叩きながら回った。この鉦が、子どもの集合の合図であった。自分が鉦叩きをやった時は、同級生8人が1人の家に泊まり、そこから鉦叩きに出て行った。さなぶりをやっている時は、笹振りと道ですれ違うことはあっても、行動をともにすることはなかった。

全員で、まず瑞雲寺跡（昭和30年頃に廃寺になった）で笹を振って、その後に若宮神社のお堂の前で笹を振り、それから東西2班に分かれて笹振りに回った。笹振りは、親方の「はじめ。」の声で始める。親方が「やめ。」と言うまで、「ホーホラヤイト ネンネコヤイト」の唱えごとと笹振りを5～6回繰り返した。すべての笹振りが終わると、笹拾いの人たちが区の東外れにある天神様の裏に笹を納めた。

午前7時30分～8時頃から、親方以下数人で集金に回り、みんなは朝食抜きでおとうろう（お灯籠）様で待っていた。



若宮神社



天神社

お礼の金は、参加した者だけに親方が分配した。「背の順に並べ。」と言われ、1年生が10円、2年が20円、3年が30円、4年が40円、5年が50円、6年が60円というように分けて、残りを親方で分けていた。

4) 昭和9～15年頃の例

昭和3年生まれの男性の記憶による。

さなぶりは、7月初め頃の日曜日に行っていて、参加者は、尋常小学校1年から高等小学校1年であった。役割は、鉦叩き（小学6年）、笹拾い（5年）があり、その他に大笹、中笹、小笹があった。最上級生は、親方とか特に呼び名はなかった。

撞木は、6月中頃に全員で岡原の山に採りに行った。山から5～8本採ってきて、おとろろう様付近の川の深みに漬けておいた。鉦を吊り下げる太い青竹も、この時に採ってきた。前日に竹採りと鉦磨きを行った。竹採りは、全員で区内の竹藪がある家に行き、上級生が切り出してくれた。切ってもらった竹は、各自家に持ち帰った。中には、竹を枯らさないために、どんぶち（用水）に漬けておく子どももいた。自分は、水に漬けておく竹が重くなるのでやらなかった。竹にシデを付けた記憶はない。鉦磨きは、小学6年が行った。鉦を区長から借りて来て、つき粉（白で米を挽く時に使用する粉）と布を使って、ピカピカになるまで磨いた。

さなぶり当日は、鉦叩きが午前0時頃から鉦を叩いて集落を回り始め、笹振りとは別行動で回っていた。鉦のリズムは「チャン チャンレンボンデンチャン チャン チャンレンボンデンチャン」の繰り返しだった。0時30分頃になると、竹を持った子どもがおとろろう様付近に集まり、さなぶりに出発した。

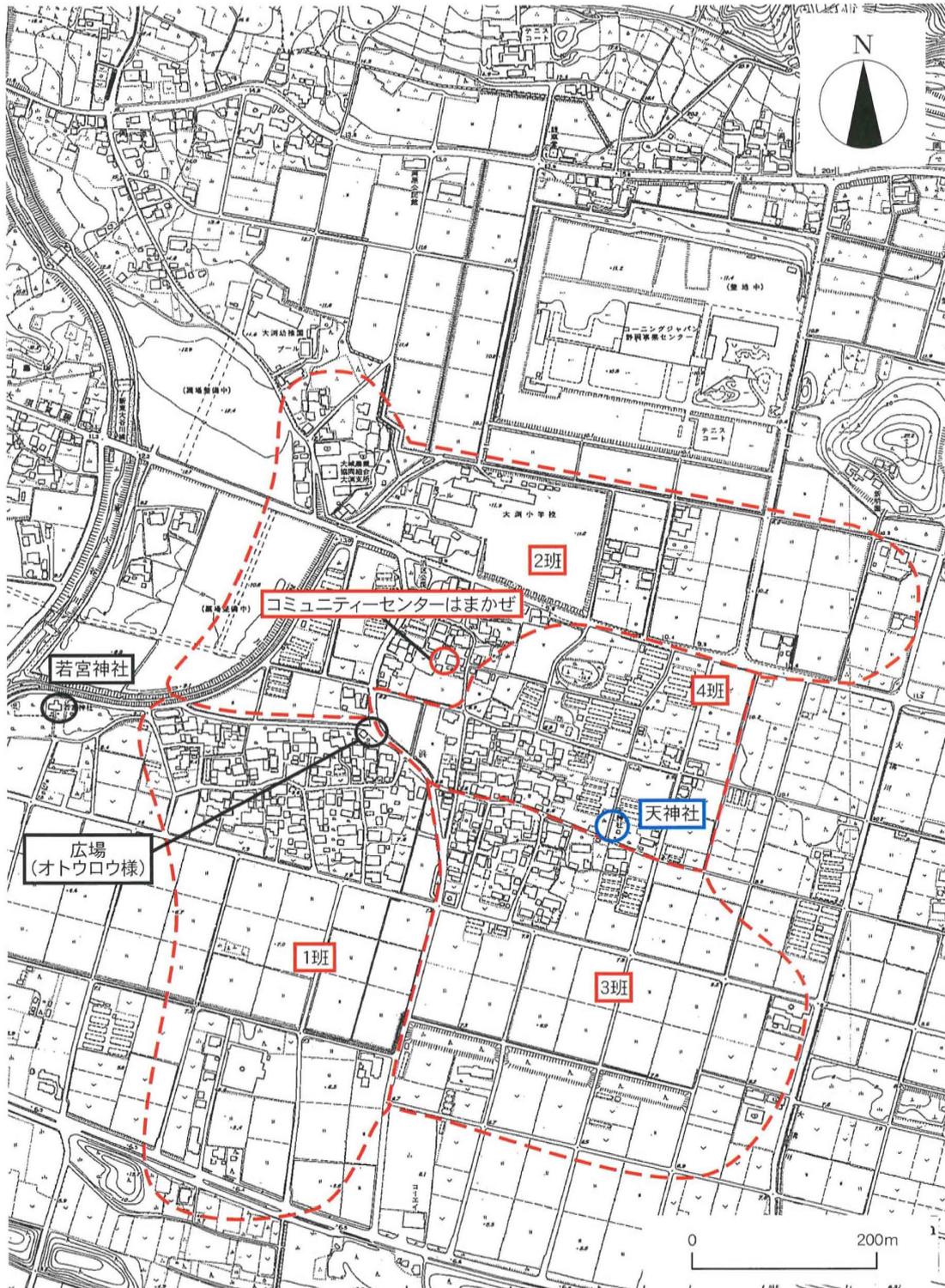
おとろろう様を境に
ひがしあけ にしあけ
「東明」と「西明」
の2組に分かれて行った。先頭と一番後ろに最上級生がいた。道中、笹の葉を地面につけないように気をつけた。笹振りは、家に向かって一列に並び、最上級生の「はじめ。」の合図で「ホーホラヤイトネンネコヤイト」の唱えごととともに竹で軒先を払った。家人は、戸を開けて「ごくろうさま。」と言ってくれる程度で、だれも出てこない家もあった。笹拾いは、笹振りで落ちた笹を拾った。



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)

すべての家を回り終わると、使った竹を折りたたんで縛り、上級生が新井区内のちょんぼり(小さな)山に捨てて行った。

昼間に手分けして組ごとにお礼をもらって歩いた。お礼は、ほとんどの家が麦であった。もらった麦は、場所の記憶はないが、1か所に集めた。最上級生はお礼をもらいに歩かず、下の者が集めてくる麦を、順次俵にしていた。その後、上級生が麦を換金に出掛け、最後に最上級生が金を分配したが、最上級生の取り分が極端に多かった。



さなぶり関係の位置図

(5) ^{おかばら}岡原区

1) 地区の概要

大淵地区の中央から東端近くの小笠山寄りの部分を占める。『校正郷里雑記』には岡原新田とあり、『遠淡海地志』には岡田（原）新田村とあり、戸数30、銭がめ観音堂等の記述がある。この銭がめ観音堂は今もあり、さなぶりの出発地点になっている。ちなみに、『校正郷里雑記』では銭亀と表記されているが、現在は銭瓶の字を当てている。

集落の西端には東大谷川が流れ、野中区との境をなす。東西に延びる集落の中ほどに銭瓶堂があり、その南側に平成元年に外資系企業により工場が造られた。

世帯数は、昭和29年に56、40年に60、54年に66、平成22年に99と増えている。

2) 平成23年の概要

i 準備

6月18日（土曜日）の午後、小学1年から中学1年までの男児が、銭瓶堂に集まり準備を行う。保護者の手助けはない。竹を切って、大笹2本をつくる。シデを笹に付けるが、枚数に決まりはない。区長から鉦と撞木を借りてきて、豊作を祈るために鉦を稲で磨く。

役割は、親方（中学1年）、ごみ拾い（小学校低学年）があり、その他の学年で鉦叩き、笹持ち、夜道を照らす電灯持ちを交代で行う。総勢7人である。



集落の景観



シデ付け(平成14年)



銭瓶堂での準備(平成14年)

ii 当日

午前1時頃に銭瓶堂に集合し、笹2本と鉦を持って出発する。集落の西から始め、東へ移動する。お払いは、「ネンネコヤイト ホーラヤイト」と1回唱えながら笹を左右に振る。家の人が出てくると、お礼をもらい、もう一度、同じ動作を繰り返す。家人がなかなか出てこないときは、鉦を大きな音をたてて叩く。

笹振りが終わると、東に隣接する野賀区の中を通って竜今寺橋^{りゅうこんじ}まで行き、笹を川に投げ入れる。その後、銭瓶堂に戻り、中学1年がお礼の金の分配を行う。中学1年が年齢に応じ分配し、保護者は関与しない。午前5時頃に終了する。

3) 昭和32～38年頃の例

昭和26年生まれの男性の記憶による。さなぶりは、田植えが終わった後の6月中旬で、終わってから学校に行った記憶はないので、土日に行われていたと思う。参加者は、小学1年から中学1年の男児のみで、当時は20～30人くらいいた。

役割は、指導的な立場（中学1年）、親方（小学6年）、鉦叩き・大笹・小笹・集金(上級生)、落ちた笹やシデを拾う役（下級生）があった。

準備は、1週間ほど前に撞木採りを行った。銭瓶堂の裏山に行って、藤のつるのかぎの手になったものを採ってきた。2本採ったり、余分に採ったり、いろいろだった。

前日に、区内で1番古いという言い伝えのある家の竹藪に行って竹を採った。男竹を、大笹用と小笹用に1本ずつ採った。採った竹を銭瓶堂の隣の公会堂に持って来て、子どもだけで作ったシデを付けた。シデの枚数に決まりはなかった。銭瓶堂で、堂内に保管してあった鉦を2つとも磨き粉を付けて、早苗の根で磨いた。準備したものが雨に濡れないように、軒下に入れておいた。

さなぶり当日は、午前3時頃に銭瓶堂に集合して、集落の西端に位置する区内で1番古いと言われている家から始めた。県道の南側と北側に集落があったので、県道を境に2班に分かれ進んで行く。本来は、大笹と小笹がセットで回るものだと思うが、南北に分かれ、別々に行動した。鉦は、竹の棒にぶら下げて2人で担ぎ、後方の者がさなぶりの間ずっと叩いていた。鉦の叩き方は「チャーン チャレンボンレンチャン」と覚えさせられた。実際に聞こえるのは「カーン・カーン・カーン・カーン・カーン」だが、抑揚がわかるように、このように覚えさせられた。

家の敷地には鉦叩きも含め全員が入る。「ネンネコヤイト ホーラヤイト」と唱えながら、笹で軒先を払う。家人がなかなか出てこないと、唱える声が大きくなったり、唱えごとの最後に「お金をおくれ。」という言葉が入ったりした。お礼の金を半紙で包んでくれる家もあった。

最後に東端にある家を払い、竜今寺川の源流に位置する「遊水林」^{ゆうすいりん}に納めた。

「遊水林」は、調整池のような場所で、七夕の笹もここに納めていた。笹を納めて、銭瓶堂に戻った。

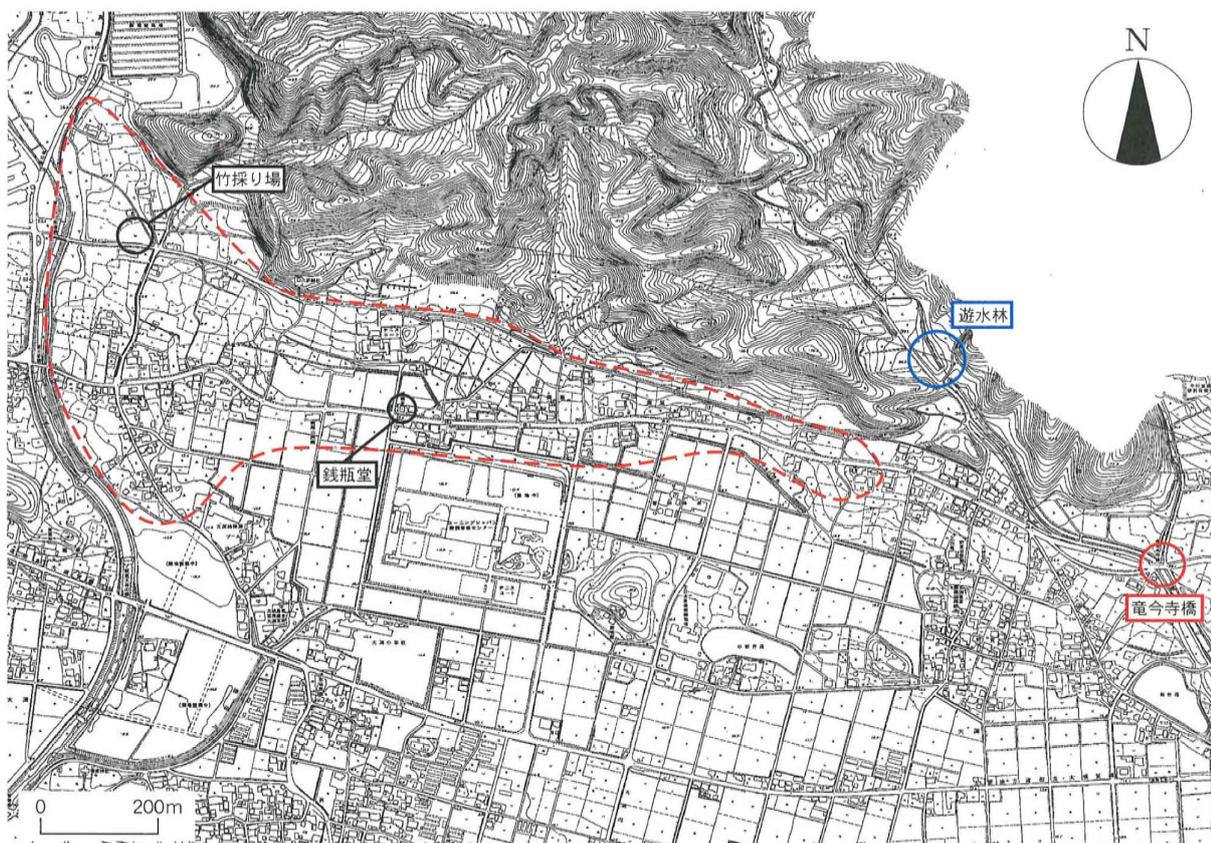
お礼の金は、銭瓶堂で分けたり、最後に回った家で分けたりした。分配は、小学6年が行った。6年が1番多くもらって、下になるほど金額は少なくなった。初めてもらったのは5円くらいで、6年生の時には千円くらいだったと思うので、金額はかなり差があったと思う。夜明け頃に解散した。



笹振りと鉦叩き



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



さなぶり関係の位置図

(6) ^{なかあらい} 中新井区

1) 地区の概要

大洲地区の南端東寄りに位置し、江戸時代には中新井村で、『遠淡海地志』に戸数30、西瓜が産物とある。

明治10年に合併して東大洲村となり、現在は大洲地区の区名として残る。

区の北端近くを県道相良大須賀線（旧国道150号線）が東西に横切り、この沿線にいくらか人家があるが、集落はこの道路から100mほど南に形成されている。

世帯数は、昭和29年に47、40年に49、54年に57、平成22年に69と昭和40年頃から少しずつ増えている。

2) 平成23年の概要

i 準備

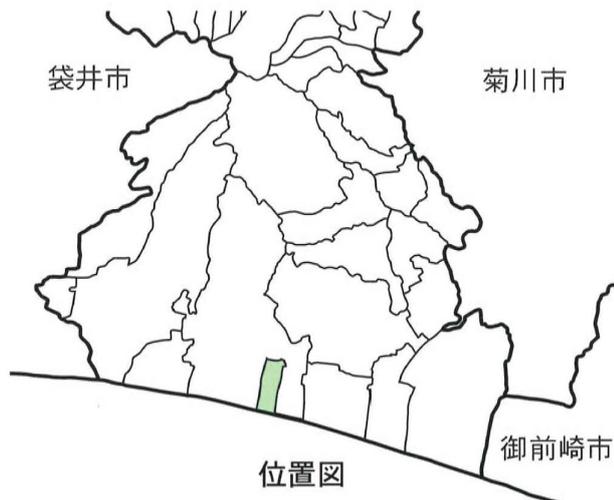
参加者は小学生の男児であるが、今年は4年生以上がないため、小学3年生以下8人で行うこととなる。本来の役割は、親方・袋持ち・鉦叩き（小学6年）、貧乏神（笹拾い・5年）、大笹（4年、3年）、小笹（2年、1年）となっている。

6月18日（土曜日）の午前、親方と保護者が撞木にする木を採りに行く。撞木には、浜区と岡原区の境の山に生えているウバメガシの枝を使う。「ウバメガシを使う理由は、子どもでも簡単に木の皮を剥くことができるためだ。」と保護者は言う。直径2.5cmほどの太さの枝のY字に枝分かれした股の部分で一枝を切り落とし、全体を20cmほどの長さに切って皮を剥き、撞木ができあがる。次に、区長宅から借りてきた鉦を海岸に持って行き、海水に浸した後に砂浜の砂で磨く。「海水に浸すのは清めるためだ。」と言う。その後、出荷場まで戻り、近くに生えている樺の実を取ってきて、半分に割って油分で鉦を磨いて錆を防ぐ。シデの付いた右巻きの縄を鉦のまわりに付ける。

午後、子どもと保護者が出荷場に集合する。子どもと男性の保護者は、そこから300mほど離れた場所へ笹を採りに行く。鉦叩きと笹拾いを除く全員が行う笹振り用と、未就学の男児のいる家庭に届ける笹を用意する。

雄竹の新竹を、大笹用に4.6m、中笹用に3.7m、小笹用に3m程度の長さにして藪から切り出し、それをさらに子どもに合ったサイズに切る。

笹を取りに行っている間に、女性の保護者



集落の景観



撞木作り



鉦洗い

が出荷場で筐に付けるシデを作る。

筐を持って出荷場に戻ってきた子どもたちが、保護者に手伝ってもらって筐にシデを付ける。大筐には13枚、中筐には7枚、小筐には5枚のシデを付ける決まりになっているとのことである。シデを付け終わった筐は、出荷場に入れておき、シャッターを閉めて、一旦解散する。

ii 当日

6月19日（日曜日）の午前2時50分頃、親方兼鉦叩き兼袋持ちが出荷場に来て、前の道路際で集合の鉦を叩く。午前3時頃、子どもと保護者、区長が出荷場に集合する。

筐振りは、県道相良大須賀線(旧国道150号線)沿いにある区長宅から始めて、道路沿いの民家を払った後、100mほど南にある集落に向かう。

筐振りは、最初に親方が玄関で「ネンネコヤイトササヤイト」の唱えごとの部分を鉦で1回叩き、その後で筐振り役が筐を左右に揺るとともに「ネンネコヤイトササヤイト オオブリヤイトササヤイト」を2回どおり唱える。貧乏神も一緒に唱える。鉦叩きは、この唱えごとの時も叩き続ける。唱えごとの途中で家人が玄関から出てきても、2回どおり唱える。親方がお礼の金を受け取ると「今年もたくさんお金がもうかりますように。」とお礼を言う。未就学の男児のいる家では、前日に配っておいた筐を回収する。そして次の家に向かう。順路は、時計回りが基本とのことである。貧乏神は、回る家や道路に落ちた筐・シデを回収する。

最後に、大日堂で筐振りをを行うが、唱えごとの回数は3～5回と、一般家庭より多い。

これですべての筐振りが終わり、集落の北西にある墓地の脇の竹藪に筐を納める。納めた後は、絶対に後ろを振り向いてはいけない決まりである。ちなみに、筐を納めるこの場所のことを、保護者は「おたちう様入口脇の竹藪」と呼んでいる。



集合の鉦叩き



大日堂での筐振り



筐納め

笹を納め終わって、全員出荷場に戻る。親方とその保護者は、シャッターを開けて建物内に入りシャッターを閉める。中で2人は、もらい忘れた家がないか確認し、参加者のお金の配分、未就学の男児に分けるお金の計算をする。それ以外の人は外で待つ。しばらくすると、シャッターの下が少し開き、参加した子どもの名前が一人ずつ呼ばれ、親方からお金が渡され、6時過ぎに終了する。

未就学の子どもには、さなぶりが終わったその足で、3年生の親方2人が手分けして金を渡しに行く。

本来ならば、その後、「さなぶり引継書」を小学5年生に申し送るわけであるが、今年の親方が来年もさなぶりの最年長であるため、この引継書の申し送りはない。

3) 昭和27～34年頃の例

昭和22年生まれの男性の記憶による。

さなぶりの実施日は、大洲地区で決めていて、田植えが終わった6月下旬の日曜日であった。参加者は、0歳から小学6年までの男児であるが、実際に出てくるのは幼稚園くらいからであった。

準備は、前日に出荷場に子どもが集まって行った。笹は、集落の南側にある新田山に全員で出かけ、男竹の新竹を採った。安龍院祈祷所で準備してくれたシデを4、5枚、笹に付けた。鉦は、海へ行って砂で磨いた。海水には漬けなかった。鉦に付いた砂は、自然に乾燥させて落としていた。撞木は、全員で野賀の山に行って藤のつるを切ってきた。



お礼金の分配



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)

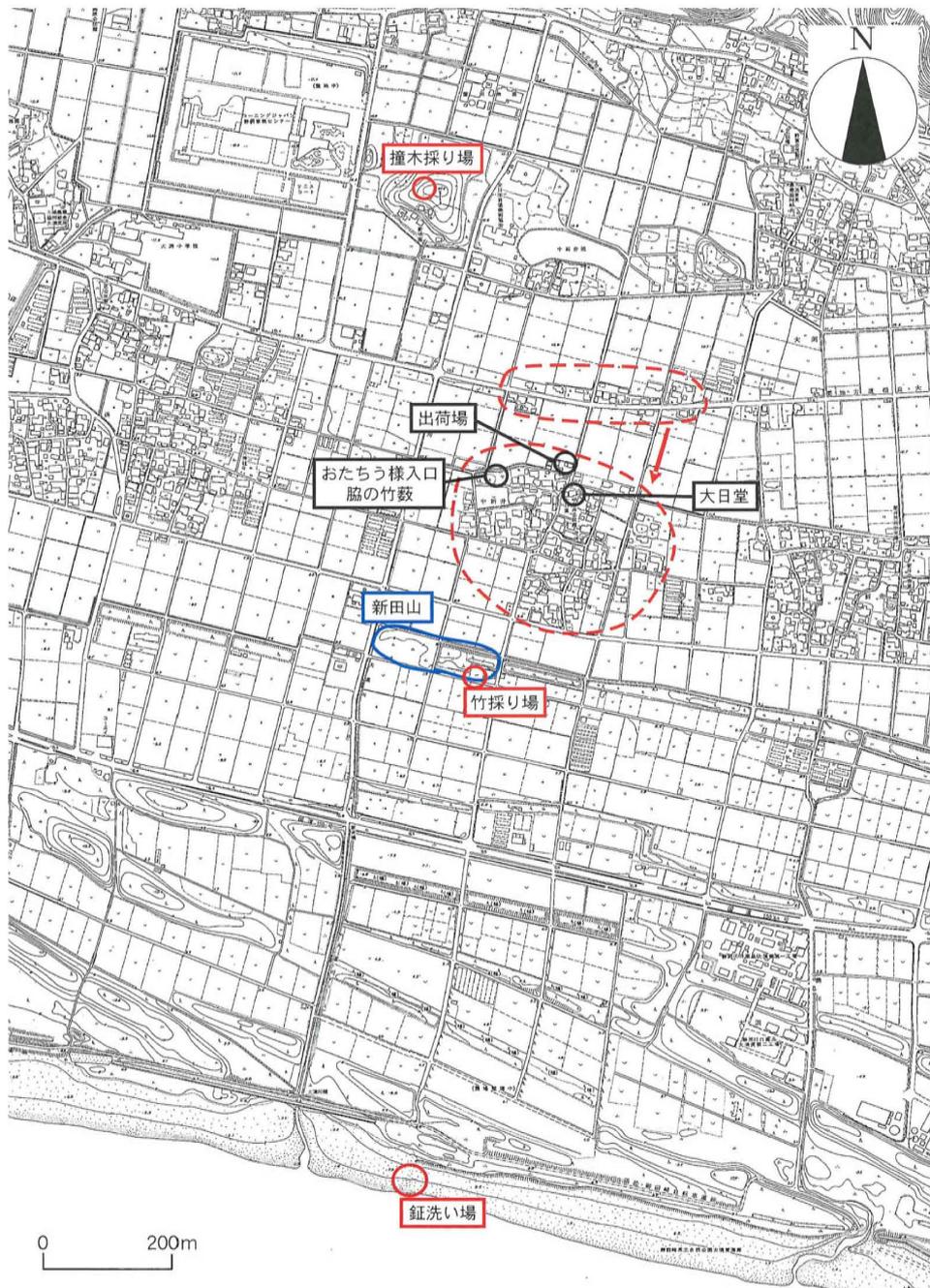
当日の出発地点は、現在と同じ出荷場であった。親方、鉦叩き、笹振り等の行列の順番は特になかったが、親方と鉦叩き（小学6年）、笹拾い（4年）、他は年齢が大きい者から大笹、中笹、小笹を持った。

鉦叩きが、鉦を叩きながら唱えごとを言うと、続いて皆が唱えごとを言い、笹を左右に振った。唱えごとは、「ネンネコヤイトササヤイト オオブリヤイトササヤイト」であった。

お払いの最後は大日堂で、笹を納める場所は新田山であった。納めに行く時は、後ろ向きで行くように上級生に言われていて、後ろ向きで歩いて行って、上級生が掘った穴に落ちた子どももいた。

出荷場に戻ると、6年生がお礼の分配を行った。金額は、年齢によって差があった。参加できない乳幼児にも金を分けた。

鉦は、戦前は大きな双盤で吊り綱に天秤棒を通して、2人で担ぐ大きなものだったが、戦時中に供出したため、以後使われなかったとのことである。



さなぶり関係の位置図

(7) ^{あらい}新井区

1) 地区の概要

大淵地区の南東端に位置し、江戸時代には大新井村といった。『遠淡海地志』には、戸数40～50、貞永寺末の高泉寺、産物として西瓜が挙げられている。

明治10年に合併して東大淵村となり、新井が大淵地区の区名として残る。

区の北端近くを県道相良大須賀線（旧国道150号線）が東西に横切り、この道路沿いと200mほど南の2か所に集落が形成されている。南側の集落は、江戸時代に横須賀から海沿いの村々を通る道沿いに形成された集落である。

世帯数は、昭和29年に66、40年に69、54年に76、平成22年には82と増加している。

2) 平成23年の概要

i 準備

参加者は小学生の男女で、14人が参加する。役割は、鉦叩き・集金係（福の神）が6年、笹拾い（貧乏神）が5年、4年生以下が笹振りとなる。笹の長さは適当で、大笹、中笹、小笹といった区別はない。

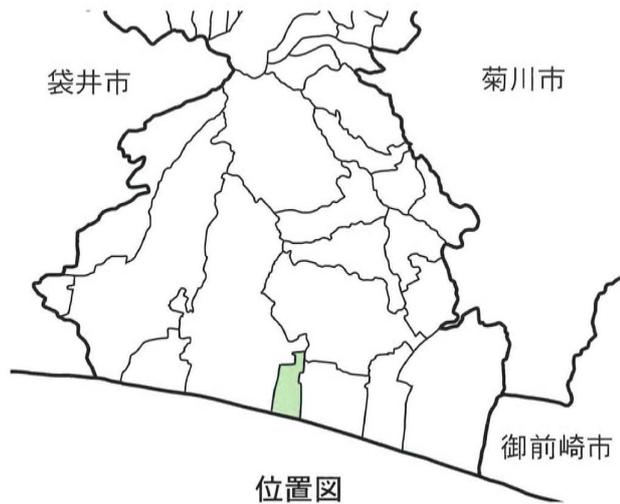
6月18日（土曜日）の午後、全員と保護者がネリ小屋に集まり、準備を行う。

まず、子どもと男性の保護者で笹を採りに行き、保護者が切り出した竹を子どもが受け取る。笹は、新竹で、3.3m、2.5m、2mほどの長さに切る。ネリ小屋に戻ると、女性の保護者が作ってくれたシデを笹に付ける。シデの枚数は、5枚と決められている。

その後、鉦磨きを行うために、上級生の男児5人と男性の保護者が、1.2kmほど離れた開^{ひらき}川の河口へ自動車に向かう。河口へ着いたら話をしない。鉦は、男児が交代で、真水で砂を研磨剤にして早苗で磨く。帰り道は、後ろを振り向かない。

ii 当日

午前1時30分、保護者と子どもがネリ小屋に集合する。行列は、親方、集金係、鉦叩き、笹振り、貧乏神の順番である。笹振りは、区長の家から始める。お払いは、鉦に合わせて「ホーラヤイト ネンネコヤイト」と唱え、笹を振る。順路は、区内を時計回りに回る。お



集落の景観



鉦磨き



鉦叩き(平成14年)

礼の金をもらって、礼を言って次の家に向かう。区内を回り終わると、ネリ小屋に戻ってくる。笹は、区の役員がまとめて納める。

お礼の金は、親方衆が配分場に入り、配分を考える。年齢と役割によって、公平に分け、午前7時頃解散する。

3) 大正15～昭和7年頃の例

大正9年生まれの男性の記憶による。

実施の日は、6月30日で決まっていた。田植えの最後は、苗代田だった。他の田植えが片付くと苗代田を耕し直して、田植えを行った。これが、さなぶりの前日か2日くらい前のことだった。さなぶりの日は「農上がり」とも呼ばれ、嫁を実家に帰らせたり、ご馳走を食べたり、一日ゆっくり過ごした。

新井区では、生まれたばかりの子どもから高等小学校1年までが対象であったが、実際に出てくるのは、就学直前くらいの子どもからであった。親方が、どこの家で男児が生まれたかちゃんと把握していた。

役割は、親方・集金（高等小学校1年）、鉦叩き（尋常小学校6年）、大笹（5年）、笹拾い（4年）、小笹（3年）、それより下の年齢の子どもは何も持たないで参加した。

さなぶりの前の日曜日、上級生が野賀の熊野神社の清掃をかねて撞木を採りに行って、藤のつるをたくさん採ってきたこともあった。笹は、どこの家にも竹藪があったので、各自持ち寄って、大笹、小笹にした。シデは、子どもたちが半紙を切って作り、笹に付けた。付ける枚数は、特に決まっていなかった。磨き砂（米を白で挽く時に入れる粉）・早苗・普門寺草（ハナカタバミ）・鉦を「やと」と呼ばれていた海岸近くの池に持って行って、鉦を磨いた。磨き終わった残りの早苗は、「やと」に植えてきた。



お礼金の分配(平成14年)



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)

さなぶり当日は、午前3時頃に新聞縦覧所に集合した。上級生は、夕食後から新聞縦覧所に詰めていて、さなぶりが終わるまでほとんど寝ずの状態だった。区長の家から時計回りに進んでいったが、区長の家の場所によっては、時計回りに回るのが難しいこともあった。鉦叩きは、さなぶりの間、ずっと鉦を叩き続けていた。

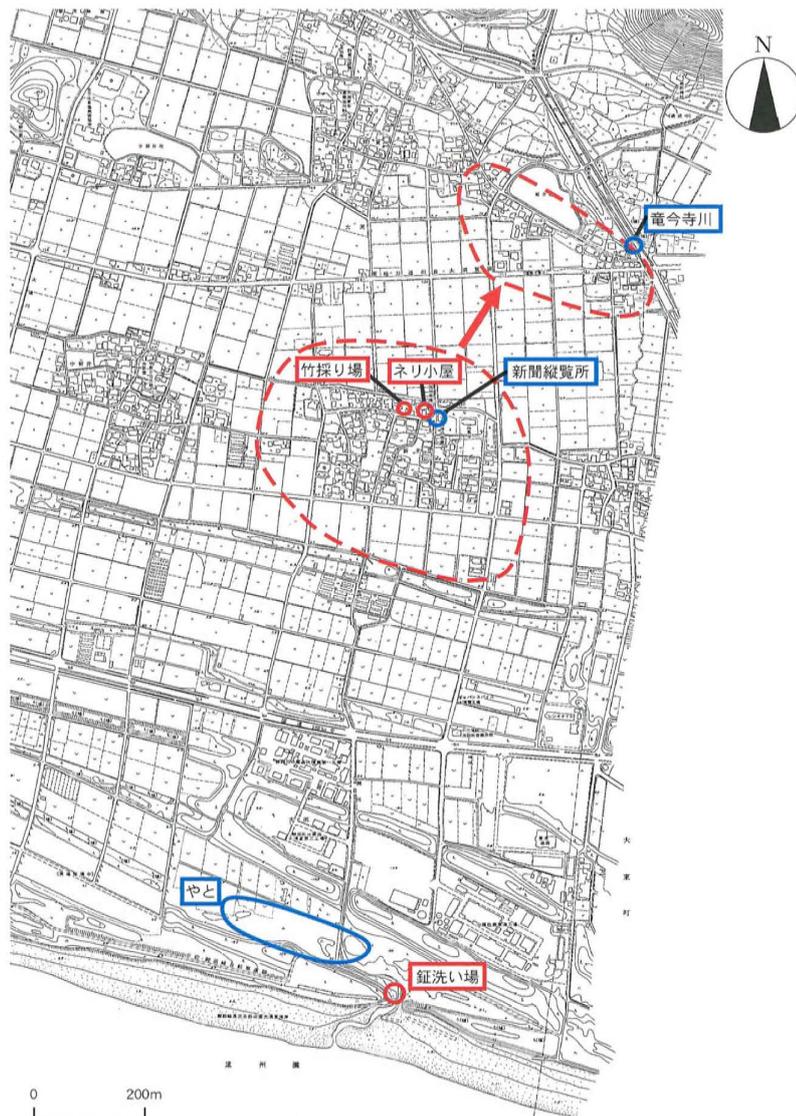
鉦振りの時は、全員が敷地に入り、大鉦と小鉦が、一列に並んで軒先を払った。「ホーホラヤイト ネンネコヤイト」の唱えごとは、大鉦と小鉦が一列に並ぶと、鉦に合わせて全員が自然に唱えた。

親方は、裕福そうな家では「もっとくりよう、もっとくりよう。」と、お礼をねだることもあった。お礼は、粗麦だった。どれだけお礼がもらえるかは、親方の実力にかかっていた。

鉦振りが終わると、竜今寺川へ納めた。納めた所から新聞縦覧所までは「魔がついてくる。」と言って振り向かなかった。新聞縦覧所に戻ってくると6時頃になっていた。お礼にもらった麦を、保護者に俵に詰めてもらった。この時だけ、保護者が出てきて手伝った。麦の詰まった俵が、3つか4つくらいでき、これを荷車に乗せて、みんなで野賀の米麦等の問屋に売りに行った。各家から寄せ集めた麦で品質にばらつきがあるため、値段は安かった。

すべて現金に換えて新聞縦覧所に戻ってきた時間は、はっきり覚えていないが、午前10~11時頃になっていた。親方が、売った金を分配した。行事に参加できない就学前の男児の家には、親方が金を届けに行った。

初めてもらった金は、1銭だった。



さなぶり関係の位置図

(8) のが 野賀区

1) 地区の概要

大湊地区の中央東隅に位置し、江戸時代には野賀村といった。『遠淡海地志』には、戸数30余り、貞永寺末の正伝庵しょうでんあんと三社権現の記載がある。江戸時代に横須賀から相良に通じる道が集落を通っていた。

明治10年、合併して東大湊村となり、現在大湊地区の区名として残る。

世帯数は、昭和29年に66、40年に68、54年に79、平成22年に92と増加傾向にある。

2) 平成23年の概要

i 準備

参加者は、小学1年から中学3年までの男児11人で、役割は、鉦叩き、大笹4人、小笹4人、ごみ拾い2人である。中学3年が3人いるため、1人が鉦叩き、2人が大笹を務め、他は学年順に大笹、小笹、ごみ拾いを務める。

6月18日（土曜日）の午後、子ども全員と保護者、区の三役が公会堂に集合し、3mくらいの小笹を墓地に、5mくらいの大笹を公会堂の裏山へ採りに行く。その後、小笹に10枚くらい、大笹に30枚くらいのシデを付ける。鉦は磨かない。平成14年の時は、海で鉦を磨いている。

ii 当日

午前0時頃、子どもと保護者が公会堂に集合し、笹振りに出発する。11人一緒に歩くが、笹振りは2班に分かれて2軒を同時に行き、また11人一緒になる。鉦は道中ずっと叩き続ける。

笹振りは、「チャンチャコヤイト
ホーホラヤイト」の唱えごと3回とともに笹で軒先を払う。

集落は、竜今寺川の西に形成されているが、川の東側に1軒あるため、その家をお払いを終る。そこから、公会堂まで500mほどの道程があるが、後ろを振り向いてはいけない。午前4時頃、公会堂に着いて笹を納め、全員帰宅する。

午前8時頃に公会堂へ全員集合し、上級生が手分けしてお礼をもらいに回り（各戸500円と決められている）、



位置図



集落の景観



鉦磨き(平成14年)



小笹振り(平成14年)

他の子どもはごみ拾いに回る。上級生が公会堂へ帰ってきて、中学3年がお礼の金の集計と分配を行う。学年によって金額は異なり、余りを中学3年で配分する。その後、中学3年生が手分けして、未就学の子どもへ金を渡しに行く。

3) 昭和28～36年頃の例

昭和22年生まれの男性の記憶による。

さなぶりは、田植えが終わった後の週末に行われていて、参加者は小学1年から中学3年までの男児で、30人くらいはいたと思う。

役割は、親方(中学3年)、笹拾い(2年)、鉦叩き(1年)、大笹・中笹・小笹は他の者が学年順に務めた。

さなぶりの1～2週間前に撞木採りに行った。小学校の高学年から中学生が、区の北側の山に採りに行った。何本も採ってきた記憶はない。前日に、笹採りに行った。小学校の高学年から中学生が、撞木採りと同じ山に行って、5mの大笹、3mの中笹を採った。1.5mの小笹は、各自で準備した。正伝庵で、大笹、中笹、小笹にシデを付けた。シデの枚数は決まっていなかったと思う。鉦を磨いたが、海や川へ行って磨いた記憶はない。

当日、午前3時から4時頃、区長の家から始めた。隊列は、先頭から、小笹、中笹、大笹となり、鉦叩きが大笹の辺りにいた。親方は、鉦叩きに指示を出すので、鉦叩きの側にいた。笹拾いは、親方が鉦叩きの近くにいたのではないと思われる。2組に分かれて並行して進み、道の左右の家に入って行った。笹振りの時に玄関まで行くのは小笹だけで、大笹が敷地の入口辺りで、中笹は大笹と小笹の間で待機していた。小笹は、軒先を払う真似をするだけで、実際に払うことはなかった。親方と鉦叩きは、「かいど」(屋敷の入口)にいた。笹振りの時、親方は小笹、中笹、大笹が並ぶ様子を見て、鉦叩きに指示を出した。鉦叩きは、親方の指示を受け、鉦を「チャー ン チャンレンボンレンチャー ン」と1回叩く。すると、大笹、中笹、小笹が声を揃えて「チャンチャコヤイト ホーホラヤイト」と、唱えごとを3～4回繰り返す。親方は、頃合いを見て、鉦叩きに終わりの合図の鉦を叩くように指示し、鉦叩きが「チャー ン チャンレンボンレンチャー ン」と1回叩くと、笹振りは笹を振るのをやめて次の家に向かった。この時、家人は玄関から出てきたり、家の中から見ていたりした。

笹振りの最後に集落の北東にある家を行い、竜今寺橋で笹を流し

た。最後の家から橋までの150mほどは、絶対に後ろを振り向いてはいけなかった。ただし、川へ流した後は、後ろを振り向いてはいけなかったという決まりはなかった。流し終わった後、区長宅へ戻り、家に帰った。夜明けには回り終わっていた。

さなぶりに参加した子どもは家で金を預かり、朝食後に区長宅だったか、正伝庵に集まった。それから、みんなで手分けして各家に集金に行った。みんなが戻ってくると、親方が金の分配を行った。未就学の子どもへの金の分配は行っていた。



お礼金の分配(平成14年)

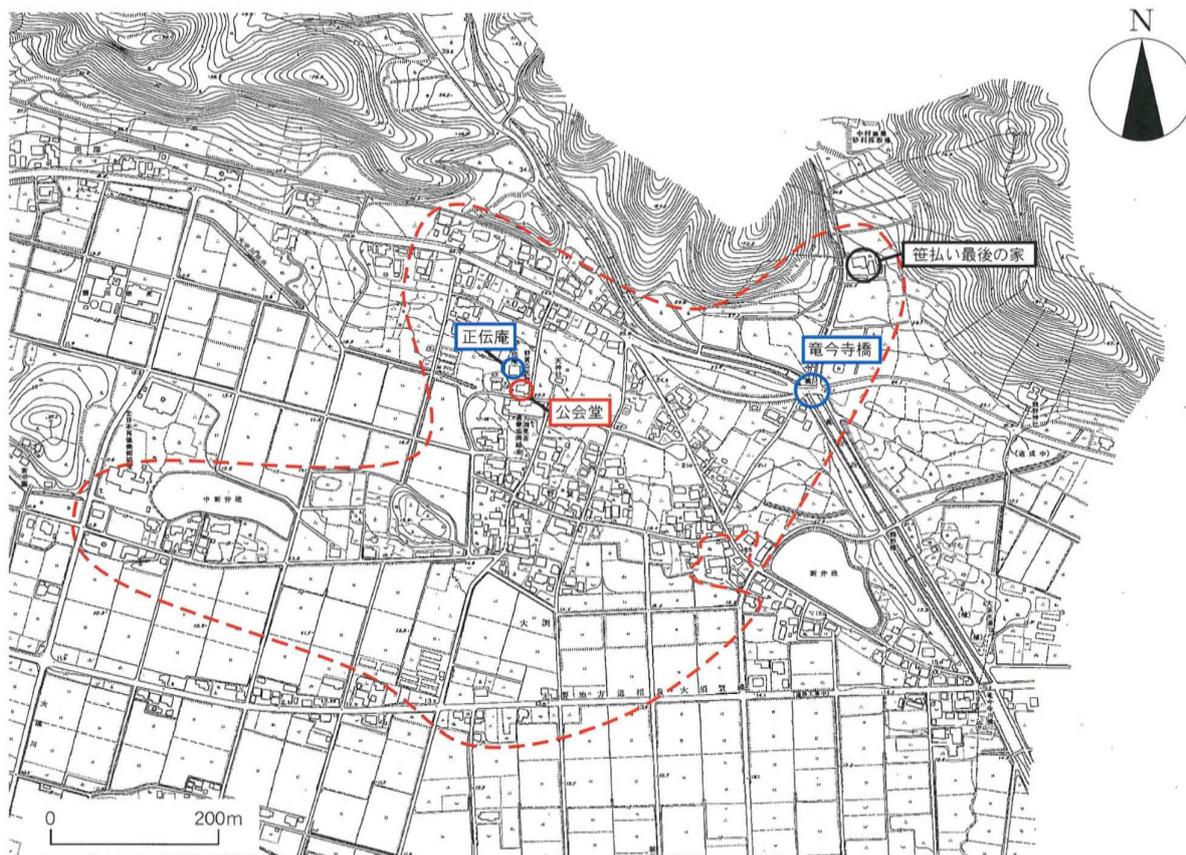


竜今寺橋での笹納め(平成14年)

初めてもらった金は、20～30円くらいで、親方の時は2千円くらいだった。



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



さなぶり関係の位置図

(9) ^{はまの}浜野区

1) 地区の概要

大湊地区の東側に位置し、江戸時代には浜野村といい、『遠淡海地志』に、戸数70、産物に西瓜とある。『校正郷里雑記』には、「全村、皆農民漁業を兼たり」とあり、農業だけでなく漁業も行っていたことがわかる。江戸時代、横須賀から海沿いの村々を通る道沿いに形成された集落である。

明治22年に北側の浜野新田村、東側の浜川新田村と合併し、三浜村となる。昭和17年に三浜村と三俣村が合併し、睦浜村となる。

世帯数は、平成22年に317を数える。

2) 行事の概要

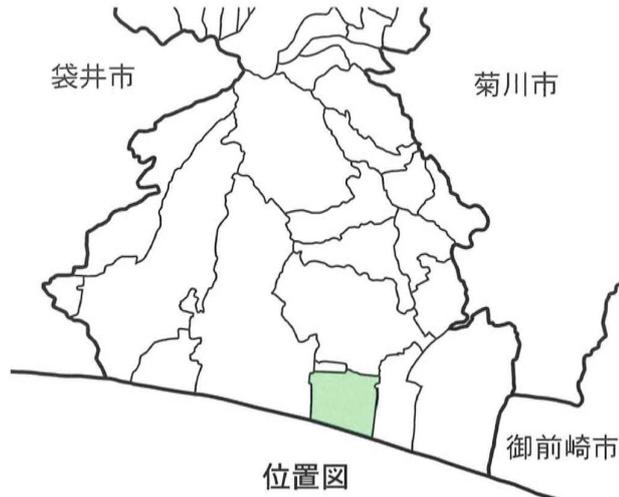
昭和40年代の前半頃に廃れてしまったようである。

3) 昭和20年代の例

昭和13年、15年生まれの男性の記憶による。実施日は、6月末の30日頃で、小学生の男児が参加し、6年生が親方になった。準備は、当日の朝6時30分頃から上級生が区内の神主の家に行き、竹をもらいシデを作ってもらった。竹に3、4枚のシデを付け終わると公会堂に向かった。

公会堂では下級生が待っていて、10時頃から全員でさなぶりに出発した。役割分担は、上級生が鉦叩きやお礼の受け取り、麦の換金を行い、他の者は笹振りを行った。鉦は竹竿に吊り下げてあって前後2人で担ぎ、後方の者がゆっくり「カーン カーン カーン」と叩いた。鉦を「ボンデン」と呼んでいた。鉦叩きは、笹振りとは別行動で、集落の南側の道を進んでいった。鉦叩きの側には、シデを付けた予備の笹、20～30本を縛って束にしたものを持った2人がいた。笹は、上級生から「ずってはいけない。またいではいけない。」と言われ、さなぶり中に笹をずったり、またいざりしたのを上級生が見かけると「縁起が悪いから笹を替えてもらえ。」と言われ、鉦の音を頼りに予備の笹と交換しに行った。笹振りの時には「ネンネコヤイト ホーラヤイト」と唱えながら、軒を払った。払い終わると、上級生がお礼を受け取った。お礼は、現金や麦(大麦、小麦)だった。公会堂から東に向かい、浜川新田との境に使った笹を納めて、公会堂へ逃げ帰った。

納めた場所で、麦を大麦と小麦に分けて、上級生が三俣に売りに行った。みんな公会堂で上級生が帰ってくるのを待っていた。昼過ぎに上級生が帰ってきて、6年生が学年ごとに差をつけて金を分配した。ずいぶん遅い昼食を食べた記憶があるので、すべて終わったのは午後2時頃だったのではないかと思う。



位置図



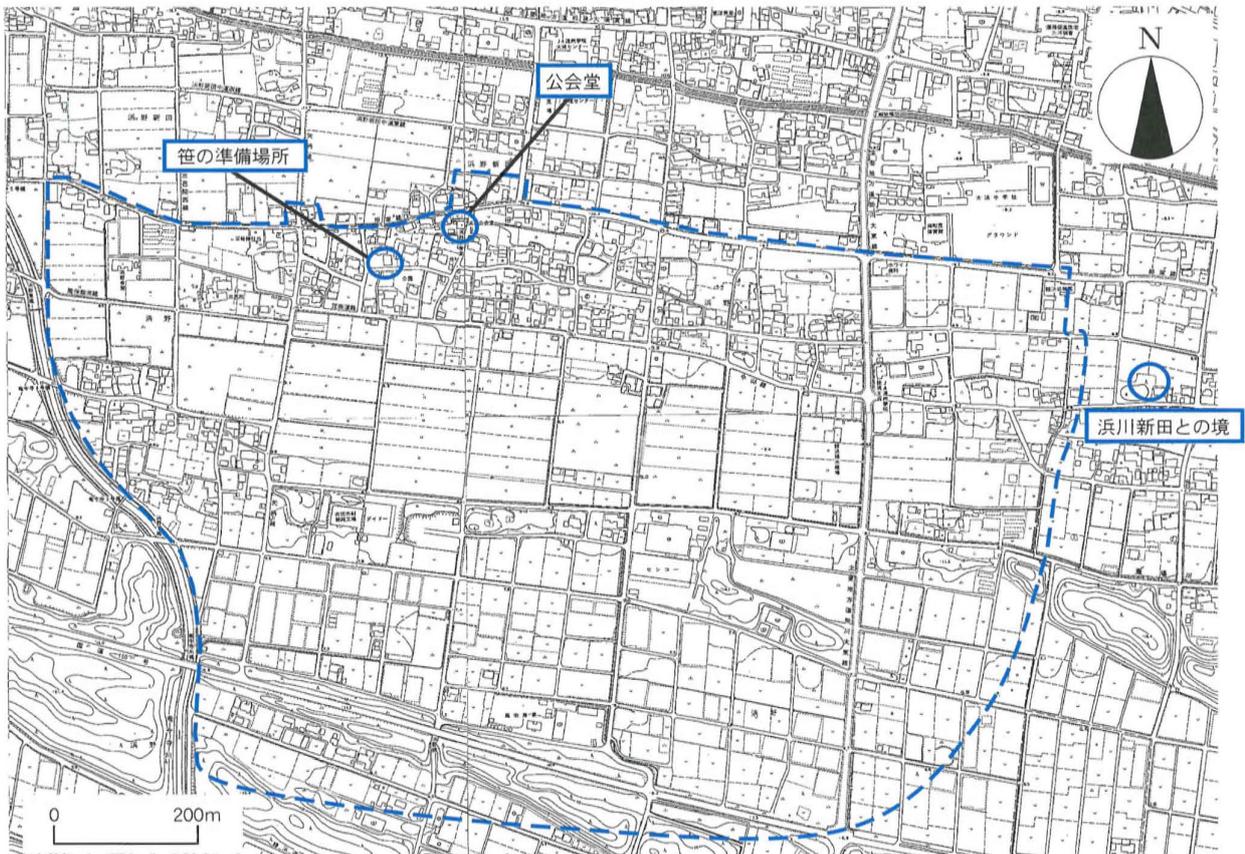
集落の景観



笹を納めた場所



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



さなぶり関係の位置図

(10) ^{みなみおおさか}南大坂

1) 地区の概要

大淵地区の東側に隣接し、江戸時代には西大坂村の一部であった。西大坂村は、『遠淡海地志』によれば、戸数150余戸を数える大きな村で、明治7年に東大坂村と合併して大坂村となる。

南大坂は、西大坂村の南半を占め、東大坂村の報地と隣接する。現在は、南大坂、報地ともに大坂区に含まれ、南大坂は265世帯を数える。

2) 行事の概要

戦前まで行われていたが、戦後廃れてしまった。

3) 昭和16・17年頃の例

昭和6年生まれの男性の記憶による。

実施日は、6月30日前後の頃で、午前から昼過ぎまで行った。参加者は、小学校5、6年の男児と青年団であった。

準備は、青年団が行ってくれた。笹は、シデが5、6枚付いていた。双盤は「ボンデン」と呼ばれ、直径50cmくらいあって叩くと「ポーン」という柔らかい音色であった。双盤を太い竹に吊るして青年が2人で担ぎ、別の1人が叩いた。道中で時々「ポーン」「ポーン」と叩いていた。この双盤は戦争で供出したので、なくなってしまった。

公会堂を出発して、家の軒先を笹で払う時は、「ヤーラ エントー」と唱えた。払い終わると青年団がお礼をもらった。次の家に走って向かった。唱えごとは、道中でも時々唱えていた。笹振りは、集落を西から東に進み、最後に区の北東の与惣川^{よそつ}へ縛って納めた。納めた後は、後ろを振り向かず、まっすぐ前を向いて帰るようにしていた。振り向くと、魔がついてくるというような意味だったと思う。

お礼の分配は、青年団が行った。



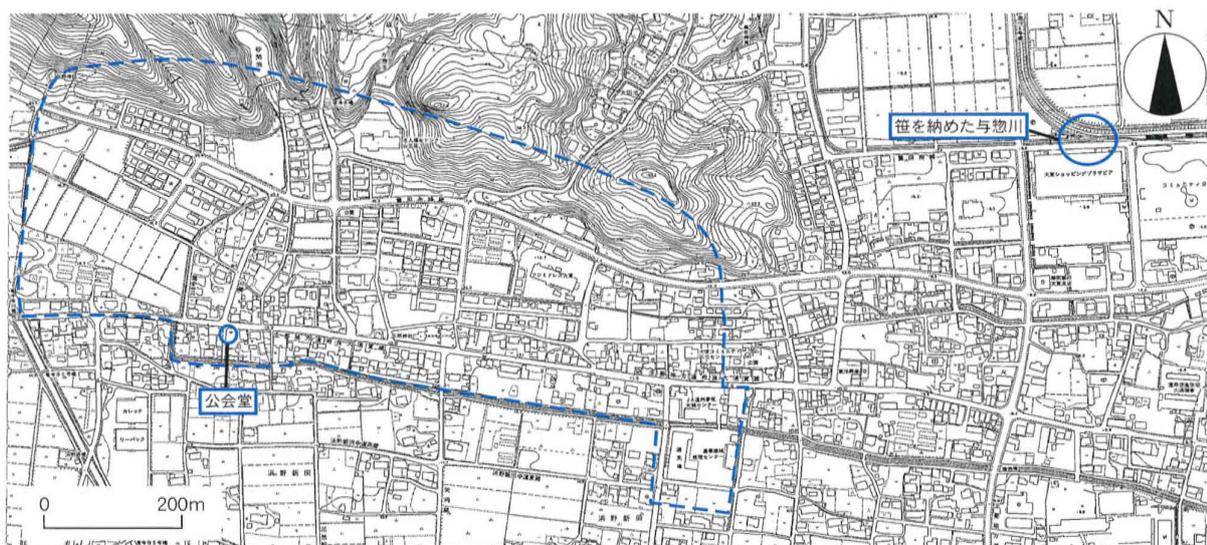
集落の景観



笹を納めた場所



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



さなぶり関係の位置図

(11) 報地

1) 地区の概要

南大坂の東側に隣接し、江戸時代には東大坂村の一部であった。東大坂村は、『遠淡海地志』によれば、戸数150余戸を数える大きな村であった。報地は、『遠淡海地志』では「報士」、『校正郷里雑記』では「保地」と表記され、『校正郷里雑記』には、諏訪大明神と臨濟宗貞永寺末の高松庵の記載がある。東大坂村は、明治7年に西大坂村と合併して、大坂村となる。現在は、南大坂と同じく大坂区に含まれ、262世帯を数える。

2) 行事の概要

昭和30年代の半ばまで行われていたとのことである。

3) 昭和9～14年頃の例

昭和2年生まれの男性の記憶による。

実施時期は、田植えが終わった後で、6月末までには行っていた。学校から帰って、いち早く公会堂へ向かったのが、平日に実施していたと思う。青年団が主体で、子どもは小学6年の男児が中心となっていた。小学校低学年は、お礼ほしさに付いて行った。

準備は、青年団が行ってくれた。子どもたちが公会堂に集まると、青年団から、2mくらいの高さがあり、数本の枝を残し上部に御幣が付いている太めの竹1本と、シデが付けた細めの若竹を数本渡された。本数は、6年の人数分はなかった。双盤は、直径80cm～1mくらいの大きさと、公会堂のイマメの木（ウバメガシ）に吊るしてあって、昼前頃から青年団が叩いていた。特に決まったリズムはなく、さなぶりの間も鳴っていた。

「柔らかい撞木でないと鉦が割れる。柔らかいもので叩くと良い響きがある。」といわれていて、藤の根を撞木にした。

道中は、御幣が付いた太い竹を持った6年生が先頭を歩き、その後を笹持ちと子どもがぞろぞろついていった。「デンデコヤイト ホーライヤイト」と、みんなで唱えながら進んだ。家の敷地に入って笹振りをやることはなく、集落のまわりの田舎道を一回りして公会堂に戻った。

使った笹は、区の北側に広がっていた水田に挿しておいた。

公会堂に戻り、青年団から金をもらった。ただし、わずかな額ですべての子どもに現金が行き渡るといより、飴玉でももらったりしたのではないかと思う。さなぶりは、1～2時間程度で終わった。

鉦は、明治時代の末か大正時代の初め頃に、さなぶりで使うために三州岡崎の鋳物屋に取りに行くと交代で背負ってきたという話を聞



位置図



集落の景観

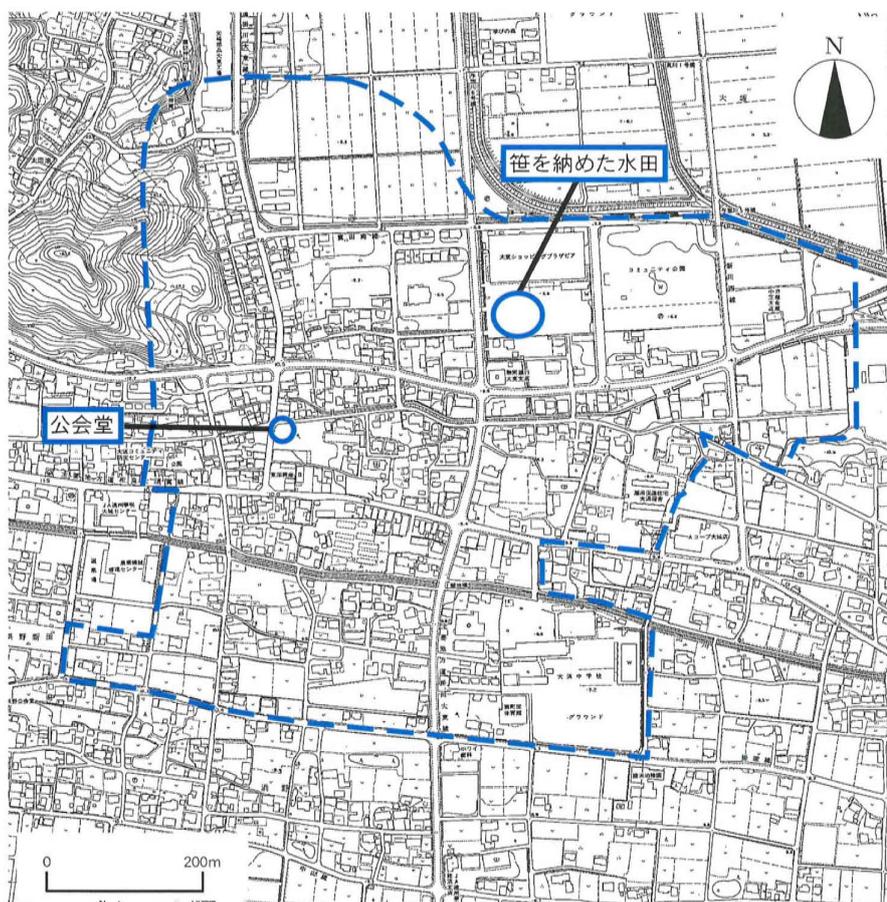


笹を納めた場所

いた。真鍮製で、叩くと「ポーン」という釣り鐘のような鈍い音色であった。幼い頃に、この鉦を竹に吊るして担いでいるのを見たことがあった。この鉦は、さなぶりのほかに、洪水や大火事を知らせるための役割もあると聞いていたが、実際に緊急時に叩いていたのを聞いたのは、昭和17年頃に大湊で発生した山火事が東に燃え広がり集落に迫った時に鳴らした1度きりである。戦争で供出してしまった。



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



さなぶり関係の位置図

(12) ^{みつまた}三俣区

1) 地区の概要

江戸時代には、海岸沿いにあった浜川新田村と北側の東大坂村に挟まれていた。『遠淡海地志』には、戸数20余、貞永寺末の松月庵、産物西瓜等の記載がある。『校正郷里雑記』には、「東大坂の東南にあり、農漁を兼ねてなりわいとす」とあり、寺社は鹿島大明神、臨済宗貞永寺末の松月庵が記載されている。

明治22年にそのまま三俣村となった。昭和17年に南西の三浜村と合併して睦浜村となり、昭和30年に大坂村と合併して大坂村、31年に大浜町、48年からは大東町となり、名は大字として残る。東大坂村に属していた報地は、三俣に隣接する。

昭和2年、袋井と南大坂間を結んでいた中遠鉄道が新三俣まで延長され、新三俣駅が開設された。

現在の世帯数は、425である。

2) 行事の概要

『大東町誌』によると、昭和41年当時、大浜町内では行われているところがあるとのことであるが、今回聞き取りを行った区では昭和37年にはすでに廃れてしまっていたとのことである。

3) 昭和22、23年頃の例

昭和11年生まれの男性の記憶による。

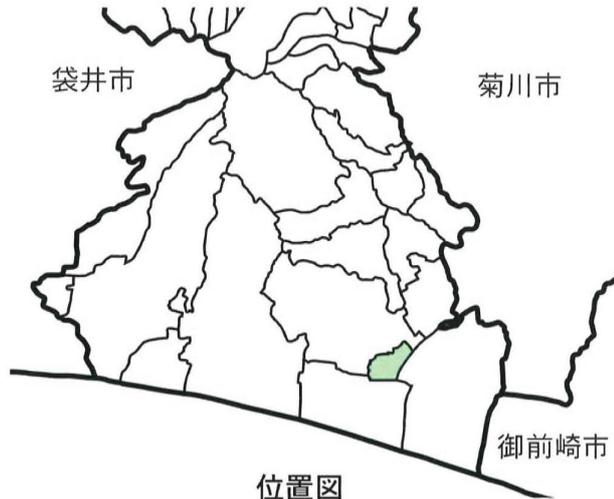
i 準備

持ち物は、ボンデンと笹であるが、これは、当日集合場所に行くとき用意されていた。

ii 当日

実施日は、6月中下旬で、区長が決めていた。さなぶりが近づくと、ガキ大将が小学校5・6年生の中から、オダイ様（裕福な家庭）の子やひ弱な子を除いて、10名程度の参加者を決めた。

学校が終わった午後、中遠鉄道新三俣駅の側にある倉庫に参加者が集合した。そこには、ボンデンとシデの付いた笹が用意されていた。ボンデンは太い竹を切ったもので、子どもの身長より高く、上端に御幣が付いていて上の



集落の景観



鹿島神社



白山神社の跡

方には枝が残っていた。このボンデンを持つ役は、ガキ大将が担当した。笹は5本用意されていたので、5名が笹持ちになり、残りは笹持ちの交代要員であった。

倉庫を出て、まず鹿島神社にお参りしてから、地区内の稲作農家を回った。農家を回る間に白山神社、天伯神社にも寄ったが、松月庵には寄らなかった。

ボンデン役は、家の敷地には入らず、入口に立っていた。笹持ちは、ボンデンが立っている家で軒を払った。軒を払う時には、「デンドコヤイト ホーラヤイトと3回唱えごとをしてから帰ってこい。」とボンデン役に言われていたが、払い終わる頃にはボンデンは次の家に行ってしまったので、笹持ちは息を切らしながらボンデンを追いかけた。こんな調子であったので、笹についていたシデは途中でもげてなくなっていた。すべて払い終わると、笹は村の外れの山に捨てた。日が暮れるまでには回り終わった。

その後、倉庫に戻ると、区長がお金を渡してくれた。金額は200円くらいだったが、横須賀まで行かなければ菓子を売ってくれる店がなかったので、正月や横須賀のお祭りの時に電車に乗って出かけ、菓子を買ってきたと思う。小遣いをもらうことはなかったのでうれしかったし、張り合いがあった。

昭和41年に発行された『大東町誌』の中に「さなぶり」についての記載があるので、要点を挙げておく。

①前日に新竹を切り、鐘を磨く。②当日は双盤を出す^{あざ}字もある。③暁に起きて総代の家に集まり、新竹に御幣を付けてもらい、予め決めた役に付く。④年かきの者が「デンドコヤイト ホーラヤイト」と唱え家の入口で振る。

この様子がいつの頃のことか書かれていないので判然としないが、双盤の記述があることから、戦前の様子の可能性があると考えられる。双盤は、大淵地区の野賀区・中新井区で戦前に使われていて、戦争で供出したとの記憶があることから、戦前のことと推定する。



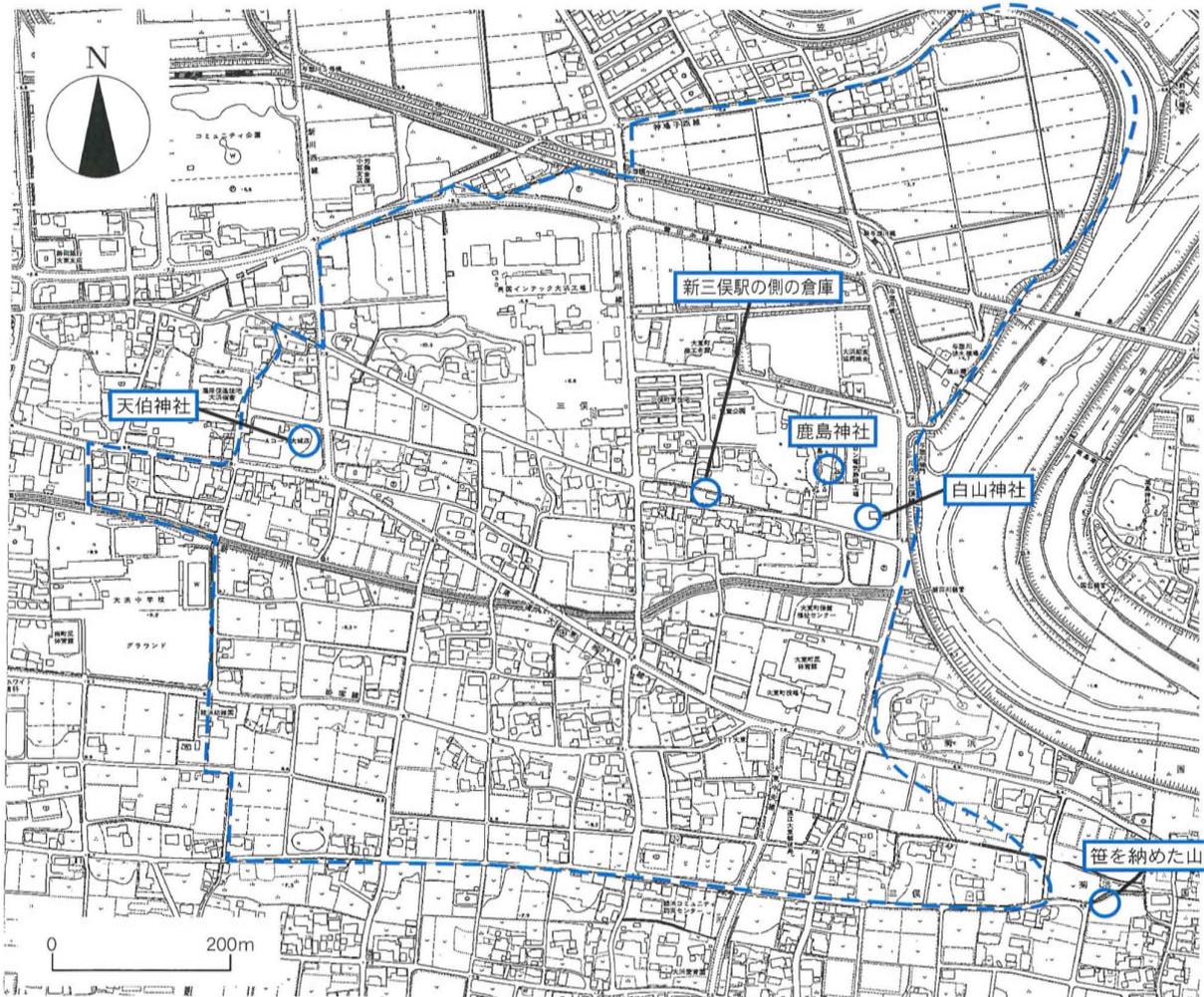
天伯神社の跡



笹を納めた山の跡



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



さなぶり関係の位置図

第2章 送り盆（ショーリョー送り）

1 ヨイトコ系

1 地区の概要

「ヨイトコ」が付く水垂区上組、正道、平野、篠場の行事を、ヨイトコ系として報告する。水垂区上組は「ヨイトコサッサア」、正道は「ヨイトコサッサー」、平野は「ヨイトコ」、篠場は「ヨイトコモイト」と呼んでいる。

これらの地区は、すべて江戸時代には佐野郡に属す農村であった。水垂村は佐野郡の中央、掛川城の北東に位置し、正道村は郡の北西端に近い原野谷川の流域、平野村と篠場村は佐野郡の南西の外れにあたり隣は山名郡であった。

「ヨイトコサッサア」は、水垂の上組で行われている。正道は、水垂から直線距離にして7kmほど離れている。二級河川原野谷川によって形成された丘陵と平野が存在し、そこに集落がつけられている。平野は、小笠山北側の山裾に形成された集落で、周囲のほとんどを丘陵に囲まれている。篠場は、平野に隣接し、やはり周囲のほとんどを丘陵に囲まれている。平野・篠場は、水垂区上組とは直線距離にして6.5kmほど、正道とは9kmほど離れている。

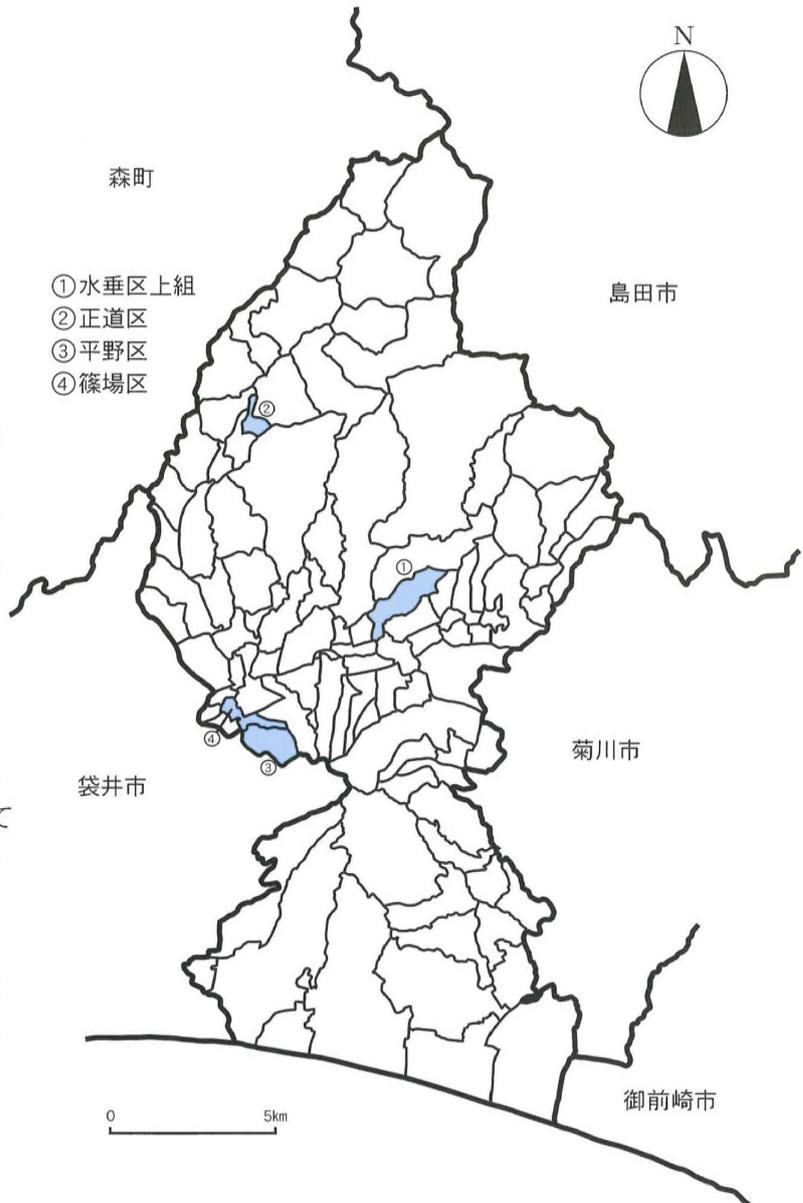
2 行事の概要

実施日は、水垂区上組が7月17日、正道が8月17日、平野と篠場は8月24日である。参加者はすべて小学生で、水垂区上組と平野は男児だけであるが、正道と篠場は女兒が加わっている。時間は、平野と篠場が早朝、正道が午前、水垂区上組は午後に行われる。

これら4か所の行事は、鉦を叩きながら集落を回り、施餓鬼旗せがきびたを付けた笹で軒を払うという共通点がある。ただし、笹の数は正道が1本で、他は子どもたちが各々笹を持つ。

水垂区上組と正道は、集落を回ってそのまま笹を納める。平野と篠場は、笹振りを早朝に行い、その後に精霊送りのための屋台を仕立て、夕方から夜にかけて精霊送りを行う。この屋台を仕立てた精霊送りに、平野は太鼓と大太鼓が伴い、篠場はさらに笛が加わる。

唱えごとは、水垂区上組が「ヨイトコサッサア トコサッサ」、正道が「ヨイトコサッサー オッサッサー」、平野は「ヨイトコヨイト」、篠場が「ヨイトコモイト」である。次節「チャンチャカチャン」で報告する岡津では、かつて精霊送りの時に「ヨイトコサッサア」と唱えたということである。



ヨイトコ系の分布図

3 実施地区

(1) 水垂区上組

1) 地区の概要

水垂は、江戸時代には掛川城の北東に隣接し、『掛川誌稿』に、戸61、社寺は、神祠が上田中に天王八幡宮、中村に天神、別所に白山、大坪に若宮八幡宮、曹洞宗の真昌寺が別所、観音堂が寺谷と記されている。

明治22年に南側の北池新田村、北側の初馬村と合併し、粟本村となる。宅地開発が進み、昭和49年に一部が大字北門となって水垂から離れたが、52年に葛ヶ丘、大多郎ができる。昭和52年の世帯数は260、平成元年に410、22年に673と急激に増加している。

送り盆の行事である「ヨイトコサッサ」は、上組で行われている。上組は、水垂区の北端に位置し、旧初馬村、旧安養寺村と丘陵を隔てている。上組に真昌寺、天神社が含まれるので、『掛川誌稿』に見える字のうちの別所、中村が該当すると思われる。

上組の世帯数は、平成2年に45、平成22年に111であるので、急激に増加している。

2) 平成23年の概要

i 準備

参加者は、小学1年から中学2年までの男児である。7月17日(日曜日)の午後4時30分が集合時間なので、参加者はそれまでに各自笹を採ってきて、家にある施餓鬼旗を付けておく。笹は、新竹を使用し、施餓鬼旗は、7月13日からの盆のために真昌寺が配布したものである。施餓鬼旗は、1枚に「南無多寶如来 南無甘露王如来 南無妙色身如来 南無廣博身如来 南無離怖畏如来」と五如来の名が印刷されたもの、1枚に「南無多寶如来」等別々に印刷されたもの、手書きの「西方広目天王」「北方多聞天王」「東方持国天王」等がある。

家に笹のない参加者の分は、真昌寺が用意しておき、集合時間に配布する。

役割は、鉦叩きと笹振りがある。笹振りは2班に分かれるが、鉦はひとつなので、昔からの集落を回る班が鉦を使用する。

ii 当日

7月17日(日曜日)の午後4時30分、参加者13人と保護者が上組のほぼ中央にあるごみ集積所に集合する。真昌寺の副住職が来て、笹のない子が使う笹、鉦と撞木を子どもに渡す。鉦と撞木は、かつては安養寺区との境に近い家で保管していたとのことである。



位置図



集落の景観

最初に、副住職から「ヨイトコサッサ」のいわれ等についての話があり、その後、保護者が2班に分けるための名前を呼ぶ。1班は道路に沿った昔からの集落を、もう1班は平成5年頃にできた住宅団地を回る。

昔からの集落を回る班は、道中も鉦を叩く。家に着くと笹振り役が玄関先で「ヨイトコサッサ トコサッサ」と唱え、その後に鉦を叩く、というように笹振りと鉦叩きを交互に繰り返す。回数に決まりはない。家人が出てきてお礼を渡してくれる。参加する子どもがいない家では、施餓鬼旗を笹に付けてくれる。

団地を回り終わった班がごみ集積所辺りで合流して、安養寺との境の方向にある家を回り、その後、真昌寺の門前にある家々を回り、真昌寺の本堂前に笹を納める。鉦と撞木を真昌寺に返す。

最上級生がお堂に入り、もらったお礼の集計と分配について相談する。金額が決まると年少の子どもから呼ばれて金を渡される。

ちなみにこの行事については、次のような説話がある。

昔、水垂の上組に疫病神がいて方々の家に疫病をまき散らすので、みんな困っていた。ある時、この里を通りかかった一人の坊さんがこの話を聞き、人々の苦しみを救うために里の寺に籠もりお祈りをした。

三七、二十一日目、7月17日の朝、施餓鬼旗を体中に貼り付けた坊さんは、1軒1軒を走り回り、安養寺の方へ走り去っていった。それから、この里に「ヨイトコサッサ」が行われるようになった。



笹振りの道中



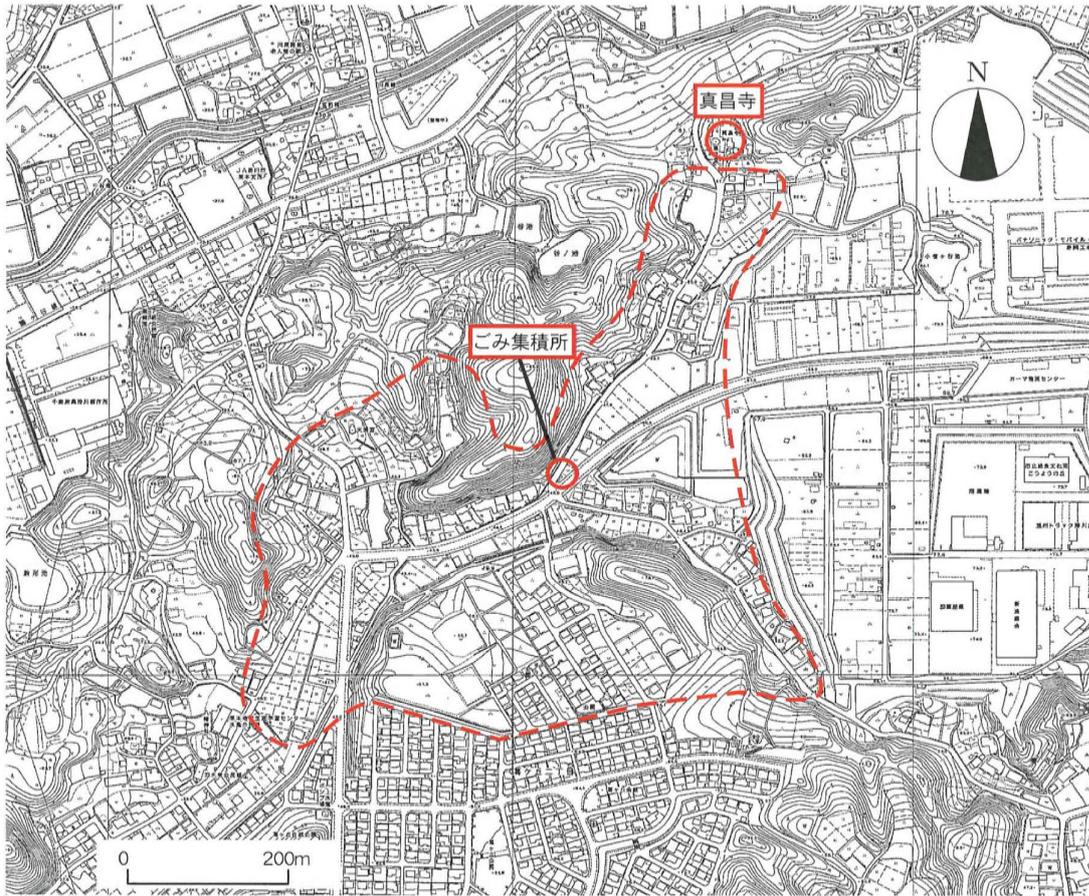
笹振り



施餓鬼旗の受け取り



お礼金の受け取り



現在のヨイトコサッサ関係の位置図

3) 昭和21～28年頃の例

昭和15年生まれの男性の記憶による。

行事は7月17日と決まっています。参加者は、小学1年から中学2年の男児であった。役割は、年長が鉦叩きとお礼を受け取るこんじき（乞食）になった。笹振りが2班に分かれるので、こんじきが2人いた。

7月13日、真昌寺の本堂に行き、お施餓鬼で使うためにぶら下げてあった施餓鬼旗を取ってきた。

7月17日、学校から帰ってくると、保護者が新竹を採ってくれた。ヨイトコサッサが始まる前に、施餓鬼旗を笹に付けておいた。

午後3時頃、笹を持って現在のごみ集積所に集合した。鉦と撞木は、安養寺との境にあった家で保管していたので借りてきた。

道中は、「ヨイトコサッサ トコサッサ」の唱えごとに合わせて、ずっと鉦を叩いていた。鉦叩きは、家の敷地には入らず、道で笹振りに指令を出した。笹振りは、指令のあった家に行き、鉦の音に合わせて「ヨイトコサッサ トコサッサ」と唱えながら軒先を払った。参加する子どもがいない家では、笹に家人が施餓鬼旗を付けた。笹振りが終わって次の家に向かう時、こんじきが来てお礼を受け取った。初盆の家で提灯を回収することなく、施餓鬼旗だけであった。

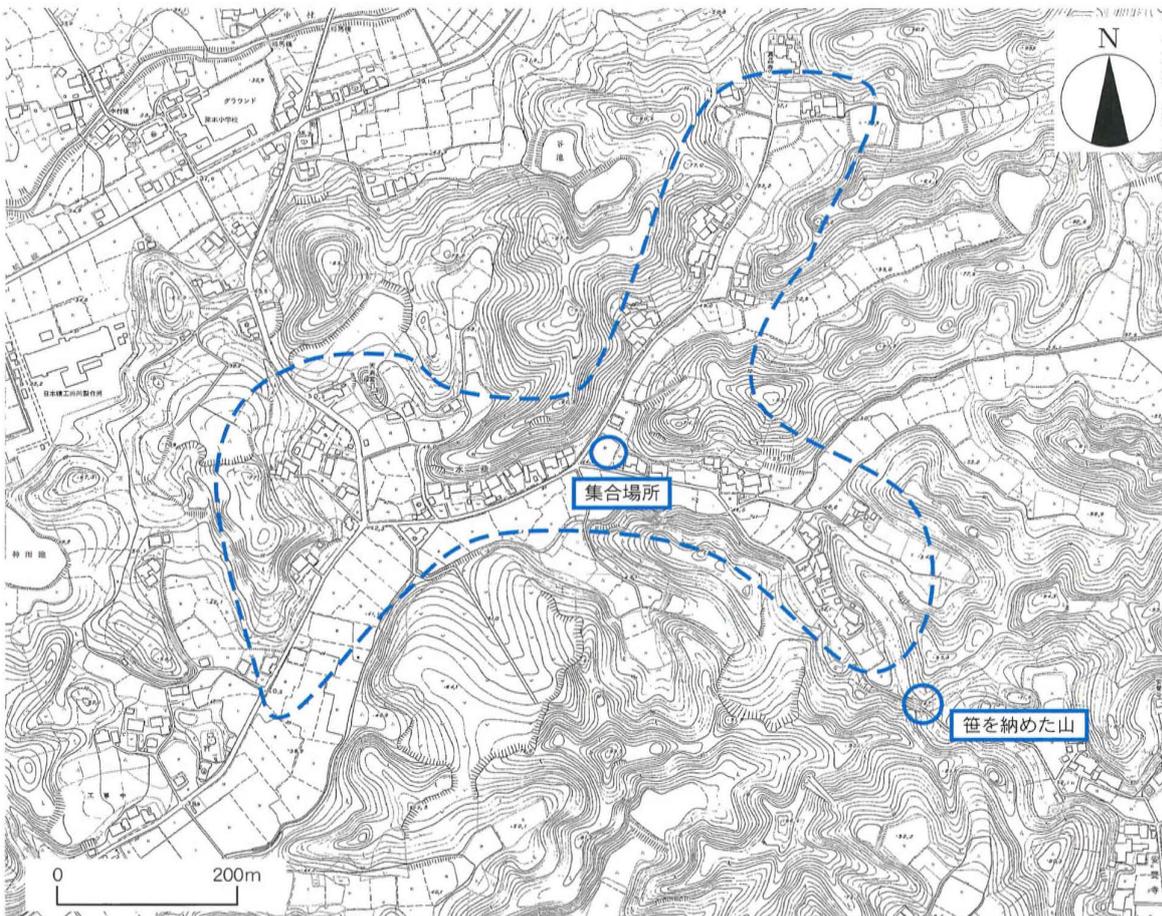
家々を払い終わると、安養寺との境にある山に笹を納めた。笹を納めた山で、上級生がお礼を分配した。小学1年で5～10円、中学2年で千～2千円くらいもらっていたと思う。もらった金はその日のうちに使ってしまうなければならないというので、みんなで駄菓子や文房具を買いに行った。薄暗くなってから家に帰ったこともあった。



笹を納めた山の跡



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



過去のヨイトコサッサ関係の位置図

(2) 正道区

1) 地区の概要

正道区は、掛川市の北西に位置する森町と接する原田地区に属す。区の北東隅から流れてきた二級河川原野谷川はらのやが丘陵にぶつかり流れを北西に変え、「V」字状に流れる川沿いに幅150～250mほどの平野が広がる。江戸時代には正道村と呼ばれ、『掛川誌稿』には神社として天満宮、唐土権現、千勝権現、(曹洞宗)春昌寺しゅんしょうがあげられている。『遠淡海地志』には20余戸と記載がある。

明治6年に桑地村くわじ、枋原村とうばら、高山村たかやまと合併し、原里村となる。現在、掛川市大字原里の通称地名、区名として残る。平成10年頃から、平野の中央を横切る県道の新設と南側を通る新東名高速道路(第二東海自動車道)の建設により、集落を取り巻く景観は変化している。

世帯数は、昭和52年に27、平成22年に30と増加している。

2) 平成23年の概要

i 準備

行事は「ヨイトコサッサー」と呼ばれ、参加者は、幼稚園の年長から小学6年までの男女4人である。笹振りに使う竹1本は、最年長者の中の当番の保護者が用意する。

ii 当日

8月17日(水曜日)の午前8時頃、参加者が当番の家に集合する。

道中は、笹を先頭に鉦に合わせて当番の「ヨイトコサッサー オッサッサー」の唱えごとを、他の子どもが復唱しながら区内を上から下へ進んでいく。鉦叩きは、昭和30年代とは異なり、1人が手に提げて叩く。

家々では、盆ひらに寺(最福寺)からいただいた施餓鬼旗を笹に結び付けて、お礼を渡す。子どもたちは、軒先を笹で払う。最後の家が済むと、子どもたちにお礼金を平等に分配し、当番の保護者が用意した菓子を配り、午前中に解散する。笹は、当番の保護者が処分する。



位置図



集落の景観



鉦

3) 昭和29～34年頃の例

昭和22年生まれの男性の記憶による。

8月17日に行い、参加者は小学生の男児であった。午前8時頃、区内の上で新竹を採った。そして、区内を上から中、下と笹振りをして回った。道中は、先頭の竹笹、お礼をもらう人、鉦叩き、茶摘みかごを担いだ人、その他の子どもの順に続き、鉦叩きの「カンカカンカンカンカン」と「ヨイトコサッサー オッサッサー」の唱えごとを交互に繰り返しながら進んだ。鉦は竹竿に吊して前後2人で担ぎ、後ろの者が叩いた。各家では、盆に寺からいただいた施餓鬼旗をこの日までとっておき、笹振りにくると笹に結び付けた。子どもたちは、軒先を笹で1往復払った。お礼は金のほかに、カボチャ、ナス、モガリ(長豆)、白米をいただいた。直径40～50cm、高さ50cmほどの茶摘みかごを竹に括り付けて前後2人で担ぎ、そのかごに野菜等を入れていった。このかごを担ぐ役は3組6人いた。笹払いが終わった笹は、栃原区との境にある大門橋から原野谷川へ納めた。笹払いは宗派の関係なく回り、盆提灯を回収した記憶はない。

鉦を担ぐ役、茶摘みかごを担ぐ役、竹笹で払う役等があったが、役割の名前はなかった。ただし、最上級生の中で一人、当番を決めた。笹払いが終わると、当番の家で白いご飯を炊きカボチャ、ナス等の油炒め、味噌煮で子どもたちをもてなしてくれた。毎日麦飯ばかりの頃に白米をお腹いっぱい食べることができた。夕方4時頃に終わった。もらったお礼金は小学生全員平等に分け合った。20～50円の配分だったが、うれしく大切に使った。

4) 古老の話

存命の古老が、安政6(1859)年生まれの祖母から聞いていた話である。

昔は、村行事として豊年を祈願して行っていた。農薬もない頃、虫送りとしての大切な行事だった。いつ頃か村内の男子(小学生)の行事となった。

一度取り止めたところ、村内に疫病が流行り、子ども大人が大勢亡くなった。それ以降、戦争中も途切れることなく現在に至っている。



笹振り(平成21年)



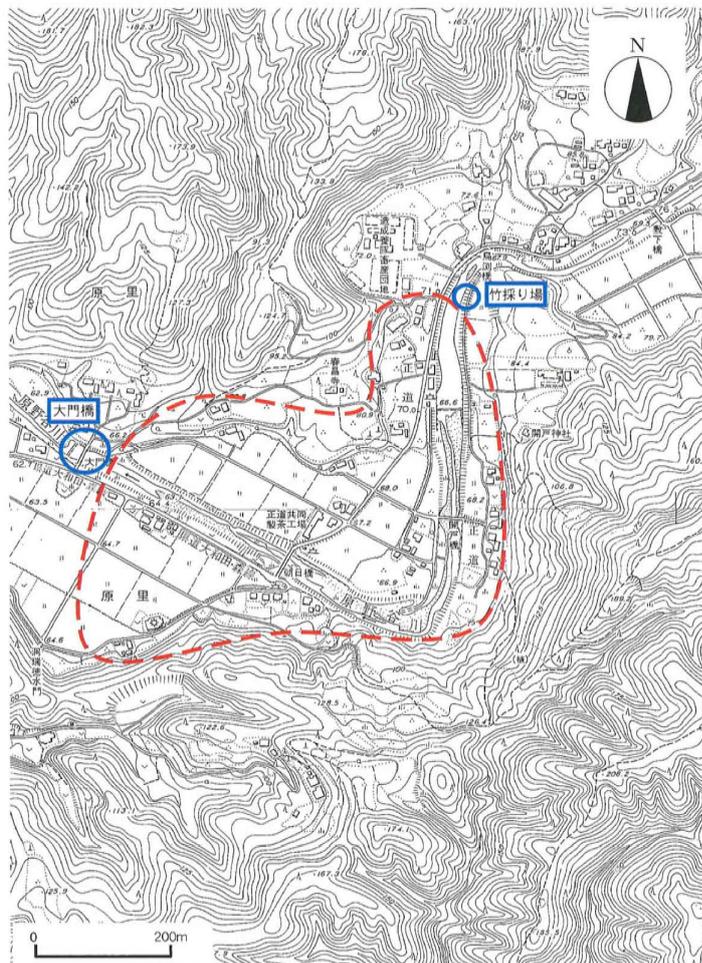
茶摘みかご



大門橋



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



ヨイトコサッサー関係の位置図

(3) ^{ひらの}平野区

1) 地区の概要

曾我^{そが}地区の南端に位置する。北側に篠場があり、西、南、東を丘陵に囲まれている。『掛川誌稿』には、戸数35、寺社として熊野権現、曹洞宗林光庵の記載がある。明治22年に、原川町、高御所村、領家村、細田村、篠場村、梅橋村、徳泉村、岡津村、沢田村と合併し、曾我村の大字となる。

世帯数は、昭和52年から平成13年までは35～37前後であるが、平成14年に54、22年には93と、近年集合住宅の増加により急増している。

2) 平成23年の概要

i 笹振りの準備

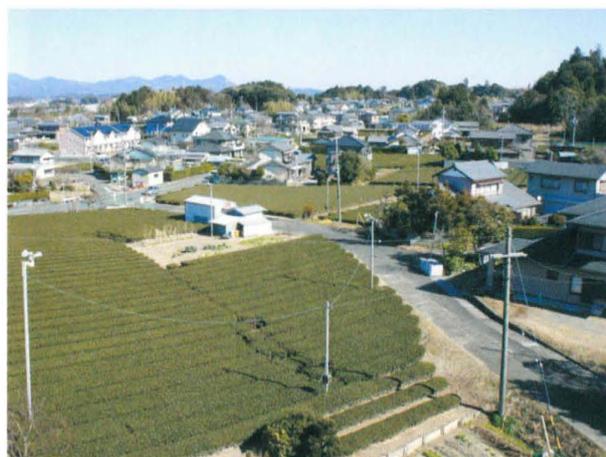
平野区では、行事を「ヨイトコ」と呼んでいて、施餓鬼旗の回収と精霊送りから成る。参加者は小学生の男児で、11人である。役割は、盆飾りの回収とおひねりをもらう大将(小学6年)、以下学年が上の者から、鉦たたき1人、太鼓2人、笹振り大将1人、他は笹振りを務める。

8月21日(日曜日)、子ども全員が手分けして、各組ごとに施餓鬼旗を集めておく。8月23日(火曜日)中に各自笹を用意する。笹に付ける施餓鬼旗は、印刷された「南無甘露王如来」「南無妙色身如来」「南無廣博身如来」

「南無離怖畏如来」「南無多寶如来」と、正法寺の住職が書いた「南方増長天王」「南無多宝如来」「南無妙色身如来」がある。行事に使う鉦と太鼓は区の所有で、ここ数年、「ヨイトコ」に関わっている住民が借りてきて準備を行う。太鼓は、竹に吊るし、子ども2人が担ぐ。



位置図



集落の景観



準備



施餓鬼旗

ii 笹振り

8月24日(水曜日)の午前5時、子どもと保護者が公会堂へ集合する。

行列は、大将、鉦叩き、太鼓、笹持ちと続く。鉦叩きと太鼓以外は、全員笹を持つ。道中、「ヨイトコ ヨイト」の唱えごとと交互に鉦・太鼓を叩く。

家に着くと「おはようございます。」と挨拶する。大将が家人からおひねりをもらう。初盆の家では盆提灯を回収する。施餓鬼旗は事前に回収してあるため、ここでは回収しない。大将



笹振りの道中



笹振り



お礼金の受け取り

の「はじめ。」の合図で笹振りが手分けして軒先を払う。笹振りの時には唱えごとはない。大将の「おわり。」の合図でやめて、次の家に向かう。

集落を回り終わり、午前7時前に公会堂へ戻る。笹と太鼓を玄関に置き、鉦を持って中に入る。区長と保護者の立ち会いのもと、大将を中心に車座になり、おひねりの集計を行う。その後、大将がおひねりを学年ごとに金額を決めて分配する。



盆提灯の受け取り



屋台



屋台の準備

iii 精霊送りの準備

8月24日（水曜日）の午前9時、子ども3人と保護者4人が公会堂に集合し、夕方から夜にかけて行う精霊送りの準備を行う。

精霊送りは、区が所有するリヤカーを屋台に仕立てて行う。リヤカーの大きさは、およそ全長2.2m、幅80cm、荷台の長さは1.3mである。この荷台の最後部に直径50cm、長さ62cmの大太鼓を、最前部に直径35cm、高さ16cmの太鼓を取り付ける。太鼓の後ろ側に、太さ3cm、高さ2.7mほどの椎の木を立て、ほおずき提灯5個と初盆の家から回収してきた盆提灯を飾り付ける。荷台の四隅に施餓鬼旗の付いた高さ2.2mほどの笹を立てる。

手木に引っ張る綱をつけて、10時前に準備が終了する。

iv 精霊送り

8月24日（水曜日）の午後6時30分頃、ほおずき提灯と盆提灯を点し、公会堂を出発する。屋台には、太鼓を叩く子どもが乗る。大太鼓は、大人が歩きながら叩く。曲は、祭り囃子の「屋台下」である。にぎやかな曲であるが、かつては静かな「あまんだれ」を演奏していたとのことである。引き綱を区の人々が引っ張る。屋台の周辺を、笹を持った人々が歩く。

集落を回った後、林光庵跡に到着する。ほおずき提灯と盆提灯が付いた椎の木、施餓鬼旗が付いた笹、手に持ってきた笹をくぼ地に納める。本来は、納めたものを焼くが、豪雨で濡れたため、乾かして後日焼くことにする。

区長の挨拶の後、初盆の家族代表が「みなさんに送っていただいて故人も喜んでいと思います。いつものように私たちでお菓子を用意しました。大人の分もありますので、みなさんお持ちくださり、故人の供養のためお召し上がりください。」と挨拶し、参加者に菓子を配る。その後、区長等大人が数人で屋台を公会堂まで引いて帰り、大太鼓、太鼓を屋台から下ろして、この日は終了する。

8月28日（日曜日）の午後6時すぎ、子どもと保護者、区の役員が林光庵跡に集まり、先日納めた笹、椎の木、施餓鬼旗、提灯等を焼き、7時頃に終了する。

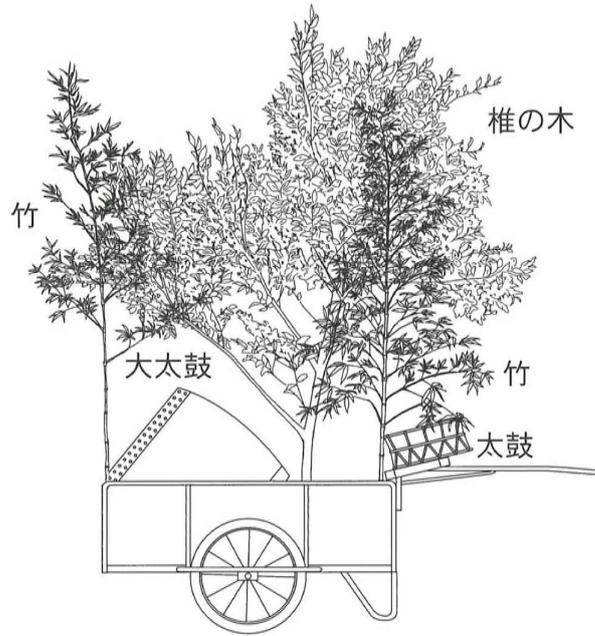


精霊送りの行列

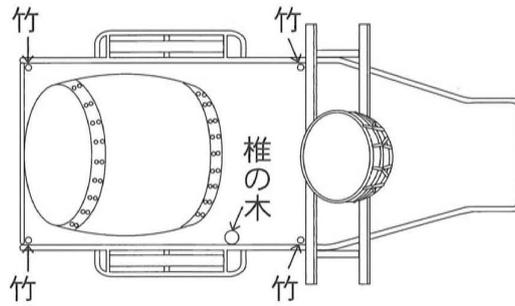


精霊送り

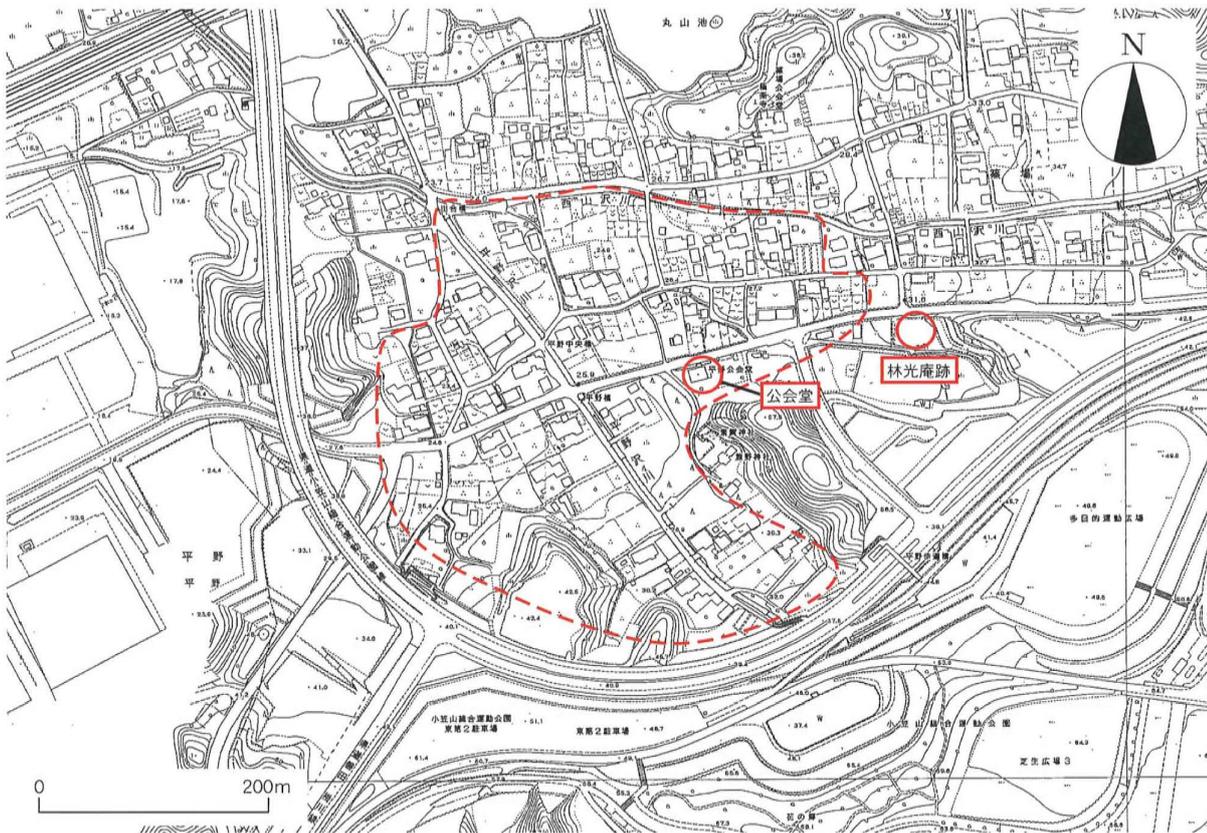
横から



上から



屋台の図



現在のヨイトコ関係の位置図

3) 昭和23～28年頃の例

昭和16年生まれの男性の記憶による。

行事は8月24日であるが、その前に準備を行い、25日に片付けを行った。参加者は、小学生の男児のみであった。

準備は、24日の前の日曜日か前日に、施餓鬼旗と灯籠を集めて公会堂に保管しておいた。前日、新竹を切って笹振り用にした。どこの家にも竹があったので、各自用意した。笹に事前に集めた施餓鬼旗を付けた。太鼓を熊野三神社から林光庵に運んだ。

役割は、小学6年が親方で、この中の1人がお礼を受け取る役目のこんじき（乞食）になった。そして、年長者から、鉦叩き1人、太鼓叩き2人、笹振り大将1人、他は笹振りを務めた。太鼓叩きは、太鼓を吊るした竹を2人で担ぎ、後ろの者が叩いた。

8月24日の午前3時30分頃、林光庵の広場に集合し、笹振りに出発した。行列は、鉦叩き、太鼓叩き、笹振り大将、笹振りの順であった。道中、鉦叩きが「チャンチャカチャカチャン」、太鼓叩きが「ドンドコドンドン」、笹振り大将の唱えごと「ヨイトコ ヨイト」、笹振りの唱えごと「ヨイトコ ヨイト」を繰り返して進んだ。家に着くと、全員敷地に入った。鉦と太鼓の音は止み、笹振りが一列になって軒先を払った。この時に唱えごとはない。笹振りを終わって、お礼をもらった。

家々を回り終わって、午前5時30分頃に寺に戻ってくると、親方がお礼の分配を行った。初めてもらった金は数十円、親方の時は数百円だったと思う。

笹振り後に、上級生の保護者が屋台づくりを行った。屋台は、小学6年の家から大八車を借りてつくった。大八車に椎の木を立てて、ほおずき提灯5個と初盆の家から預かった灯籠をぶら下げた。後ろに大太鼓、前に太鼓を取り付けた。現在のように四隅に竹を立てることはなかった。

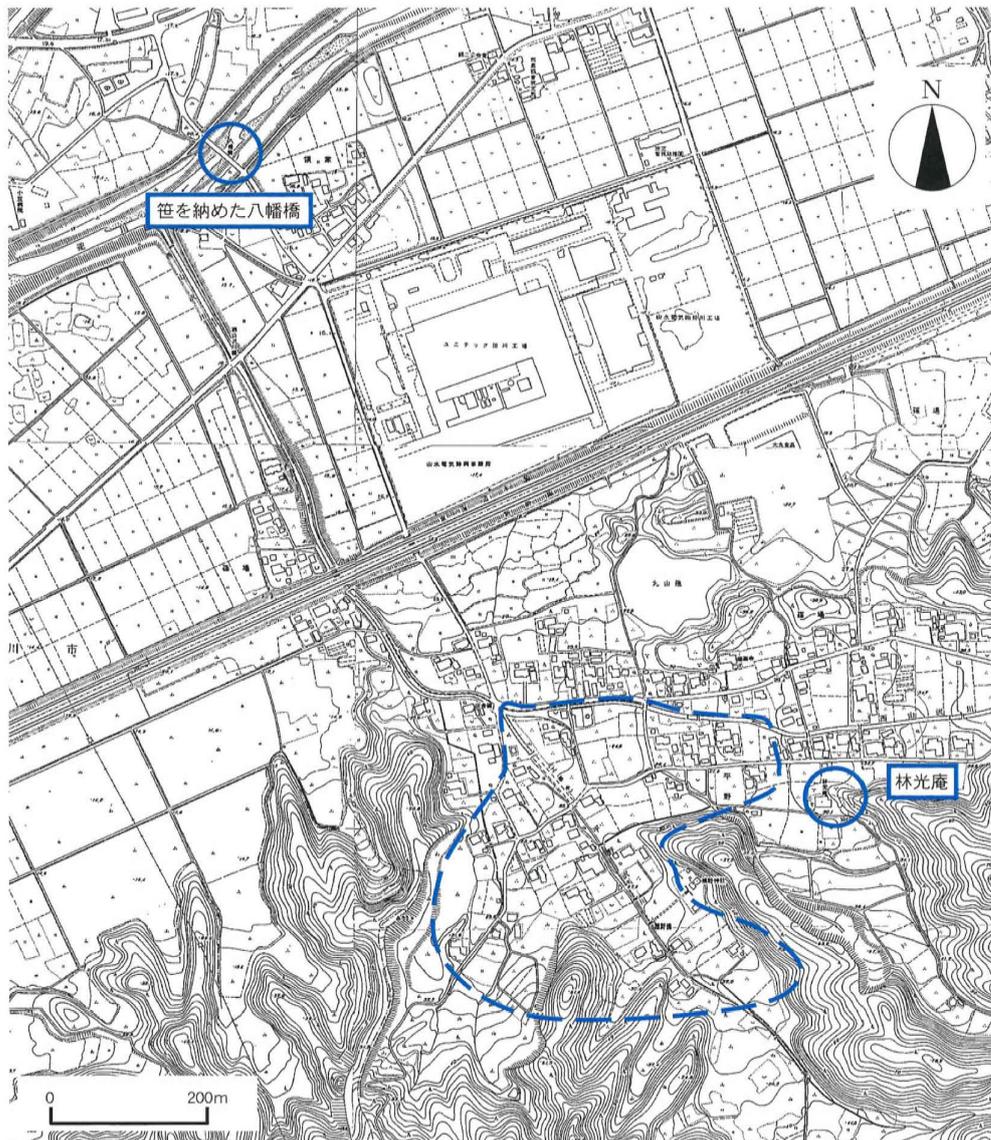
日が落ちはじめた頃、林光庵に集合した。精霊送りの行列は、先頭に屋台が行き、その後を人々が続いた。屋台の前には綱がついていて、子どもが引いていたと思う。太鼓は屋台に乗った子どもが叩き、大太鼓は大人が歩きながら叩いた。太鼓が「テンテコテンテン」、大太鼓は「ドドンガドンドン」というリズムだった。曲名は不明である。

林光庵を出る時はたいした人数ではなかったが、八幡橋に着く頃には100人くらいにはなっていた。着いた頃には真っ暗になっていて、橋の上で大人が欄干の外へ灯籠や笹を差し出して火を点けた。半分くらい燃えて持てなくなると、川へ納めていた。この時、みんな自然と手を合わせて拝んでいた記憶がある。出発してから2時間くらいで寺に戻ってきて、精霊送りを終わった。

翌日の朝、上級生の保護者が屋台や鉦等の片付けを行ったと思う。



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



過去のヨイトコ関係の位置図

(4) ^{しのんば} 篠場区

1) 地区の概要

曾我地区の南端、平野区に隣接する。東西方向の谷地形に形成された集落で、北西隅は領家につながっているが、それ以外の方向は丘陵に囲まれている。東側に高御所区が所在するが、丘陵により隔てられている。

『掛川誌稿』には、戸数43、寺社は八幡宮が見える。

世帯数は、昭和52年に55、59年から60台となり、平成22年に82を数える。

2) 平成23年の概要

i 笹振りの準備

行事を「ヨイトコモイト」と呼んでいて、平野区の「ヨイトコ」同様、笹振りと精霊送りから成る。参加者は、幼稚園の年長から小学6年までの男女で、16人である。役割は、小学6年がおひねりを受け取る大将、他は笹持ちを務める。直径20cmほどの鉦と太鼓が笹振りに同行するが、これは保護者が受け持つ。

8月23日（火曜日）、参加する子どもが笹を用意する。笹が手に入る子は、手に入らない子の方も用意する。笹は、高さが2～3mの新竹で、子どもの背丈くらいの高さまで枝を払って持ちやすいようにしてある。この笹に施餓鬼旗を付ける。鉦と太鼓は、区の所有のものを使う。

ii 笹振り

8月24日（水曜日）の午前5時、子どもと保護者が公会堂に集合する。全員が集合したところで、大将が西方^{にしほう}8人と東方^{ひがしほう}8人に分ける。篠場区は、東西におよそ1.2kmと細長く、ほぼ中間に公会堂があるため、公会堂を境に西方、東方としている。

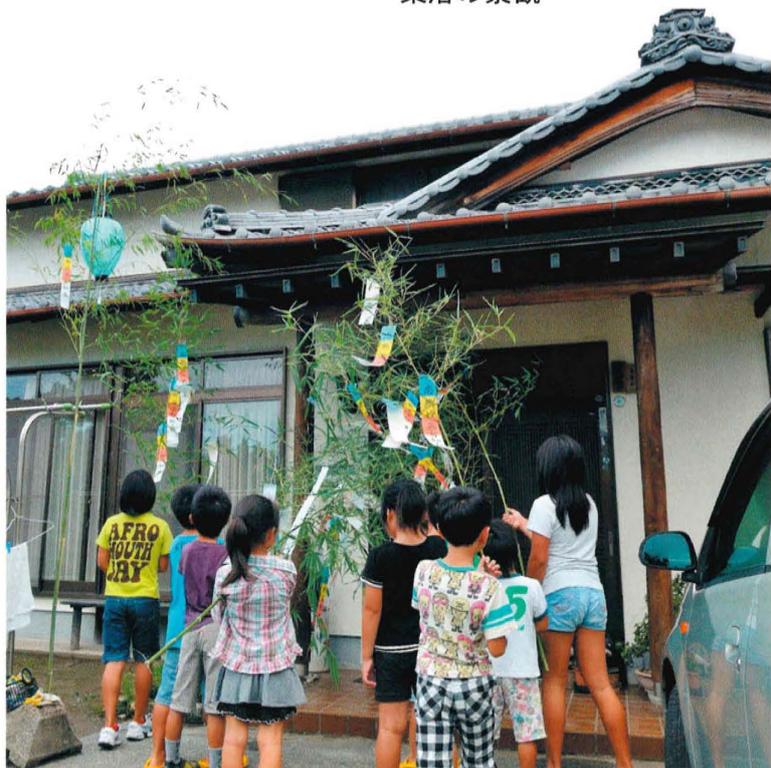
公会堂から西方と東方に分かれて出発する。西方に太鼓、東方に



位置図



集落の景観



西方の笹振りと盆提灯

鉦がついて回る。行列は、笹を持った子どもが先に立ち、太鼓と鉦、保護者が後に従う。家に着くと、子どもたちが玄関の前まで行って、「ヨイトコ モイト」の唱えごとに合わせて、笹で玄関周辺を払う。太鼓と鉦はこの時に叩く。「ヨイトコ モイト」の唱えごととお払いは、家人が出てくるまで行う。家人が出てきて、おひねりと施餓鬼旗を受け取る。初盆の家では提灯も受け取る。

西方の初盆の家では、玄関脇に4mほどの高さの竹を立ててあり、施餓鬼旗と提灯が吊るされていた。子どもの背丈ほどの高さまで枝が払ってあって、持っていけるようにしてあり、これを保護者が預かる。東方の初盆の家では、施餓鬼棚に使用した竹を預かる。

午前6時頃、全員が公会堂に戻ってくると、最上級生4人が公会堂に入り、おひねりの集計をする。それ以外の子どもは外で待つ。中に入った4人は、学年ごとに金額を決め、学年を書いた封筒に金を入れる。この封筒を外で待っている子どもに渡し、子どもたちは一旦帰宅する。



西方の笹振り道中



施餓鬼棚と盆提灯の受け取り



東方の笹振り道中



施餓鬼旗の受け取り



お礼金の分配

iii 精霊送りの準備

8月24日(水曜日)の午後1時頃、子どもと保護者で精霊送りの準備を行う。作業は、精霊送りに使う山車(屋台)の飾り付けと、送り場の水抜き作業である。山車は、戦後に区の住民がもらってきた荷車を使用している。この荷車は、祭り屋台がしまっている小屋に分解して保管されている。

山車の飾り付けは、笹振りに使った笹を束ねることから始める。女性の保護者が、笹振りに使った施餓鬼旗の付いた笹を同じ向きに



山車(屋台)の準備

10本ほど束ねる。その間に、残りの保護者と子どもたちで荷車を組み立てる。荷車の大きさは、およそ全長3.3m、幅80cm、荷台は2.2mの長さがある。荷台の前部に太鼓、後部に大太鼓を固定する。太鼓は、直径35cm、高さ15cmほどの大きさのものが2つ、大太鼓は直径44cm、長さ50cmほどの大きさである。太鼓のうちひとつは笹振りに使用したもので、もうひとつは公会堂から出してきた。荷台の中央に高さ2mほどの椎の木を立て、四方から針金で引っ張り倒れないようにする。束ねた笹を大太鼓にしっかりと結わえ付ける。椎の木にほおずき提灯を7個飾り付けて、精霊送りまで屋台小屋にしまっておく。

その後、送り場の水抜きに向かう。高御所区との境に近い区の東外れに掘られた穴で、直径3mほど、深さ70~80cmのすり鉢状をしている。山際に掘られているので、湧き水が溜まり、事前に水抜きを行う必要がある。抜いた水は、消火用に確保しておく。

子どもたちに精霊送りの集合時間等を伝え、飲み物を配って午後4時頃に解散する。

iv 精霊送り

8月24日(水曜日)の午後7時前、子どもと保護者が公会堂に集合し、屋台小屋から山車を引き出し、ほおずき提灯に蠟燭で火を点す。太鼓と椎の木の間に子どもが腰掛け、太鼓を叩く準備をする。手木の両外側に保護者が付き、引き綱に子どもと保護者が付く。山車の周囲にいる人が、初盆の家から回収した提灯に火を点して持つ。大太鼓を叩く大人が山車の後ろに立ち、その後ろに笛吹きが立つ。道中、祭り囃子の「大間」「屋台下」を演奏する。

この山車が公会堂を出発し、直線距離で800mほどある西山沢川沿いの送り場まで向かう。山車が通る道に面した家では、通過に合わせて送り火を勢いよく焚く。途中で休憩を挟み、送り場に到着する。初盆の提灯、大太鼓に括り付けられていた笹が穴に投げ込まれ、火がつけられる。今年は、精霊送りの頃から降り出した雨が激しくなったので、大体燃えた頃に水をかけて消火する。



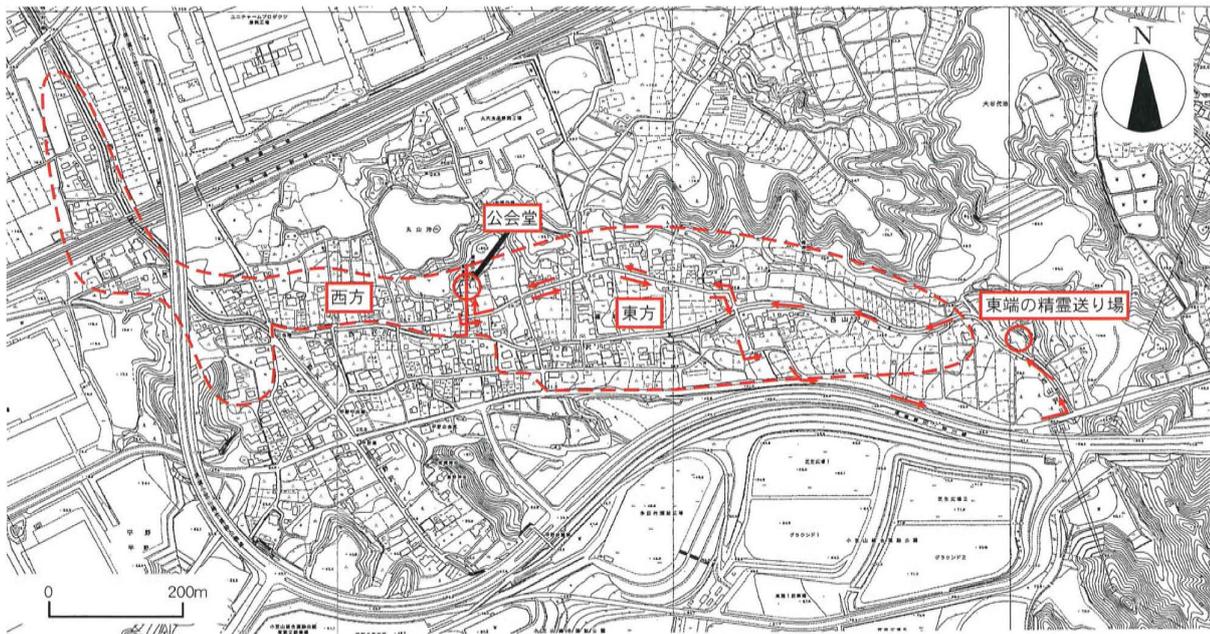
精霊送りの行列

この後、来た時とは道を変えて、西山沢川沿いの道を通り、公会堂に帰る。保護者が太鼓を下ろし、椎の木を外し、山車を解体して午後9時前に終了する。

精霊送りは、昭和30年代には現在のような形になっていたようである。

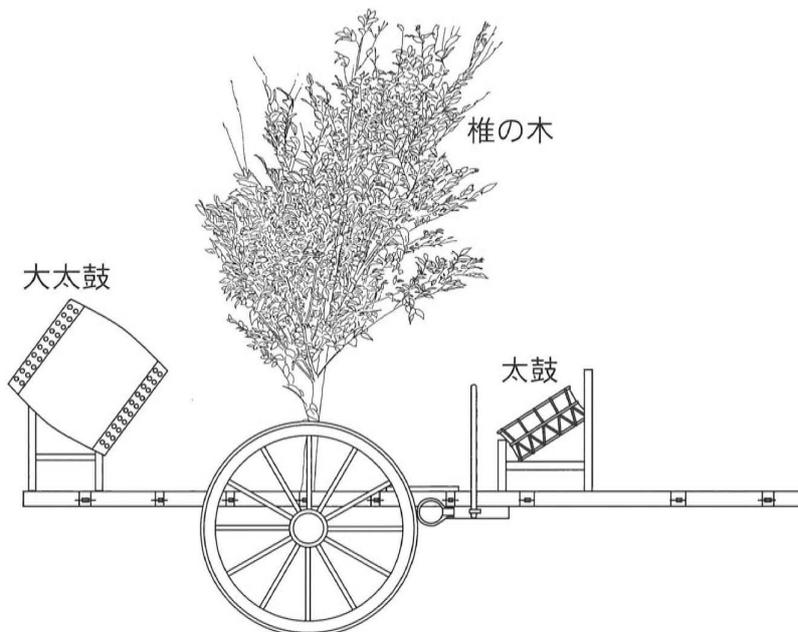


精霊送り

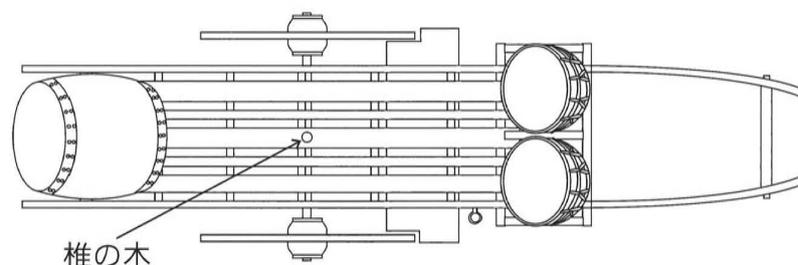


現在のヨイトコモイト関係の位置図

横から



上から



山車(屋台)の図

3) 昭和28～33年頃の例

昭和22年生まれの男性の記憶による。

実施日は8月24日で、前日に準備を行っていた。笹振りに使う真竹を採ってきて、施餓鬼旗を付けた。兄弟が多い家では施餓鬼旗が足りないので、近所から施餓鬼旗を集めてきて笹に付けた。参加者は小学生の男児で、役割は、6年が、親方・笹振り大将2人・こんじき(乞食)2人・太鼓叩き(西組)・鉦叩き(東組)を務め、その他は笹振りを務めた。極楽寺を境に東西に分かれるため、東西の各組に笹振り大将、こんじきがいる。笹振り大将は、笹振りに回る家を指示する役で、こんじきはもらったお礼の金を巾着袋に納める集金係である。

8月24日の午前3時頃、極楽寺に集合し、東西の組に分かれて出発した。

西組は、「ヨーイトコ モイト」の唱えごとに合わせて太鼓を「ドンドコドコドン」と叩く。この太鼓は、大太鼓の一回り小さいもので、肩から掛けて叩いた。東組では、「ヨーイトコ モイト」の唱えごとに合わせて鉦を「チャーンチャカチャカチャン」と叩いた。

笹振り大将・こんじき・太鼓叩き・鉦叩きは、常に道路にいて、家の敷地には入っていない。笹振り大将が「あそこの家に行ってこい。」と指示すると、笹振り6、7人がその家に行って笹で軒先を払った。早朝の鉦や太鼓の音はよく聞こえるので、自分の家にだんだん近づいて来るのがわかり、どの家でもすぐ出てきてくれたり、外で待っていてくれたりした。お礼は紙に包んで渡され、こんじきが巾着袋に入れた。初盆の家では、灯籠と施餓鬼棚から外した施餓鬼旗をもらってきた。西組、東組ともに同じくらいの時間に寺に戻ってきた。

寺の軒先で6年生がお礼の集計を行った。精霊送りに必要な提灯等を買う金と屋台にする荷車を借りる資金を差し引いて、みんなに分配した。6年生が極端に多くもらっていて差がはげしかったので、自分が6年生の時に均等にした。初めてもらった時は5円くらい、小学6年で100円くらいだったと思う。

お礼を分配して、次の集合時間と準備をどうするか決めて、午前5時半頃に一旦解散した。

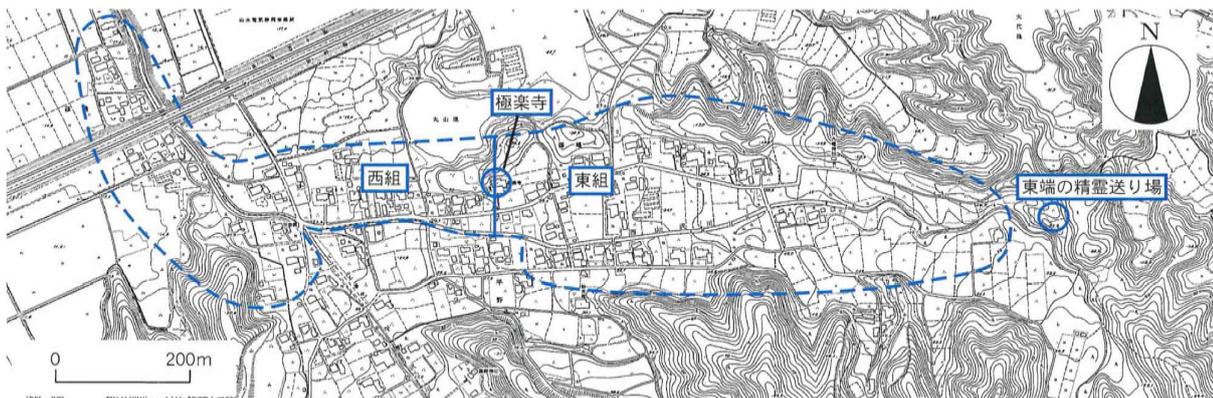
午後、4年生から6年生が寺に集まり、手分けして精霊送りの準備を行った。準備は、①自転車で、掛川駅前まで蠟燭とほおずき提灯を買いに行く。②荷車を借りに行って、寺で屋台に飾り立てる。屋台に取り付ける木を極楽寺か八幡神社の周辺で採る。木の種類は、樫か椎だったと思う。屋台に大太鼓、太鼓を据え付け、使った笹を大太鼓に巻き付ける。初盆の家で預かった灯籠を笹にぶら下げ、町で買ってきたほおずき提灯を木に5、6個飾り付ける。③燃やす所に穴を掘りに行く。

午後7時頃、寺から精霊送りを始める。寺の住職に読経してもらってから送り場へ出発した。屋台の前に紐をつけて子どもが引っ張った。笹にぶら下げた灯籠は持って歩いた。区の人、初盆の家では親戚も来ていて、屋台の周辺は大勢の人がいた。屋台に取り付けた太鼓二つは子どもが叩き、大太鼓は大人が叩いていたと思う。笛を吹く大人がいた。どんな曲名かわからないが、祭り囃子より静かな曲だった。

寺から東端の送り場までは真っ直ぐに向かった。寺から東にある家では、家の前から行列に加わる人もいた。送り場まで来ると、穴の中に笹と灯籠を入れて燃やした。燃え尽きると、穴を埋め戻して来た道を寺に戻った。寺に戻って来る時に、魔がついてくると言っておかしな人がいたが、禁忌事項はなかった。寺に戻って来ると、小学4年から6年の子どもだけで片付けを行っていた。



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



過去のヨイトコモイト関係の位置図

2 チャンチャカチャン系

1 地区の概要

行事を「チャンチャカチャン」と呼ぶ高御所・領家・岡津、「チャンチャカチャン」同様、鉦の音から名付けられたと考えられる原川の「ジャンジャコジャコジャン」、徳泉の「ジャンジャカジャカジャン」のほかに、これらの地区に隣接する各和の「ショーリョー送り」も報告する。高御所・領家・岡津では現在も行われているが、原川・徳泉・各和の行事はすでに廃れてしまっている。

これらの地区は、現在の掛川市の中央西寄りに位置する。高御所の西隣に領家、領家の西隣に岡津がある。岡津の北西に各和、南西に原川があり、原川の南側に徳泉がある。

これらは、江戸時代にはすべて佐野郡に属していた。原川は、掛川宿と袋井宿の中間に位置する「間の宿」で酒屋・茶屋等を生業とする家が多かったが、他は農村であった。領家は平野に面し、原川・徳泉は平野に囲まれた集落、高御所は丘陵に囲まれた集落、各和は丘陵間の平野に立地する集落であった。

2 行事の概要

実施日は、高御所が7月24日、領家と岡津は8月24日である。原川・徳泉・各和は、8月24日に行われていた。

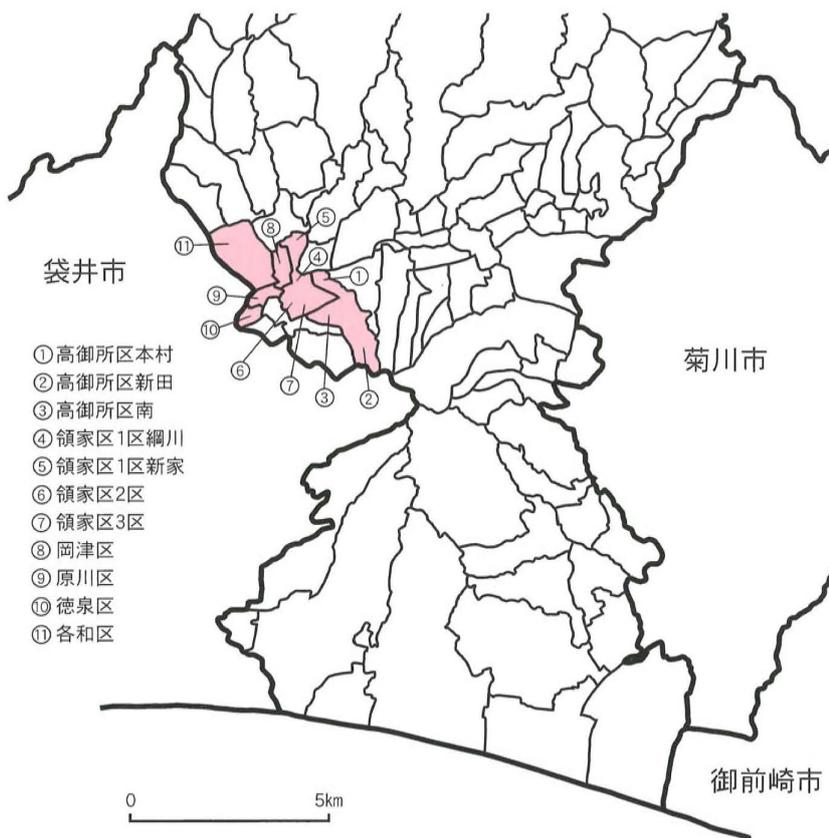
参加者は、原川が小学1年から5年、徳泉は小学生、各和は小学生から中学生までの男児であった。高御所は、本村、新田、南に分かれて実施し、領家は1区綱川、1区新家、2区、3区に分かれて実施している。参加者は、かつては小学生だけ、または小学生から中学生の男児であったが、現在は領家区3区を除き、男女で行っている。

実施時間は、原川と徳泉が早朝、各和は午前に行っていた。高御所は午後から夕方に行われていたが、現在は夕方に行われている。領家と岡津は、深夜から早朝に行っている。

原川・徳泉・各和は、鉦振りを行うことはなく、家々の施餓鬼旗を回収した。岡津は、子どもが各々施餓鬼旗が付いた鉦を持ち、集落を鉦振りして回る。その後で、家々の門口に挿してある施餓鬼旗を回収する。精霊送りは、各和が太鼓と大太鼓を載せた太鼓台を使用し、岡津は屋台を仕立てる。

鉦振りの時に、高御所区本村と南は、鉦・太鼓がなく、高御所区新田と領家区1区綱川は鉦が加わる。領家区1区新家・領家区2区・領家区3区・岡津は鉦と太鼓が加わり、原川もこのパターンであった。徳泉では、精霊送りの時に双盤と太鼓を使用した。

唱えごとは、高御所区本村と領家区1区新家が「チャンチャカチャン」を唱えるが、これ以外のところでは唱えない。



チャンチャカチャン系の分布図

3 実施地区

(1) 高御所区本村

1) 地区の概要

高御所区は、曾我地区の最東端に位置し、江戸時代は高御所村と呼ばれていた。

『掛川誌稿』には、戸60、寺社は曹洞宗の正法寺、正法寺末の円光寺、観音堂の記載がある。

谷地形に形成された集落で、丘陵により、本村、新田、南の3組に分かれる。この3組が別々に「チャンチャカチャン」を行っている。

本村の世帯数は、平成2年に40、集合住宅等の建築により22年に159と増加している。

2) 平成23年の概要

i 準備

参加者は、数年前から小学6年の男女で行っていて、3人で行うこととなる。準備するものは、長さ3mほどの新竹1本で、これは、保護者が竹のある家からもらってくる。

ii 当日

ウラ盆の7月24日(日曜日)の午後5時30分から始める。同じ高御所区の新田、南より遅く始めたのは、涼しくなったからの時間帯を保護者が選んだことによる。この時間から始めることは、事前に回覧している。



袋井市

位置図



集落の景観



笹振りのはじめ

回るのは、正法寺の檀家だけで、東端の新興住宅地から、子ども3人と保護者が一緒に回る。出発時には笹には何もついていないが、家を回るたびに施餓鬼旗が付くので次第に重くなり、交代で持つことになる。

家に着き、玄関で「チャンチャカチャンにきました。」と挨拶する。すると、家人が施餓鬼旗とお礼の金を持って出てくる。施餓鬼旗は家人が付けたり、子どもが付けたりする。初盆の家では提灯を預かる。その後、「チャンチャカチャン」と3回唱えるとともに笹振



施餓鬼旗の受け取り



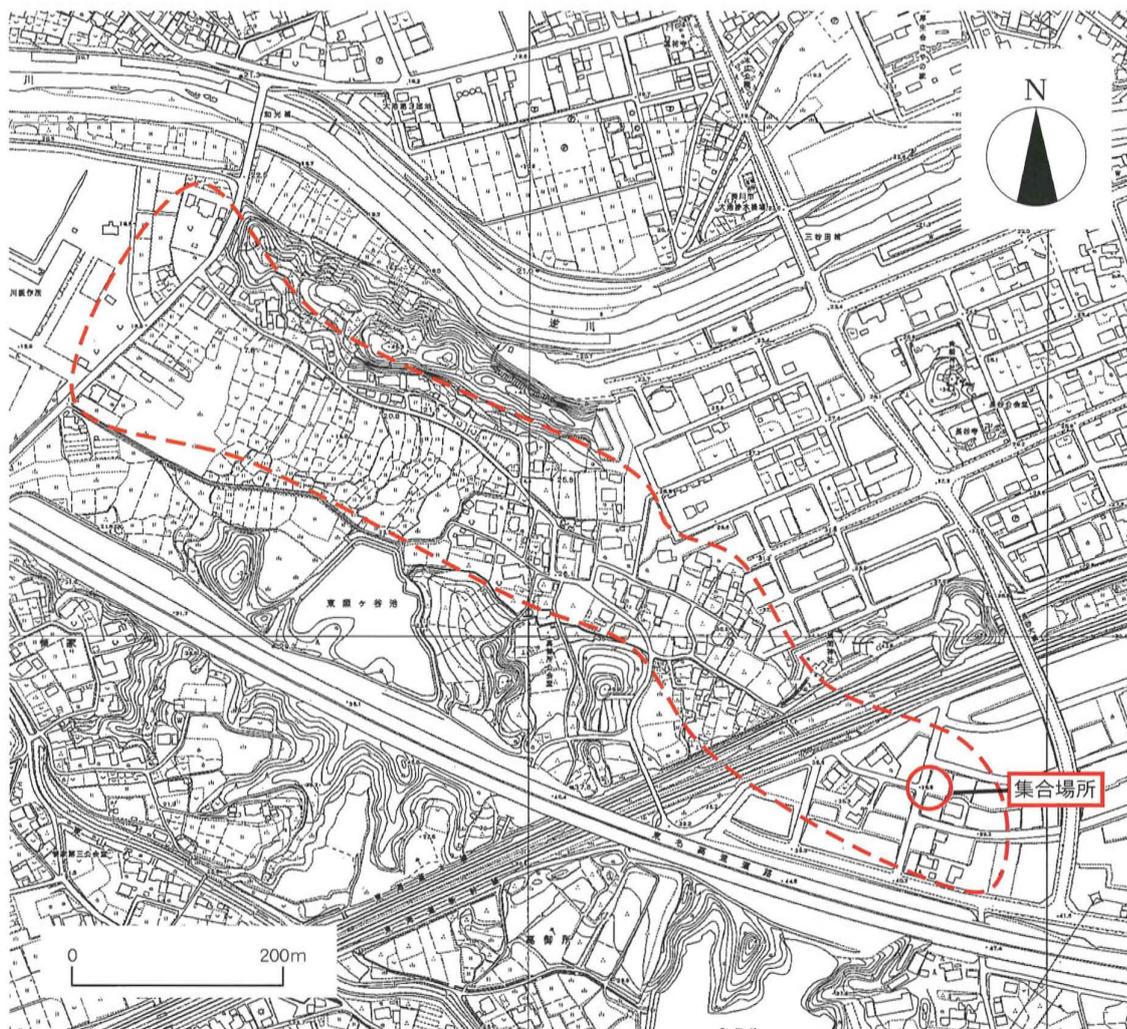
笹振り

りを行う。順路は、時計回りに東から西端まで行き、丘陵沿いを東に戻る。

笹振りが終わると保護者宅へ戻る。家の中に子ども3人が入り、分配について相談する。均等に分配して、午後8時頃に終了する。施餓鬼旗等は、後日、ごみとして処分する。



盆提灯の受け取り



現在のチャンチャカチャン関係の位置図

3) 昭和17～20年頃の例

昭和9年生まれの男性の記憶による。

7月24日に行われていて、参加者は小学5年と6年であったが、この年齢の子どもが少ないとか、初盆の家が多くて灯籠を持つ人手が必要な時は6年生の裁量で対象年齢を下げた。小学6年が大将になった。

笹振りと施餓鬼旗を付ける笹1本と初盆の軒数分の男竹を事前に用意したが、これらは大将が家人に頼んで採ってもらっていた。

午後3～4時頃に藪下^{やぶした}を出発した。笹振り用の笹を持った大将を先頭にして、他の者は付いていった。

家に着くと、全員で「チャンチャカチャンが来ました。」と挨拶した。その後、笹で軒を払うと、家人が「ごくろうさま」と言って笹に施餓鬼旗を付けてくれた。どこの家でも待っていてくれたようだった。初盆の家では、持ってきた竹に灯籠

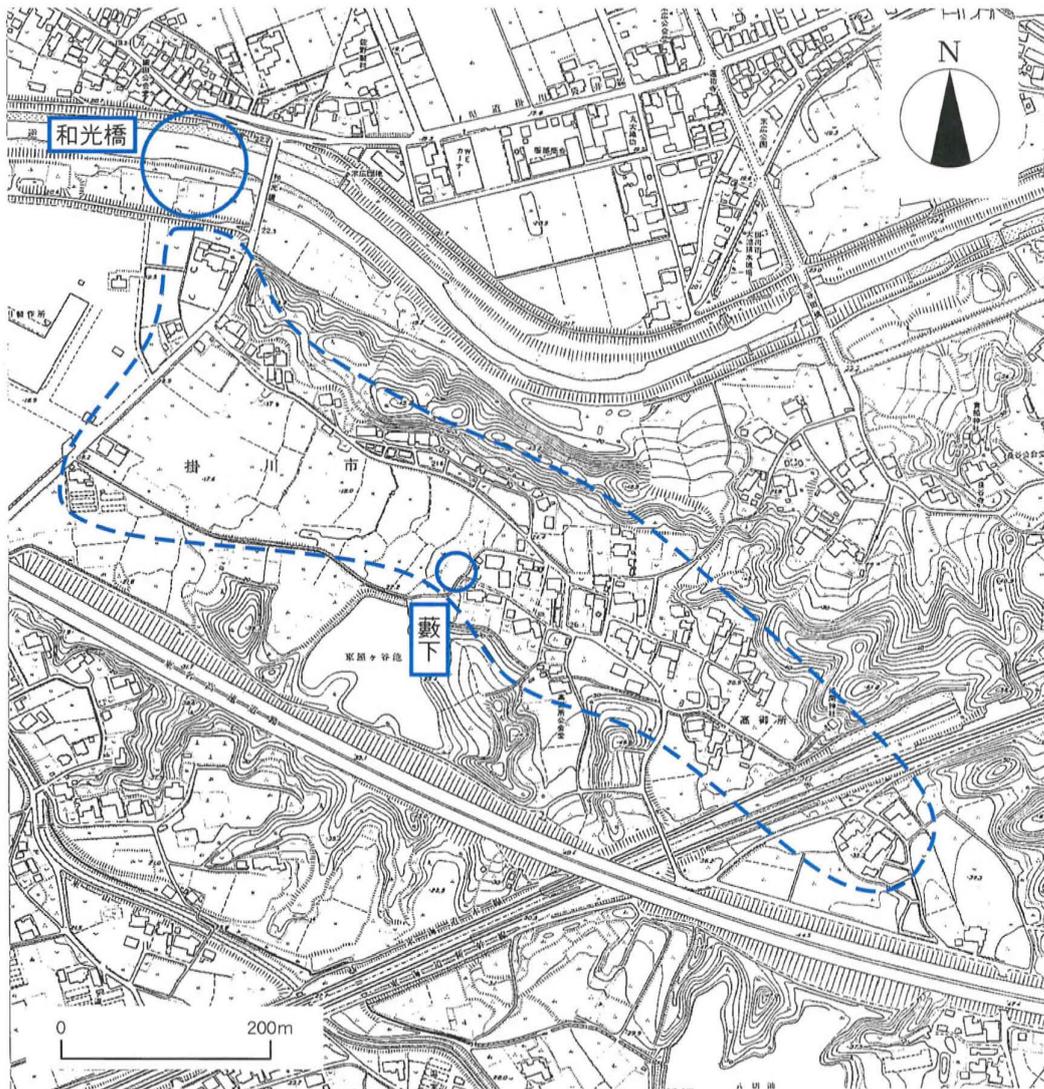


藪下

を付けてくれた。お礼は、むき出し^{むきだし}で受け取った。集落の東から一番西の家まで回り終わったら、北西に架かる和光橋^{わこう}のたもとの河原で笹と灯籠を燃やした。灯籠に付いていたガラスのビーズ等は燃えないので河原に埋めた。和光橋で精霊送りをした後、橋でおひねりを分配した。金額は4段階で、1番下の3年生は大将の5分の1程度だった。午後6時30分～7時頃には終了した。



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



過去のチャンチャカチャン関係の位置図

(2) 高御所区^{しんでん}新田

1) 地区の概要

高御所区の東端に位置する。本村と同じ谷の奥に形成された集落で、幅100m未満、長さ800mほどの広がりをもつ。谷の奥に正法寺がある。

新田の世帯数は、平成2年に32、22年に54と増加している。

2) 平成23年の概要

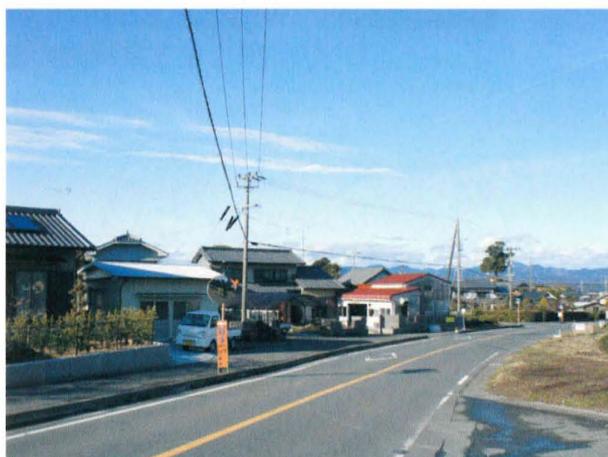
i 準備

参加者は小学4年から6年の男女で、5人で行うこととなる。7月23日(土曜日)の午後、鉦と撞木を保管している家に取りに行き、長さ3mほどの新竹2本を用意しておく。おひねりを受け取るための盆を用意する。

役割は、初盆の飾り回収とおひねりを受け取る大将、鉦叩き、笹持ちがあるが、今年は初盆の家はない。

ii 当日

7月24日(日曜日)の午後3時30分に新田の中央付近に集合する。全員が集まったところで、南端の谷奥にある正法寺に向かう。正法寺の住職から「チャンチャカチャン」の話を聞いた後、井戸の周りを7周半回って、笹振りに向かう。行列は、鉦が先頭を進み、笹が続く。鉦は道中も叩き、笹は道中地面につ



集落の景観



正法寺の井戸

けてはいけない。家に着くと「こんにちは、お払いに来ました。」と挨拶し、家人が出てくる。笹で軒先を払い終わって、施餓鬼旗を笹に付けてもらう。施餓鬼旗を付け終わると、おひねりをもらう。

笹に付けられた施餓鬼旗には、「南無^{かんろおう}甘露王如



笹振りの道中

来」 「南無^{みょうしきしん}妙色身如来」 「南無^{こうはくしん}廣博身如来」 「南無^{りふ}離怖畏如来」 「南無^{たほう}多寶如来」という印刷された旗、「南無妙法蓮華経為先祖代々之靈盂蘭盆水向供養」という旗もある。本村は正法寺の檀家を対象にしていたが、新田は正法寺の檀家以外も回ることがわかる。

笹振りが終わると集合場所に戻り、笹をごみ袋に入れる。もらったお礼が盆に広げられ、子どもたちで分配について相談する。参加者全員が均等になるように分配され、午後6時頃に終了する。



施餓鬼旗の受け取り



笹振り



施餓鬼旗

3) 昭和9年頃の例

大正9年生まれの男性の記憶による。

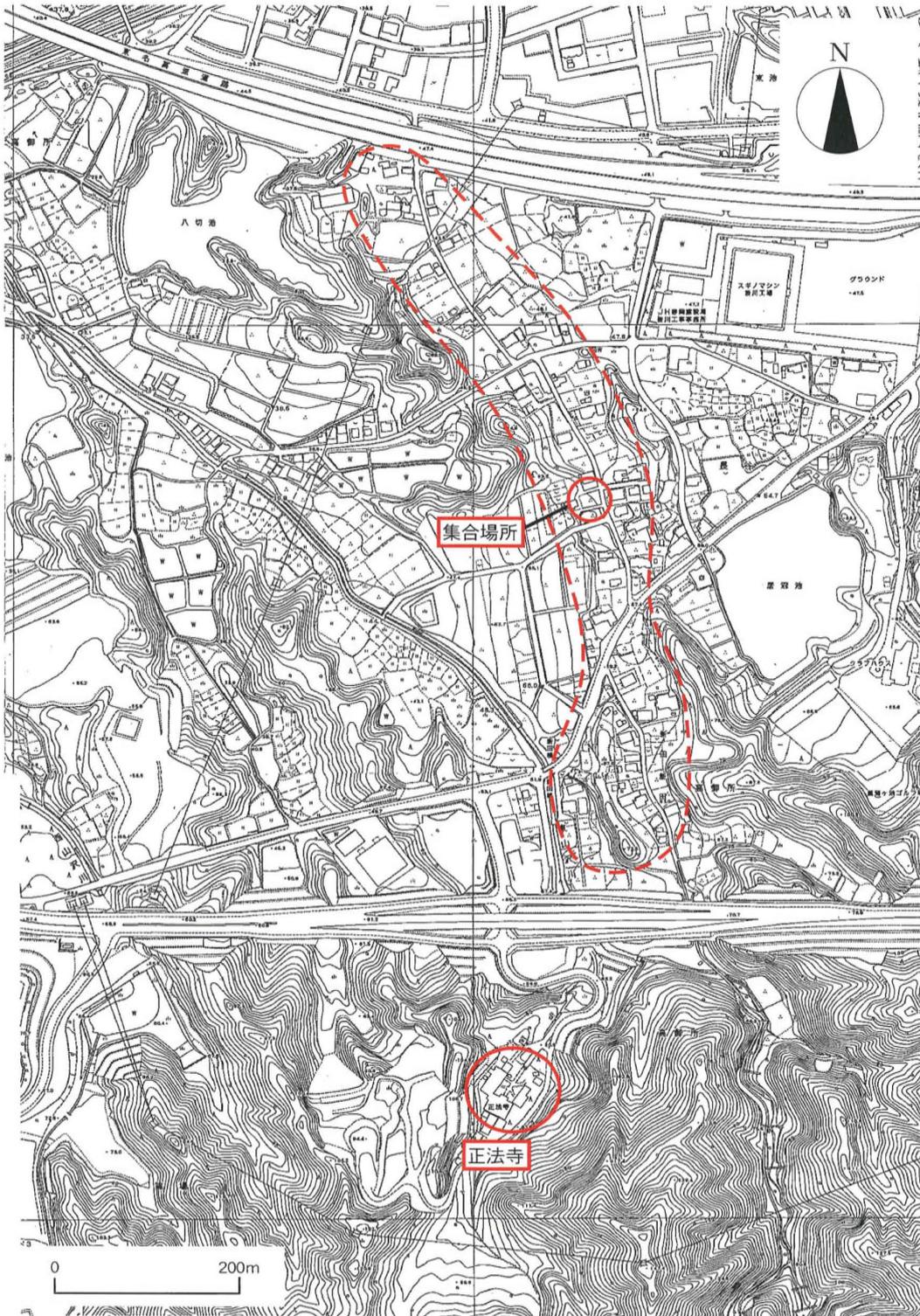
7月24日に行われていて、どれくらいの歳から参加したか覚えていないが、高等小学校2年まで参加していた。役割は、鉦、太鼓、他はすべて笹を持った。

7月24日の午後2時頃、学校から帰ってきてからはじめた。正法寺に集合し、井戸を7周半回り、笹振りに出発した。

鉦と太鼓を1本の竹竿に吊り下げ、鉦と太鼓の間に鉦を叩く人、太鼓の後ろに太鼓を叩く人がいた。鉦と太鼓は常に道にいて、鉦が「チャンチャカチャカチャン」と叩くと、太鼓が「ドンドコドン」と叩き、交互に繰り返した。

軒先を笹で払い、その後で施餓鬼旗を付けてもらった。初盆の家では、灯籠を付けてもらった。初盆の家は、お礼も多かった。

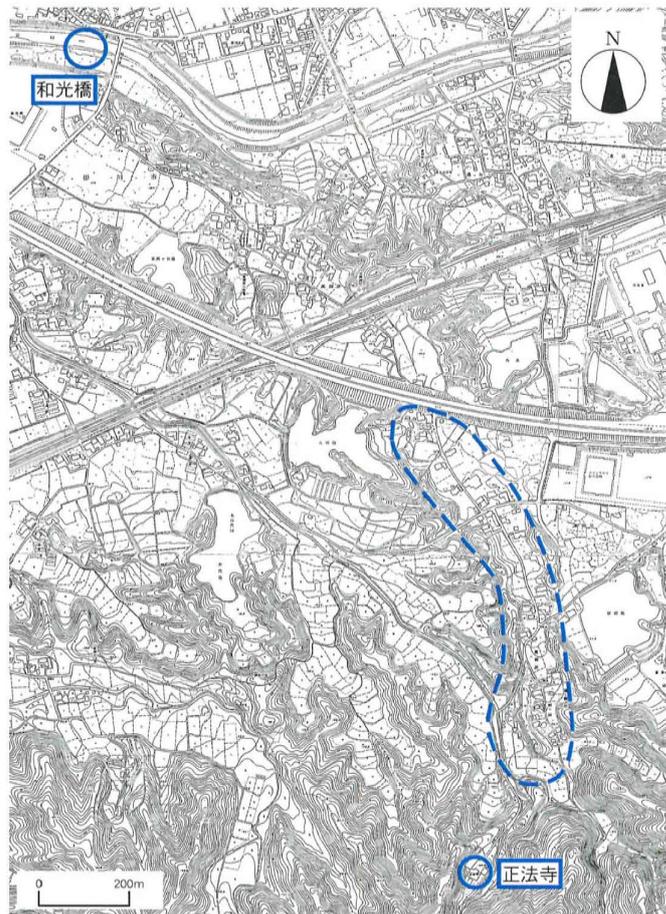
集落から1kmほど離れた和光橋で、灯籠や笹に火を点けて川へ納めた。和光橋で、上級生が金を分けた。初めてもらった金額は10円で、学年によって差があった。まだ明るかったので、午後6時頃には終わったと思う。



現在のチャンチャカチャン関係の位置図



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



過去のチャンチャカチャン関係の位地図

(3) 高御所区南^{みなみ}

1) 地区の概要

高御所区の南西に位置し、本村・新田がある谷とは丘陵を挟んで立地し、谷地形から平野の縁にかけて集落が広がっている。

南の世帯数は、平成2年に17、22年に45となっている。

2) 平成23年の概要

i 準備

参加者は小学4年から6年の男女で、7人で行うこととなる。

役割は、6年生が笹持ち、おひねりもらいを務める。おひねりは、手渡しで受け取っていたが、今年は保護者の意見により半紙を敷いた盆を用意する。竹は、区の中ほどに住む人が例年用意してくれる。

ii 当日

7月24日(日曜日)の午後3時45分に竹を用意してくれる人の家に集合する。そこで、長さ3mほどの竹2本をもらう。竹のうち1本はお払い用、1本は施餓鬼旗を付けるためである。

まず、一番西の家から笹振りをする。家に着くと、家人に「お払いに来ました。」と挨拶する。笹振り用の笹で軒先を払い終わると、



位置図



集落の景観



施餓鬼旗の受け取り



お礼金の受け取り



笹振り

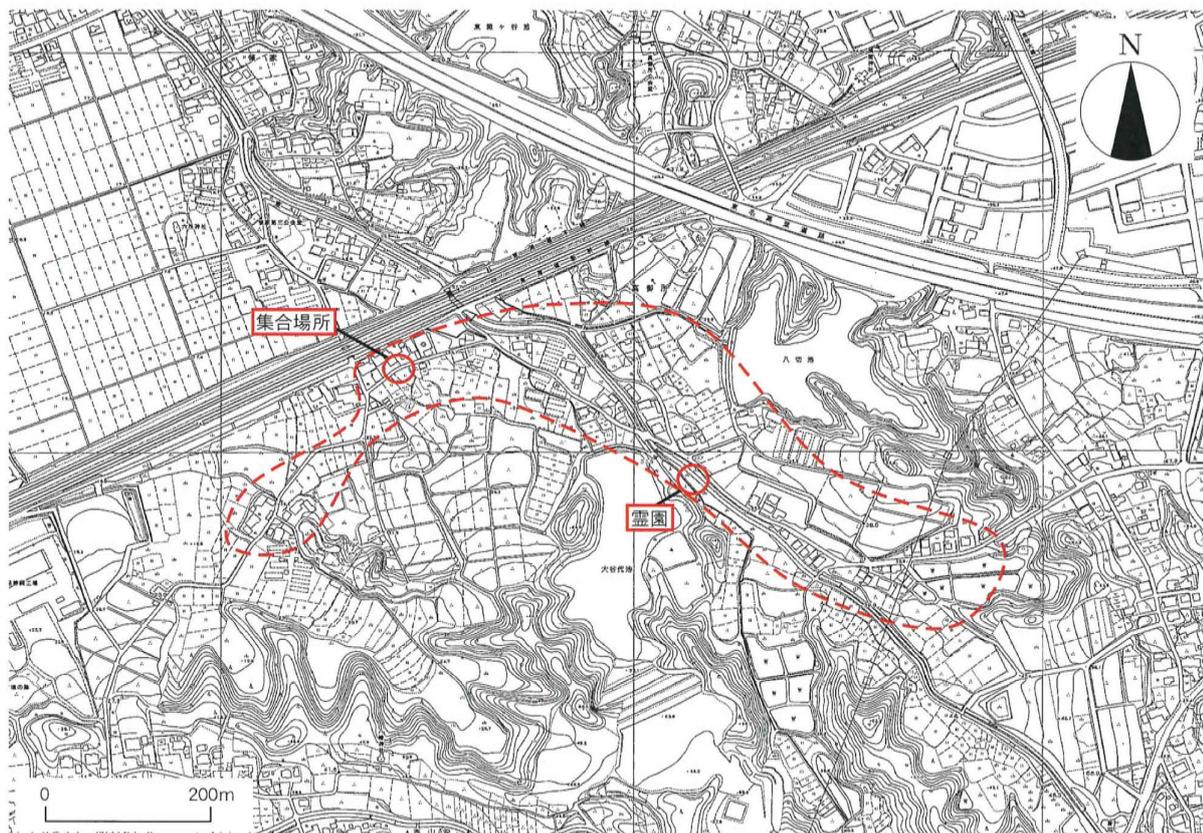
家人に施餓鬼旗用の竹に施餓鬼旗を付けてもらい、お礼の金を盆に受け取る。

そこから東に進み、一番東の家まで終わると、集落の中ほどにある大谷代池の畔のおおやしろ霊園に向かう。ここで、笹を納めて笹振りを終了する。この笹は、用意してくれた人が燃やして処分する。

この場所で、お礼が盆に広げられ、子どもたちで分配について相談する。金は参加者に公平に分け、菓子をじゃんけんで分け、午後6時30分頃に終了する。



笹の処分



現在のチャンチャカチャン関係の位置図

3) 昭和24～26年頃の例

昭和14年生まれの男性の記憶による。

実施日は、7月24日と決まっています、参加者は小学4年から6年の男児で、7、8人だった。前日に2本の竹を採って、軒を払うものと施餓鬼旗を付けるものにした。

当日の午後5時30分～6時頃から始めた。集合地は記憶にない。

家に着くと、「お払いに来ました。」と言って、軒先を笹で払った。その後に施餓鬼旗を付けてもらった。初盆の家では、灯籠を集めた。笹振りが終わり次第、精霊送りに移り、1kmほど離れた和光橋まで笹を納めに行った。笹を納めて、そこで6年生が金を分配した。初めてもらった金は小学4年で5～10円くらい、小学6年で200、300円くらいだったと思う。もらった金で和光橋のたもとの菓子屋で駄菓子を買うのが楽しみだった。和光橋から家に戻って来た時は、まだ薄明るかった。

4) 昭和7～9年頃の例

大正11年生まれの男性の記憶による。

実施日は7月24日で、参加者は尋常小学校の4年から6年の男児であった。当日、保護者が真竹2本を切ってくれてあり、午前10時頃から笹振りを始めた。

学校は早退してきた。学校の先生もわかっていたので、「よし、やってこい。」という反応だった。

持ち物は、笹2本とお礼を入れる巾着袋である。

家に着くと、笹で軒先を払った。その後で、笹に施餓鬼旗を付けてもらった。初盆の家では太い竹に灯籠や提灯をぶら下げたものを手渡してくれた。灯籠は、120～130cmくらいの大きさで、四角の木箱の上に竹の冠が載っていた。灯籠の下には、1mくらいの長さの紙と布が垂らしてあった。提灯は40cmくらいの大きさで、岐阜提灯のような形であった。子どもが亡くなった時は、灯籠でなく提灯を使っていた。お礼は、紙に包んで渡してくれた。1時間くらいで笹振りを終了し、集落の西端近くにあった墓に笹を置いて、一旦解散した。

夕方7時頃、笹を置いてある場所に集合し、和光橋へ向かった。橋では、^{さいだ}細田の人たちが夕涼みに出て来ていて、持って行った笹や灯籠に火を点けてくれた。熱くなって持てなくなると、川へ納めた。

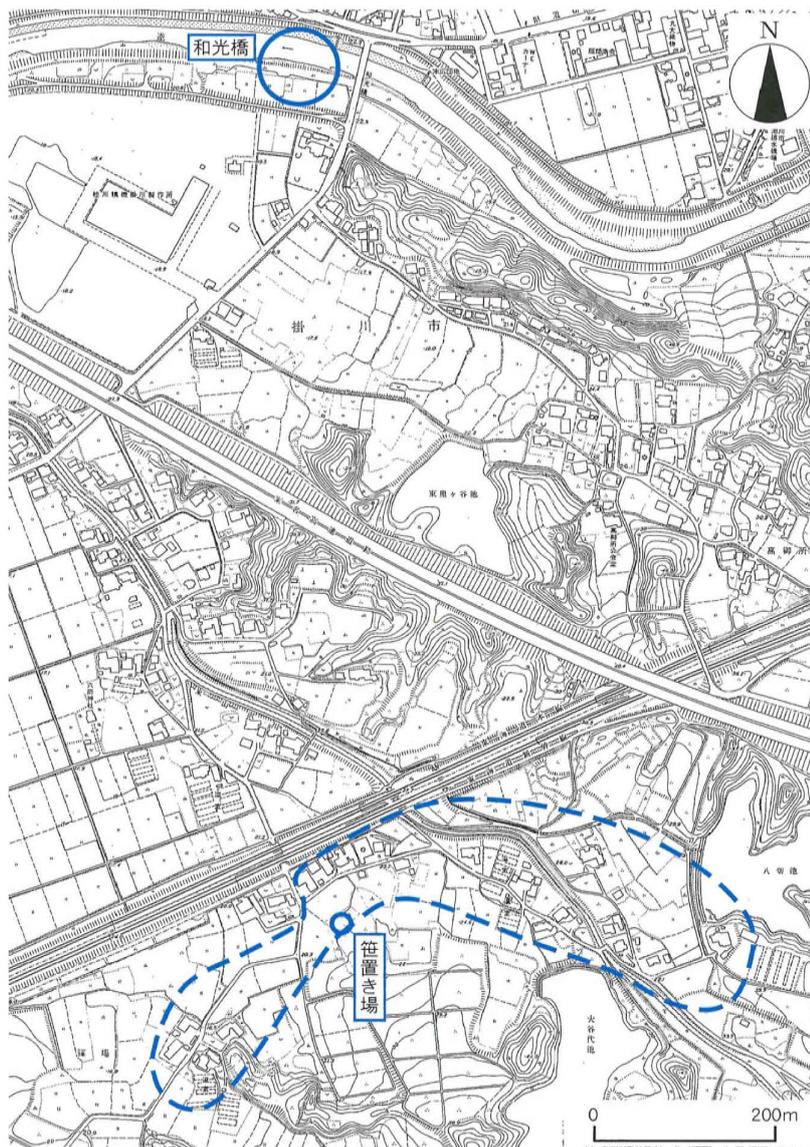
お礼は、各家5銭、オダイ様（金持ち）10銭、初盆の家は30銭くらいだった。お礼の分配は、小学6年が行った。いくらもらったか額は覚えていないが、学年でいくらか差があったと記憶している。



笹を置いた墓地



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



過去のチャンチャカチャン関係の位置図

(4) 領家区 1区綱川

1) 地区の概要

領家区は、江戸時代の村名が領家村で、『掛川誌稿』に戸77、寺社は六所大明神、曹洞宗長昌寺、長泉寺、金西寺、観音堂、庚申堂の記載がある。

領家は、およそ東西1.2km、南北2.1kmと南北に細長く、1区から3区に分かれている。1区は、さらに綱川と新家に分かれている。

綱川の中央を近世の東海道が通り、西隣の岡津との境を垂木川が流れている。垂木川は、俗称綱川と呼ばれ、『改元紀行』等にみえる板橋「綱川の橋」が架かっていた。

『東海道宿村大概帳』の領家村の項にある「家居少し、其余ハ並木也」の記述が、この綱川の集落を指していると考えられる。

綱川は、東西400m、南北150mほどの小さな集落で、平成2年の世帯数19、23年は27で増加している。

領家は、1区綱川、1区新家、2区、3区に分かれていて、それぞれで「チャンチャカチャン」を行っている。

2) 平成23年の概要

i 笹振りの準備

笹振りと精霊送りから成り、参加者は小学生の男女である。

8月23日(火曜日)の午後、住民が3mほどの長さの新竹を2本採る。持つ時に邪魔にならないように、子どもの背丈くらいの高さまで枝を払う。笹に施餓鬼旗は付けない。

役割は、笹持ち2人、鉦叩き1人、お礼の受け取り1人、施餓鬼旗の受け取り1人である。現在使用している鉦と撞木は、平成18年に新調したものである。



袋井市

位置図



集落の景観



鉦叩きと笹振り



鉦叩き

ii 笹振り

8月24日(水曜日)の午前4時30分頃、子ども6人と保護者3人が区の公会堂に集合する。笹振りに使うものは、笹2本と鉦である。

家に着くと、玄関先で鉦叩きが鉦を叩き、笹持ちが玄関周辺の軒下を払い、蜘蛛の巣等を取り除く。鉦叩きは、家人が出てくるまで叩く。道中は叩かない。家人が出てきてお礼を受け取るまで笹振りをを行う。受け取った金は、布製の手提げ袋に入れる。中には施餓鬼旗を渡す家もあり、受け取り役や保護者が受け取る。

集落を回って、午前5時過ぎに公会堂に戻り、保護者1人と子ども6人で金の集計を行う。分配は、集計に携わった保護者が、みんな均等になるように考慮した。袋に金を入れて、それぞれの子に渡す。使用した笹と回収した施餓鬼旗を人目につかない公会堂の北側に置き、5時30分頃に一旦解散する。



笹振りの道中

iii 精霊送り

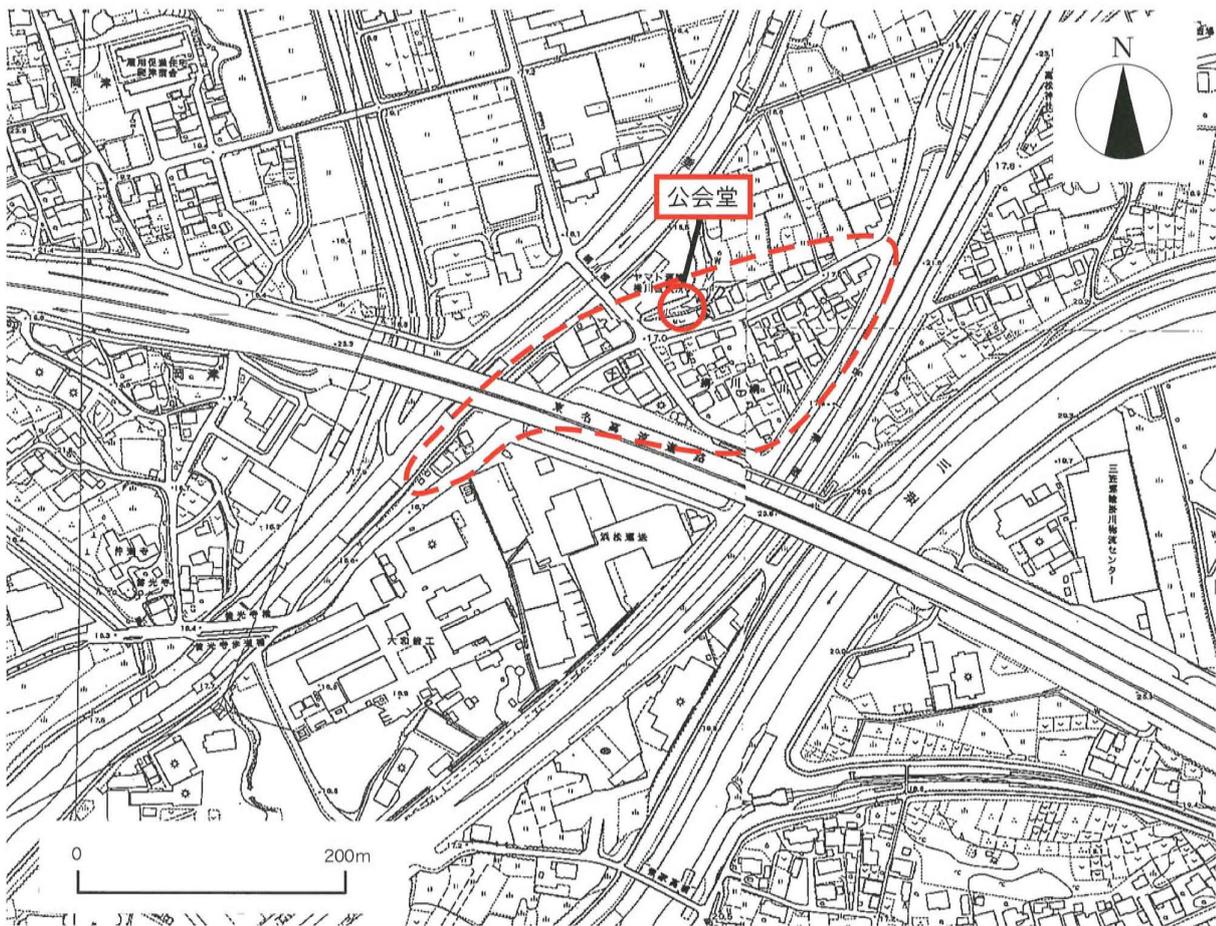
8月24日(水曜日)の午後6時30分過ぎ、公会堂に子ども2人と保護者等大人3人が集合する。

公会堂の西側の空き地で、バケツに施餓鬼旗を入れて燃やす。灰は、後日畑に埋めるとのことであり、笹は、燃えるごみとして出すとのことである。

以前は、区内を流れる垂木川の河原で施餓鬼旗を燃やして、灰と笹を垂木川に流したが、環境に配慮して流すのをやめたとのことである。



精霊送り



現在のチャンチャカチャン関係の位置図

3) 昭和24～31年頃の例

昭和18年生まれの男性の記憶による。

8月24日に行われていて、参加者は小学生から中学2年の男児であった。

前日に、火の見櫓の向かいにあった竹藪で竹を1本採っておいた。鉦は、鉦叩きの子どもが保管していて、終わると次へ引き継いでいった。

役割は、鉦叩き・笹振り（小学6年、5年）、お礼を受け取る会計係1人（中学生～小学校高学年）、その他は笹振りについて行くだけであった。

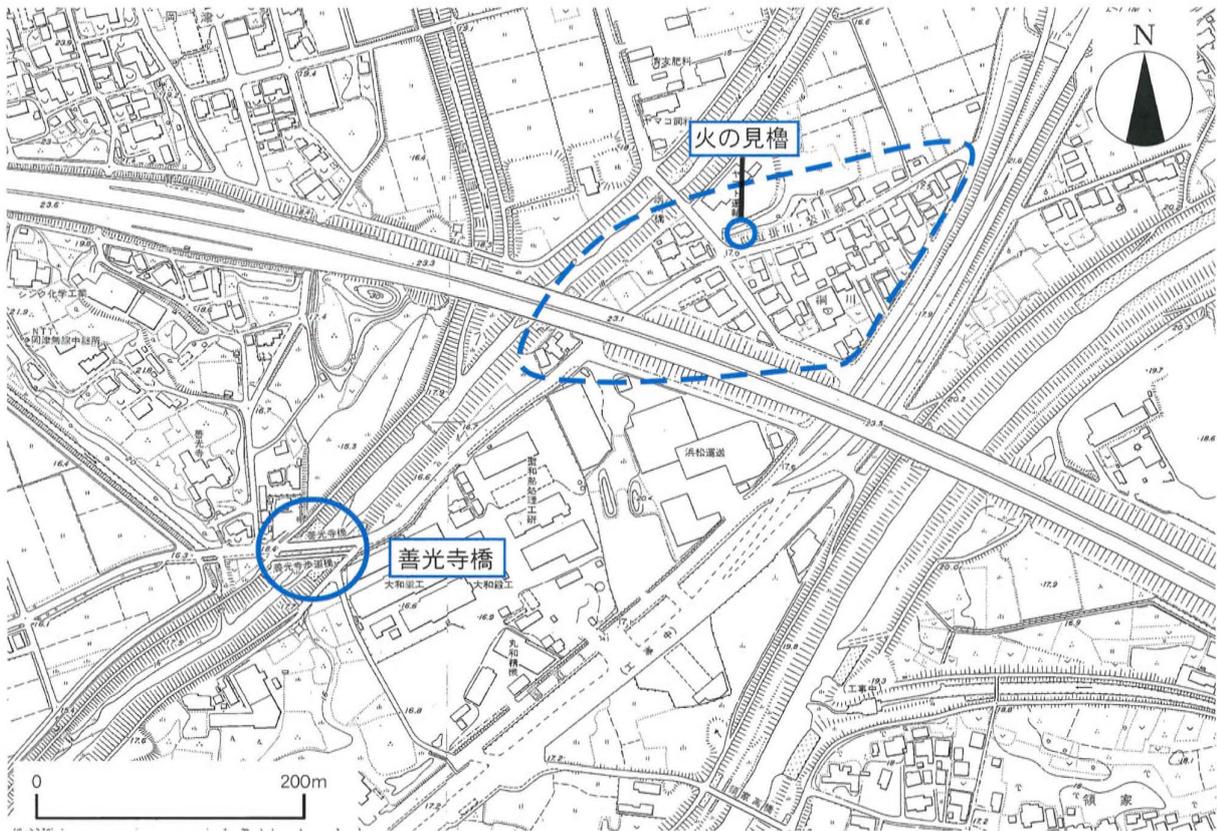
8月24日の午前4時か4時30分頃に火の見櫓に集合し、一番西の家から行った。鉦叩きは、ずっと叩いていた。家に着くと、全員敷地内に入った。軒先を笹で払い、笹に施餓鬼旗を付けてもらった。初盆の家では灯笼を集めた。灯笼は、淡い青色でばか（とても）きれいだった。

一番東の家を払い終わると、火の見櫓に戻った。集めた灯笼と笹は、火の見櫓の向かいにあった竹藪の横に置いた。火の見櫓で上級生がお礼の分配をした。小学1年で初めてもらった金は7円、中学2年で30～40円くらいだったと思う。

午後7時頃、善光寺橋で笹と初盆の灯笼に火を点け、持てる限界まで持っていて、熱くなったら橋の上から川に納めた。善光寺橋では、岡津の人たちが屋台を引いてきて、笹や灯笼を焼いている様子だった。



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



過去のチャンチャカチャン関係の位置図

(5) 領家区1区^{しんけ}新家

1) 地区の概要

新家^{しんけ}は、南北に細長い領家区の北端に位置し、楽器工場の周辺700mほどの範囲に民家が点在している。

新家の世帯数は、平成2年に16、23年に22と増加している。

2) 平成23年の概要

i 笹振りの準備

笹振りと精霊送りから成り、参加者は小学生の男女8人である。役割は、太鼓叩き1人、鉦叩き1人、笹持ち1人、お礼受け取り1人がある。

8月23日(火曜日)の夕方、住民が自分の所有する山で新竹を採る。昨年までは垂木川の土手で採っていたが、竹がなかったので自分の山に場所を変えたとのことである。

竹を採る前に塩をまく。子どもが持ちやすい太さの竹を4m近い長さに切り、持ち易くするために子どもの背丈くらいの高さまで枝を払う。竹を持って帰る道は、行きとはルートを変える。

鉦と太鼓を使用するが、これは平成18年に綱川の鉦、領家2区・3区の鉦・太鼓と一緒に領家区で新調したものである。

ii 笹振り

8月24日(水曜日)の午前6時30分から公会堂でラジオ体操を行い、終了後に笹振りを行う。

公会堂を出発して、笹持ちを先頭に一団となり、反時計回りに仏教徒の家を回る。

道中は無言で、鉦、太鼓もない。家に着くと「おはようございます。」と挨拶する。家人が出てきて笹に施餓鬼旗を付け、笹振りを行う。「チャンチャカチャン」の唱えごとに合わせ太鼓と鉦を叩く。この唱えごとを3回繰り返す。笹振りが終わり、お礼を布袋に入れてもらう。笹振り



集落の景観



笹振り



盆提灯の受け取り

とお礼の受け取りが逆の場合もある。初盆の家では、施餓鬼旗を笹に付けてもらい、提灯は子どもが受け取る。最後に富部川の東側の家で笹振りを行う。

iii 精霊送り

最後の笹振りが終わると、岡津地区との境にあたる富部川の土手に向かう。

ここで施餓鬼旗を笹から外して、旗を燃やす。燃やす時は、子どもも保護者も合掌する。笹は土手に納める。施餓鬼旗が燃え尽きたのを確認して、子どもだけでお礼を分配する。年長者3人が、全員均等になるようにする。

3) 昭和27～32年頃の例

昭和20年生まれの男性の記憶による。

8月24日に行われていて、参加は小学生の男女で20人くらいいた。役割は、笹持ち、お礼の受け取り、お礼の分配を6年生が行い、他の者はただ後ろを付いていくだけであった。鉦、太鼓はなかった。前日に笹採りを行った。笹は、3mくらいの新竹を1本、上級生が調達した。

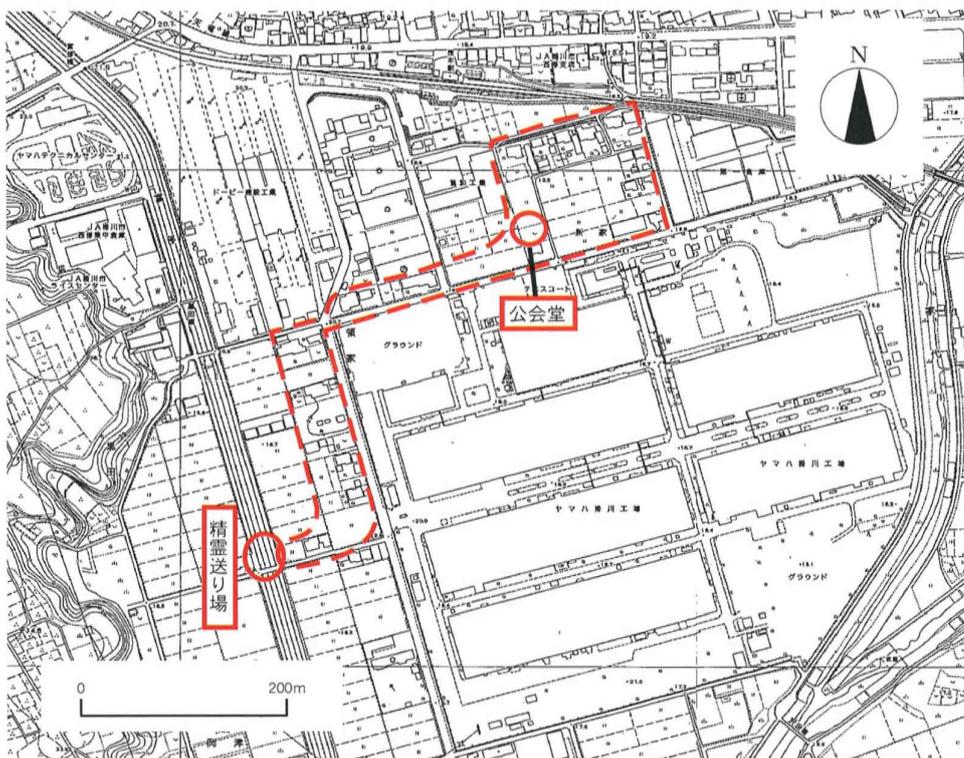
8月24日の午前6時頃、集落の一番東の家から始め、家々の軒を順に笹で払っていった。笹振りの時の唱えごと、決まった挨拶もなく、笹で軒先を払うと、家人が出てきてお礼を渡してくれた。施餓鬼旗がある家では、旗を笹に付けてもらった。初盆の家で灯籠を預かることはなかった。最後に一番西にある堰台へ行って、施餓



笹振りの道中



精霊送り



現在のチャンチャカチャン関係の位置図

鬼旗が付いたままの笹を富部川へ納めた。

お礼は、堰台の側で6年生が分配した。金額は、学年によって差があった。

4) 昭和23～28年頃の例

昭和16年生まれの男性の記憶による。

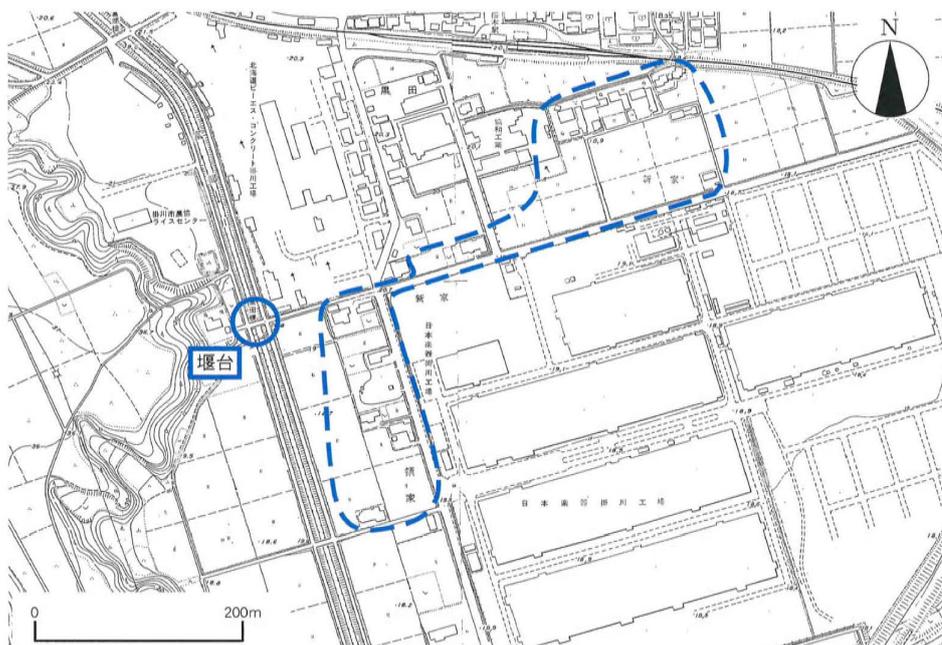
8月24日に行われていて、対象は小学生の男児であった。笹採りは、小学5、6年で行った。

笹振りは、初盆の家では灯籠を預かった。灯籠は、直径が25cmくらい、高さ80cmくらいある大きなもので、7色の色紙が貼ってあって、下に細い紐が垂れていた。

精霊送りは、堰台で燃やし、すべて川へ納めた。燃やす時には、大人が付き添っていた。



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



過去のチャンチャカチャン関係の位置図

(6) 領家区2区

1) 地区の概要

領家区の南端近くに位置し、およそ東西900m、南北300mの範囲に集落がある。

2区の世帯数は平成2年に42、23年に50と増加している。

2) 平成23年の概要

i 笹振りの準備

笹振りと精霊送りから成り、小学4年から中学3年までの男女が参加する。参加者の最上級生を当番という。役割は、笹持ち1人、鉦叩き1人、太鼓1人、お礼のお金受け取り1人がある。

8月23日(火曜日)の午後6時頃、当番の保護者等2人が、篠場の竹藪に竹を採りに行く。以前は、逆川の土手や民家の裏の竹藪等で笹を調達したが、今は竹藪がなくなったので他所に採りに行くとのことである。

竹は新竹ではなく、古い孟宗竹を切って、先端を使用することにする。今回は3.5mほどの長さの笹1本であるが、小さい場合は2本使用することもあるという。

笹は、当番の保護者が自宅で翌日まで保管し、鉦と太鼓は、公会堂から借りてきて保管する。

ii 笹振り

8月24日(水曜日)の午前3時45分、笹採りに行った当番の家で準備を行う。自転車の荷台に太鼓の面が前後の向きになるように立てゴムひもで括り付け、自転車の買い物かごに鉦ともらった金を入れるための袋を入れる。当番が自転車で、保護者が笹を持ち、公会堂に向かう。

午前4時、男児4人、女児4人、当番の保護者1人が揃ったところで公会堂を出発する。一団となって、集落の最も西の家に向かい、そこから東に戻ることにする。家の前まで来ると、笹持ちとお礼もらいが玄関まで進み、「お払いに参りました。」あるいは「お払いに来ました。」と挨拶する。家人が出てきて施餓鬼旗とお礼をもらい、笹で玄関の周辺をお払いする。お払いの時に門口にいる太鼓と鉦を叩く。アサの茎に付けられた施餓鬼旗は子どもが持って歩いたり、自転車の買い物かごに入れたりする。受け取ったお礼は、自転車の買い物かごの中の袋に入れる。

笹持ち、鉦叩き、お礼の受け取りは適宜交代し、太鼓は当番が交代で務める。



袋井市

位置図



集落の景観



太鼓・鉦叩き



笹振り



施餓鬼旗の受け取り

午前6時30分頃、公会堂に戻りお礼の分配を行う。参加した8人に均等になるように工夫し、6時45分に解散する。太鼓と鉦を公会堂に返し、施餓鬼旗と笹は、8月26日(金曜日)の精霊送りで燃やすように当番が区長の家を持って行き、保管してもらう。

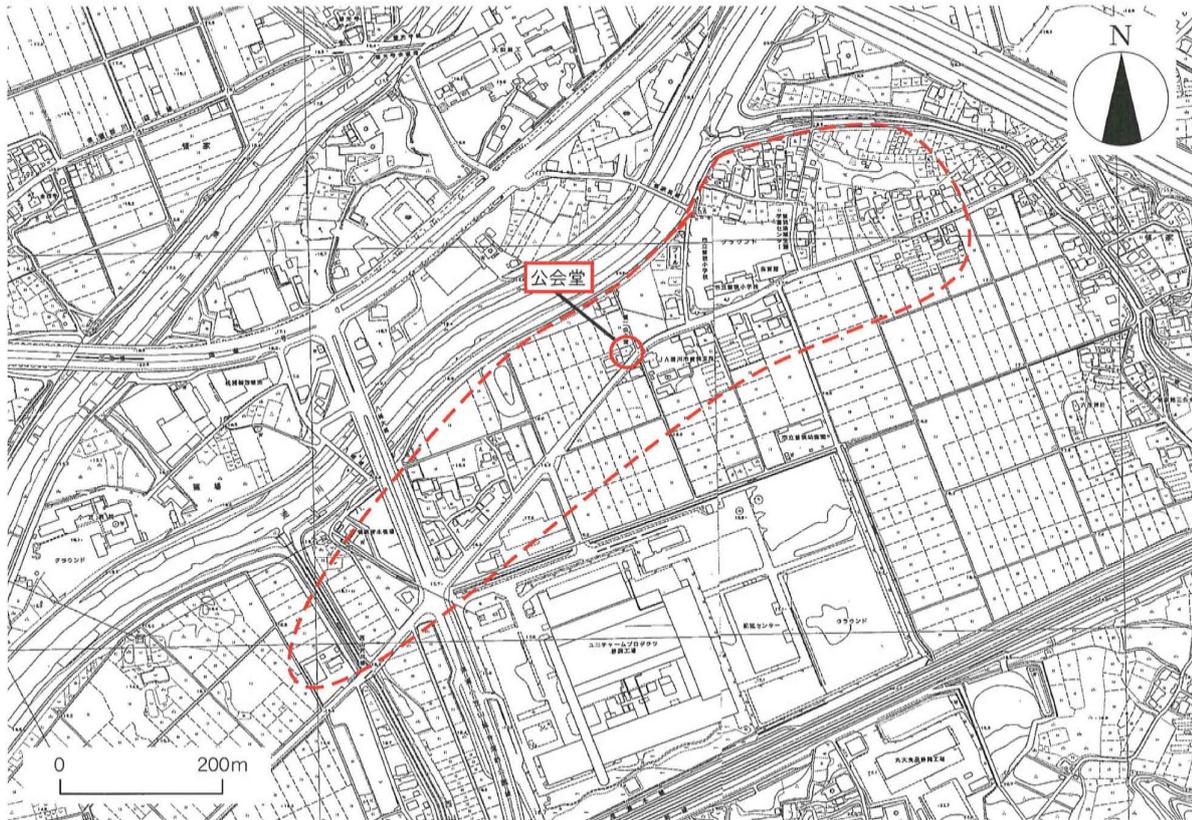
iii 精霊送り

8月26日(金曜日)の午後3時過ぎから3区の旧長昌寺で、3区の施餓鬼旗・提灯と一緒に燃やす。施餓鬼旗・提灯を一斗缶に入れ、火を点ける。燃えている間、正法寺の住職が「舍利礼文^{しゃりらいもん}」を読経する。笹は、同地に納める。

かつては逆川で燃やし、その後は場所を移して燃やしていたが、今年から3区と一緒に焼却するようになる。



精霊送り



現在のチャンチャカチャン関係の位置図

3) 昭和27~31年頃の例

昭和18年生まれの男性の記憶による。

8月24日に行われていて、前日笹採りを行った。参加者は、小学3年から中学1年の男児であったが、子どもが少なかったので、小学5年から中学1年までの2人で行った。

8月24日の午前0時頃、公会堂に集合した。持ち物は、笹、鉦、太鼓で、鉦と太鼓は自転車に括り付けて回った。

軒先を払い、施餓鬼旗を付けてもらった。初盆の家では灯籠を付けてもらった。鉦と太鼓を付けた自転車は常に道にいて、笹振りだけ敷地に入っていた。西から回りはじめて、東端の3区との境まで来ると3区の子どもが待っていて、鉦と太鼓を渡した。

2区と3区で同じ鉦と太鼓を使っていたので、2区は午前0時から3時、3区は3時から6時と、いうように使う時間帯を分けていた。

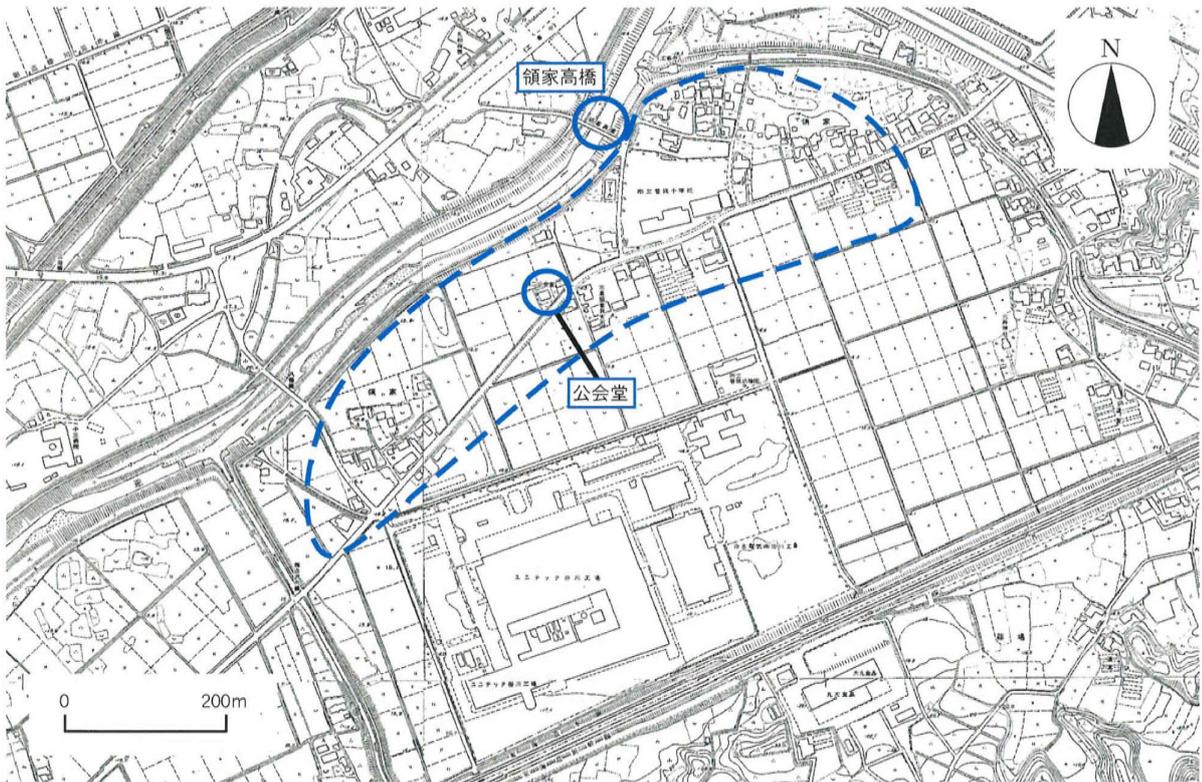
公会堂まで戻ってきて、初盆の家で預かった灯籠を公会堂の土間に吊り下げておいた。

夕方、領家高橋で、笹、灯籠、施餓鬼旗を燃やして、川へ投げ入れた。精霊送りは上級生だけで行い、保護者は出なかった。

初めてもらったお金は50円で、上級生の時は200円くらいだった。



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



過去のチャンチャカチャン関係の位置図

(7) 領家区3区

1) 地区の概要

領家区の南東隅に位置し、およそ東西300m、南北900mの範囲に集落がある。

3区の世帯数は、平成2年に40、23年に44で微増である。

2) 平成23年の概要

i 笹振りの準備

笹振りと精霊送りから成り、小学4年から中学1年までの男児が参加する。今年の参加者は4人で、うち2人が笹持ち、2人が鉦と太鼓が吊るされた竹竿を持つ役である。

8月23日(火曜日)の午後5時30分、参加者と保護者が、竹藪がある家に行き、竹を採る。笹振り用の竹は、長さ4m以上もあるもの2本で、大人の背丈くらいまで枝を払う。鉦と太鼓を吊るす竹竿は、子どもの背丈くらいの長さに切る。その後、この竹竿に鉦と太鼓を吊るす。

ii 笹振り

8月24日(水曜日)の午前3時、東山沢川に架かる苗場北橋に集合する。鉦と太鼓が吊るされた竹竿を持つ子は、男性の保護者から鉦と太鼓のリズムを教わる。



集落の景観



太鼓・鉦叩き

笹持ちを先頭に出発する。鉦と太鼓を吊るした竹竿は子どもが腰の高さで持ち、道中ずっと叩き続ける。笹持ちが家の軒先をお払いする時も、道路にいて敷地に入らない。竹竿の鉦と太鼓の間にはお礼の金を入れる巾着袋が吊るされる。

笹振りは、北から南に進み、最後にほぼ中央にある旧長昌時に至る順路である。

笹振りは、玄関で「おはようございます。笹払いに参りました。」と挨拶し、軒先を笹で払う。家人が出てくると、施餓鬼旗を付けてもらう。初盆の家では提灯を預かり、笹に付ける。最後にお礼を受け取り、道路に出てお礼の金を竹竿に吊るされた巾着袋に入れる。



施餓鬼旗の受け取り

iii 精霊送り

領家区2区で述べた内容と同じであるが、3区は薬師堂のお祭りに合わせ、昭和40年代頃から旧長昌寺で焼却している。



笹振りの道中

笹振りは、初めのうちは2人で同じ家に入っていたが、効率良く回るために、1人ずつ別々の家に行くようにする。

午前5時20分頃、旧長昌寺に到着し、子どもと保護者全員で、施餓鬼旗と提灯を笹から外し、笹を片付ける。5時30分頃、子どもたちが、旧境内の一画にある薬師堂に入り、お金の分配の相談をする。この時、保護者は外で待機する。子どもたちが薬師堂から出てくる。みんな均等に分けたようである。

鉦と太鼓、施餓鬼旗と提灯を薬師堂に置き、5時40分頃家路につく。



施餓鬼旗・盆提灯の取り外し



現在のチャンチャカチャン関係の位置図

3) 昭和11～15年頃の例

昭和3年生まれの男性の記憶による。

準備は、前日に笹採りを行った。笹はどこにでもあって、自分で採る子もいたが、大人に手伝ってもらう子もいた。参加者は、尋常小学校3年から高等小学校1年までの男児であった。

8月24日の午前3時頃、領家2区と3区の境で、2区から鉦と太鼓を受け取る。鉦と太鼓は、1本の竹に吊るしてあった。前に鉦が、後ろに太鼓が吊るしてあり、2人で担ぐ。鉦と太鼓の間に下級生が入って鉦を叩き、後方で担ぐ上級生が太鼓を叩いた。鉦が「チャンチャカチャカチャン」と叩き、その後に太鼓が「ドンドコドンドン」と叩き、道中交互に繰り返して進んでいった。鉦と太鼓は、常に道にいて、家の敷地には入らない。早く終わらせるために、笹振りは各家に1人ずつで行うように手分けした。まず「笹払いに来ました。」と挨拶し、軒先を払う。家人が出てきて施餓鬼旗を付けてもらい、最後にお礼をもらう。初盆の家では灯笼を預かった。回る道順は、北から南に進んで行って、最後に長昌寺薬師堂に行く。ここへ笹竹やおとうろう様(灯笼)を置いておく。上級生が薬師堂でお礼を3段階くらいに差をつけて分配した。夜明け頃には一旦終わった。

24日の夕方、長昌寺薬師堂に集合し、笹竹やおとうろう様をみんなで担いで和光橋まで行き、川に納めて終了した。帰りに和光橋のたもとの菓子屋で駄菓子を買って帰った。



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)

(8) ^{おかっ}岡津区

1) 地区の概要

領家区の西隣、近世東海道の北側に広がる集落で、『掛川誌稿』には「南北長さ廿町許、東西三四町許、所謂高平の地たり、原上に人家多し戸廿六(26) 八幡宮 神明宮、山王祠 夏涼山仲道寺」とあり、丘陵上に形成された集落である。

明治22年に、原川町と高御所村、領家村等と合併し曾我村となり、昭和29年からは掛川市の大字となる。

昭和43年、集落の北東隅に80戸が入居する雇用促進住宅が造られ、世帯数が急増する。昭和52年の世帯数138、その後増減を繰り返し、平成22年は107である。

昭和44年に開通した東名高速道路が、南端近くを東西に横切る。

2) 平成23年の概要

i 笹振りの準備

笹振りと精霊送りから成り、小学3年から中学3年までの男女が参加する。役割は、太鼓叩き、鉦叩き、笹持ちがある。東西2組に分かれ、西組が鉦、東組が太鼓を持って回る。

8月23日(火曜日)、参加者は各自竹を採り、家にある施餓鬼旗を笹に付ける。

ii 笹振り

8月24日(水曜日)の午前3時20分頃、各自笹を持って公会堂に集合する。子どもたちが持つ笹には男竹と女竹があり、笹の種類には拘らないことがわかる。

鉦と太鼓は、公会堂に用意されている。中学3年の親方(女子)が、参加する子ども16人を東組7人、西組9人に分ける。今年は、中学3年の女兒が2人いるため、1人が東組の親方を、もう1人が西組の親方を務める。東組の親方は、太鼓兼お礼集金係、西組の親方は、鉦叩き兼お礼集金係を務める。



集落の景観



東組・西組の組分け



東組の笹振り



西組の笹振り



東組の笹振り道中



西組の笹振り道中

東組は、太鼓を先頭に笹持ちが後に続く。太鼓は、「ドンドドン」のリズムで道中ずっと叩いている。家に着くと、笹持ちが笹で玄関を払う。すると家人が出てきて、お礼を渡してくれる。中には施餓鬼旗を付けてくれる家もある。もらったお礼は道路で待っている太鼓兼集金係に渡す。

西組は、鉦叩き兼集金係が先頭に立ち、笹持ちが後に続く。家に着くと、鉦の音で出てきた家人がお礼を渡してくれる。その後、笹持ちが玄関周辺をお払いする。施餓鬼旗を付けてくれる家があるのはこちらも同じである。

両組が午前5時頃、公会堂に戻ってきて、親方2人が一室でお礼の集計と分配を行う。参加者に渡す金は、封筒に入れて渡される。

iii 精霊送りの準備

8月24日(水曜日)の午後1時頃から、子どもたちが各家から集めてきた施餓鬼旗・提灯を持って公会堂に集合する。施餓鬼旗は、小笹に結び付けてあったり、アサの茎に結び付けてあったりする。提灯は小笹に結び付けてある。その間に区の役員が屋台をつくる。屋台は、区で所有するリヤカーを飾り立てる。リヤカーの大きさは、およそ全長2.3m、幅90cmである。荷台の長さは1.5mある。荷台の前方中央に太鼓を固定する。太鼓の



施餓鬼旗・盆提灯の回収

大きさは、直径35cm、高さ15cmである。リヤカーの後方左側に寄せて大太鼓が括り付けられる。大太鼓は、直径50cm、最大径60cm、長さ63cmの大きさである。太鼓と大太鼓の間に子どもが座るための座布団が敷かれる。リヤカーの後方右側には先端を切り落とした長さ2.2mほどの竹が立てられ、ほおずき提灯が6個飾り付けられる。

iv 精霊送り

8月24日(水曜日)の午後6時、参加者の保護者が公会堂に集合して、笹を持って歩く子どもの数だけ、笹4本を束にしたものをつくる。

午後6時45分、屋台のほおずき提灯、初盆の家で受け取った提灯に火が入り、公会堂を出発する。7時出発の予定であったが、雨の心配があったため、15分早く出発する。「屋台下」の曲を太鼓、大太鼓とも子どもが叩く。男児2人が屋台の手木を持ち、屋台を引いていく。屋台の前を笹を持った子どもが歩き、後ろを保護者と区の役員が付いていく。

公会堂から送り場である善光寺橋までおよそ500mの距離であるが、雨が激しくなってきたため、途中の東名高速道路のガード下で雨宿りをする。その後、雨がますます激しくなり、笹を軽トラックの荷台に載せ引き返す。屋台は後方に立ててある笹を取り外しシートを被せ引き返す。公会堂に戻り、保護者で太鼓を片付け、7時25分に解散する。

本来ならば、善光寺橋で施餓鬼旗等を燃やして川へ納め終了するのであるが、後日行うことにする。

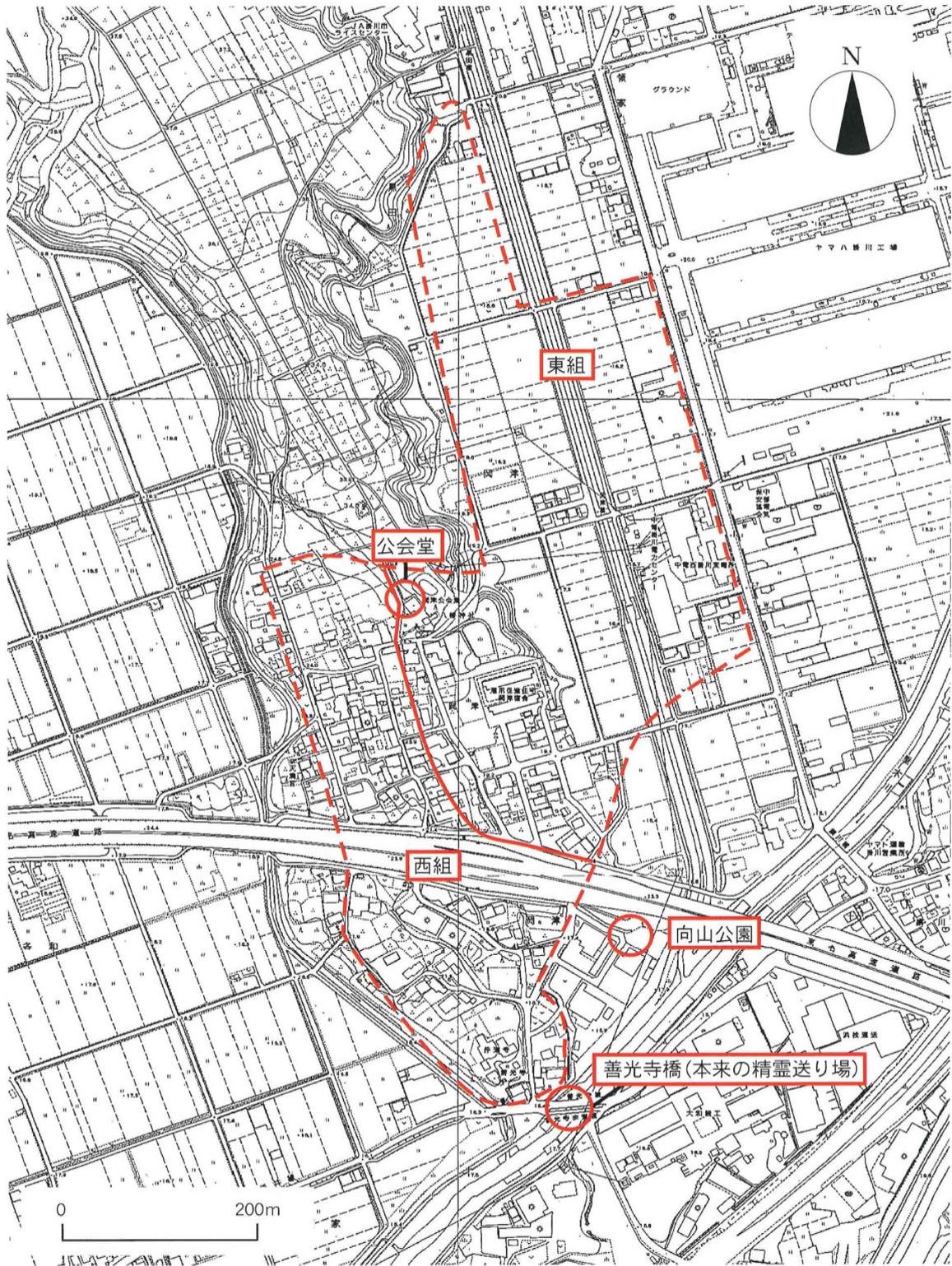
8月26日(金曜日)の午後4時、区の役員が向山公園に集合する。施餓鬼旗、初盆の提灯、屋台のほおずき提灯、笹を燃やし、午後4時30分頃に終了する。



屋台の準備

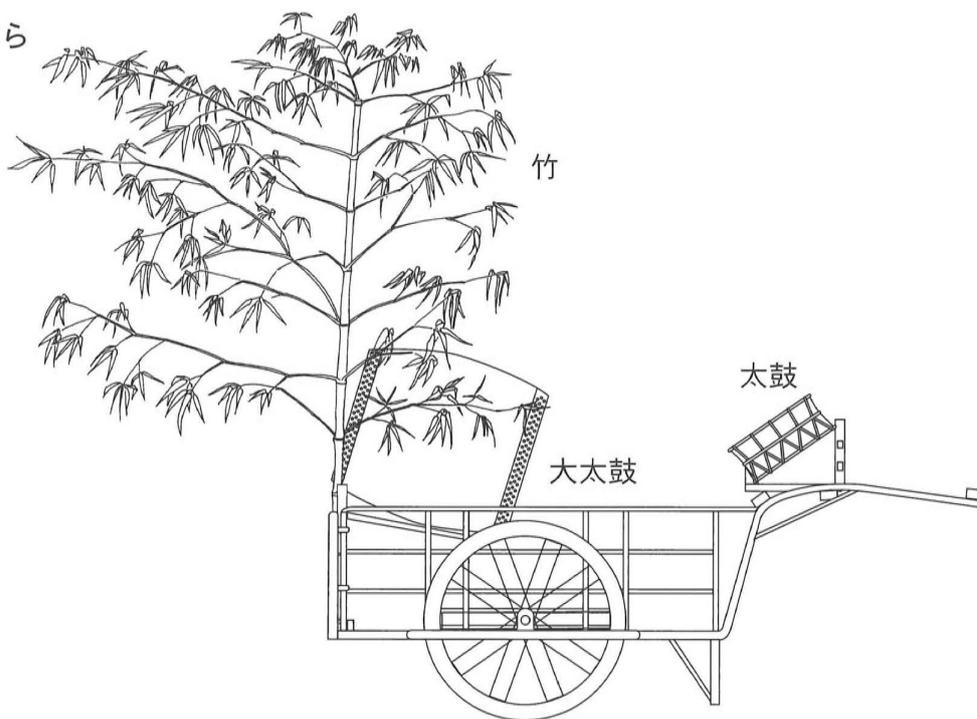


精霊送りの笹持ち

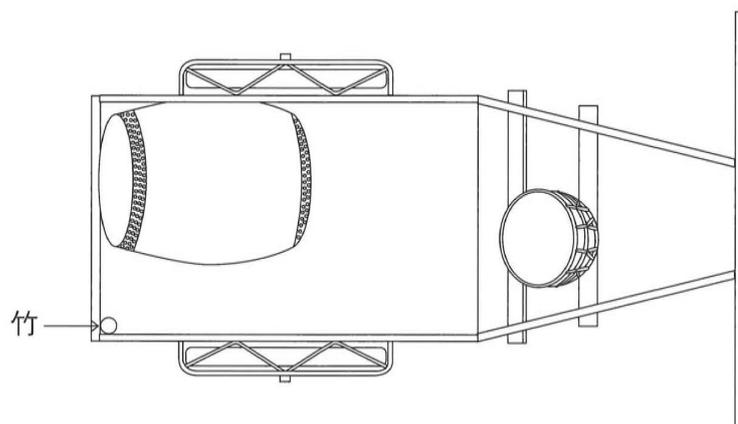


現在のチャンチャカチャン関係の位置図

横から



上から



屋台の図

3) 昭和22～29年頃の状況

昭和15年生まれの男性の記憶による。

実施日は8月24日で、小学1年から中学2年までの男児が対象であった。旧国民学校高等科2年生までが対象だったので、新制中学2年までが対象となった。

準備は、前日の午後に公会堂に集まり、東、中、西の3組に分け、役割分担と回るルートを決めた。役割は、中学2年が全体を取り仕切る役であったが、親方等の呼び名はなかった。各組の最上級生がお礼をもらう役、小学4年か5年が鉦叩きと太鼓叩き、その他の者が笹振りとなった。役割が決まると、笹振りは、自分が使う笹を用意した。

8月24日の当日は、午前2時頃に公会堂に集合し、東、中、西の3組に分かれて出発したが、鉦と太鼓は中組にしかない。鉦と太鼓以外は、全員家の敷地に入った。笹振りが軒先を払い、お礼をもらった。どこの家でも起きて待っていてくれて、笹で軒を払い始めると家の人が出てきた。初盆の家ではお礼を多く包んでくれた。笹振りが終わると仲道寺に集まり、笹振りに使った笹を石段に置いておいた。

お礼の分配は、笹振りの後に仲道寺の境内や公会堂で行った。年によって場所が違ったのかもしれない。初めてもらった金額は5円以下だった。



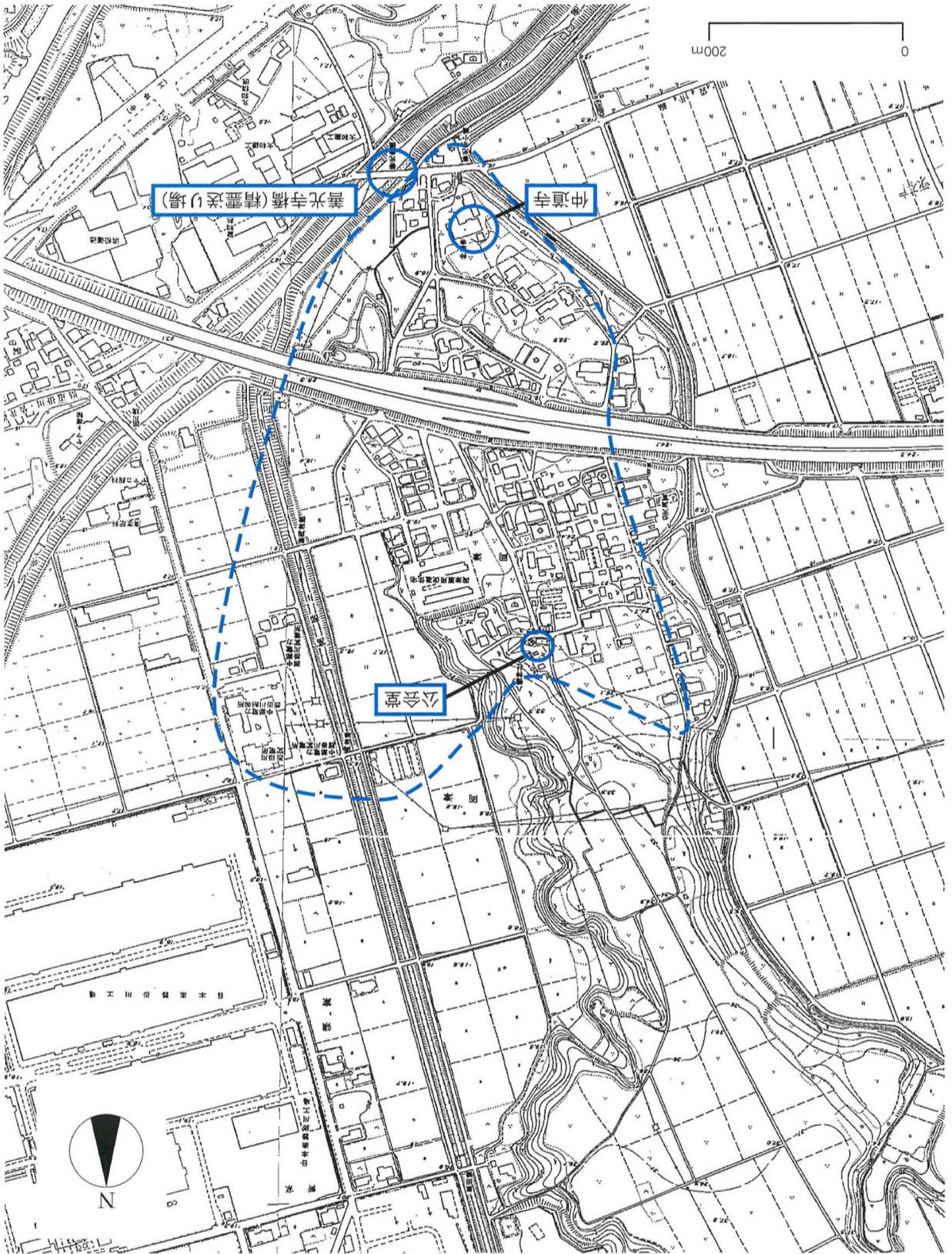
国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)

午後2時頃から、子どもたちが手分けして施餓鬼旗と初盆の家の灯籠を集めて公会堂に向かった。各家では、施餓鬼旗を笹に付けて門口に挿してあった。施餓鬼旗を送るという意味だろうか、送り火も焚いていたと思う。公会堂に集まって、子どもだけで屋台の準備を行った。屋台は、チャンチャカチャン専用で、大太鼓と太鼓を置く台が取り付けられてあった。大太鼓を後方に、太鼓を前方に取り付けた。屋台の中央に木の種類は忘れたが、公会堂の裏山で採ってきた木を取り付けた。この木にはほおずき提灯を5、6個くらい飾り付けた。

午後7時頃から精霊送りを始めた。精霊送りは、公会堂から出発し、屋台の太鼓は子どもが、大太鼓は大人が叩いた。屋台の前を笹や灯籠を持った子どもが行き、後ろに大人たちがついていた。みんなで「ヨイトコサッサア」と唱えながら進んで行った。

善光寺橋まで来ると、橋の欄干の外へ笹や灯籠を差し出し、燃やした。この時、近くの仲道寺の石段に置いてあった笹を取りに行き、一緒に燃やした。熱くなって持っていられなくなったら、川へ納めた。その後は、公会堂へ戻り、子どもだけで片付けをした。

過去のチヤンチヤカチヤン関係の位置図



(9) 原川区

1) 地区の概要

掛川市の西端、^{はらのや}原野谷川の東側、旧東海道の両側400mほどに渡って民家が連なっている。近世には、掛川宿と袋井宿のほぼ中間の「^{あいしゆく}間の宿」で、『掛川誌稿』には、「旅客の^{しゆし}為に酒肆（酒屋）茶屋など設けて生業とする（中略）田畑固より多からず」とある。神社の記載はなく、曹洞宗の阿弥陀寺と薬師堂が記されている。

明治22年に高御所村、領家村等と合併し、曾我村となる。

『掛川誌稿』に戸数46とある。世帯数は、昭和52年に111、平成4年に74まで減るが、22年に121を数える。

昭和20年代後半に国道1号線が開通し、昭和30年代の終わり頃に国道1号線の南側に市営住宅が建設される。平成6年に国道1号線袋井バイパスが完成し、周辺に住宅が建てられるようになり、宅地化が進んでいる。

2) 昭和13～17年頃の例

行事は、「ジャンジャコジャン」と呼ばれ、昭和42年まで行われていたが、廃れてしまった。

昭和6年生まれの男性の記憶による。

i 準備

実施日は8月24日で、対象は、小学1年から5年までの男児で、前日の午後に準備を行った。

原川集会所（現在の公会堂）に保管されていた直径25～30cmくらいの鉦を原野谷川に磨きに行った。現在の原野谷川に架かる東名高速道路の橋の^{はちまん}辺りが八幡と呼ばれていて、川の中ほどにすごく深いところがあった。そこを川向こうまで泳いで渡り、粘土を採ってきて鉦を磨いた。太鼓は、竹に吊るしておいた。



位置図



集落の景観



八幡

ii 当日

8月24日の午前5時頃、集会所に集合した。

集合すると、鉦を先頭に太鼓と続いて出発した。鉦と太鼓は別々の竹竿に吊るして、それぞれ2人で担ぎ、後ろの者が叩いた。道中、「タン・タ・タ・タン・タン」のリズムで鉦が1回通り叩くと、次に太鼓が「ジャン・ジャコ・ジャコ・ジャン」と1回通り叩く、というように鉦と太鼓が交互に繰り返した。唱えごとはなかったと記憶している。

家を回る時は、「ウラ盆なので裏を回らなければいけない。」とあって、裏道を通っていった。初盆の家では灯笼を預かり、そうでない家へは敷地まで入らずに進んで行った。施餓鬼旗は、道沿いに出してくれてあった。

iii 精霊送り

鉦と太鼓を叩きながら、裏道を通って垂木川に架かる三池橋^{みついけ}へ向かった。三池橋は、旧篠場村との境に位置する。三池橋に着くと、橋の上から施餓鬼旗や灯笼を川に納めた。納め終わると、手分けして全部の家に集金に行った。集金は、「鉦を洗ったから、金をくりよう。」と言って回った。

集会所に戻り、小学5年がお金の分配をして、一番多くもらっていた。小学6年へは家までお金を届けた。小学6年は参加していないが、上の人に渡すしきたりだった。午前8時頃には終了した。

3) 昭和37～42年頃の例

昭和31年生まれの男性の記憶による。

この頃の状況は、戦前の状況と少し異なる部分がある。

鉦は、集会所に保管してあったものがいつの頃かなくなってしまったので、金西寺^{こんさい}にあった鉦を使用した。

東海道に沿って連なる民家のうち、西端から250mほどが原川区で、東端の150mほどは各和区であり、昭和30年代からは、この各和区の子どもたちも一緒に行った。対象は、戦前と変わらず、小学1年から5年までの男児であった。



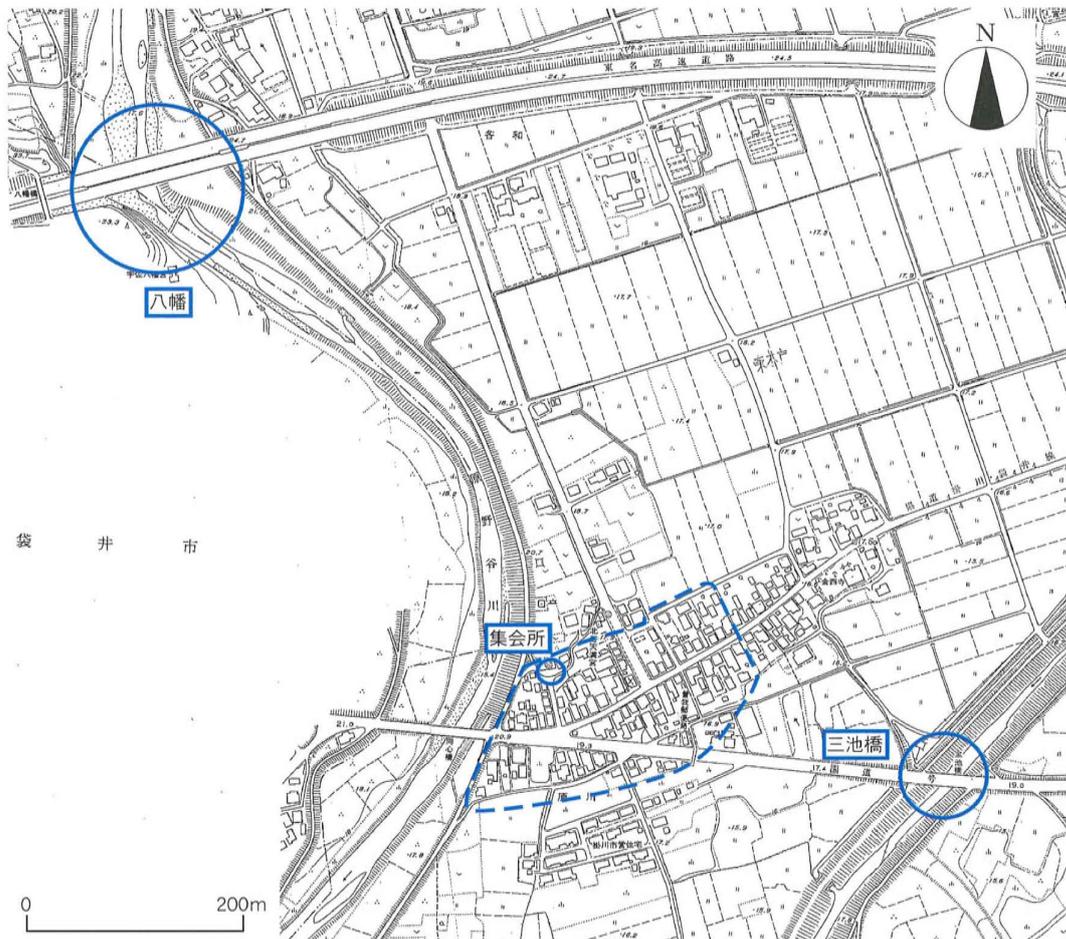
三池橋



金西寺の鉦



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



ジャンジャコジャコジャン関係の位置図

(10) 徳泉区とくいずみ

1) 地区の概要

原川の南500mほどに位置する集落である。集落の西側を原野谷川が、東側から南側にかけて逆川が流れている。かつては、原野谷川が蛇行し、徳泉の集落の南側で逆川に合流していたため、大雨が降ると水が集落に溢れ出たとのことである。

『掛川誌稿』に、戸12、寺社は六所権現と阿弥陀堂の記載がある。

世帯数は、昭和52年に21、平成3年に23でほとんど変わらないが、その後住宅が増え、22年に38となっている。

2) 行事の概要

行事は、「ジャンジャカジャカジャン」と呼ばれ、8月24日に行われていたが、昭和32年を最後に廃れてしまった。現在、この行事で使われていた双盤が区に残されている。双盤は、直径49cm、高さ14.5cmの大きさで、重さ17.5kgある。松の木で作ったL字状をした撞木もあったとのことである。

3) 昭和28～32年頃の例

昭和22年生まれの男性の小学1年から「ジャンジャカジャカジャン」最後の年になった小学5年までの記憶である。

i 準備

小学1年から6年までの男児が参加した。8月23日の晩、双盤を原野谷川に持って行って、藁と粘土岩（泥岩）でピカピカになるまで磨いた。竹も前日に採っておいたかもしれない。双盤は、6cmくらいの太さの丸太にロープで結わえ付けた。ロープは、専用のものがあつた。

ii 当日

8月24日、朝食を食べてから公会堂に集合したので、午前6時から7時頃の間と思われる。公会堂に集合すると、低学年が手分けして、施餓鬼旗とお礼をもらいに家々を回った。この間に、高学年は精霊送りの準備をしていた。

低学年が施餓鬼旗をすべて集め終え、公会堂に戻ってくると、1本の笹、多くて2本の笹に施餓鬼旗を付けた。灯籠を回収した記憶はない。



集落の景観



公会堂の跡

iii 精霊送り

午前8時頃に公会堂を出発したと思う。行列は、笹、子ども、双盤、太鼓の順番であった。双盤が「ジャンジャラジャラジャン」と叩くと、太鼓が「ペンペケペケペン」と叩く。これを交互に繰り返した。

双盤は2人で担ぐが、重たいので交代した。

公会堂から梅橋^{うめはし}までの600mほどの距離を田んぼ道を通って行った。橋に着くと、橋の上から施餓鬼旗と笹を流した。梅橋は、旧徳泉村の東の外れ、旧梅橋村との境にあたる。笹を納めると、来た道を公会堂まで戻ったが、この時には、双盤、太鼓は叩かなかった。

公会堂で、上級生がお礼を分配した。お礼は、学年によって差があり、1年生が5～10円、5年生の時に40円くらいもらった。

お金を分けた後で、上級生の指図で片付けを行った。



鉦



梅橋

4) 昭和16～23年頃の例

昭和10年生まれの子の記憶である。

8月24日に実施して、国民学校1年から高等科2年くらいまでの男児が対象であった。

午前4時頃に徳泉公会堂に集合した。公会堂の側に竹藪があり、双盤を吊るす太い竹と施餓鬼旗を付ける笹を採った。双盤をすぐ隣の原野谷川に運んで行って、河原の砂で洗って竹に吊るした。

準備が終わると、3人くらいずつに分かれて、施餓鬼旗と初盆の灯籠を集めに行って、お礼をもらった。灯籠は、竹に付けてくれてあったものを受け取った。すべて回収すると公会堂に戻って、3本くらいの笹に施餓鬼旗を付けた。

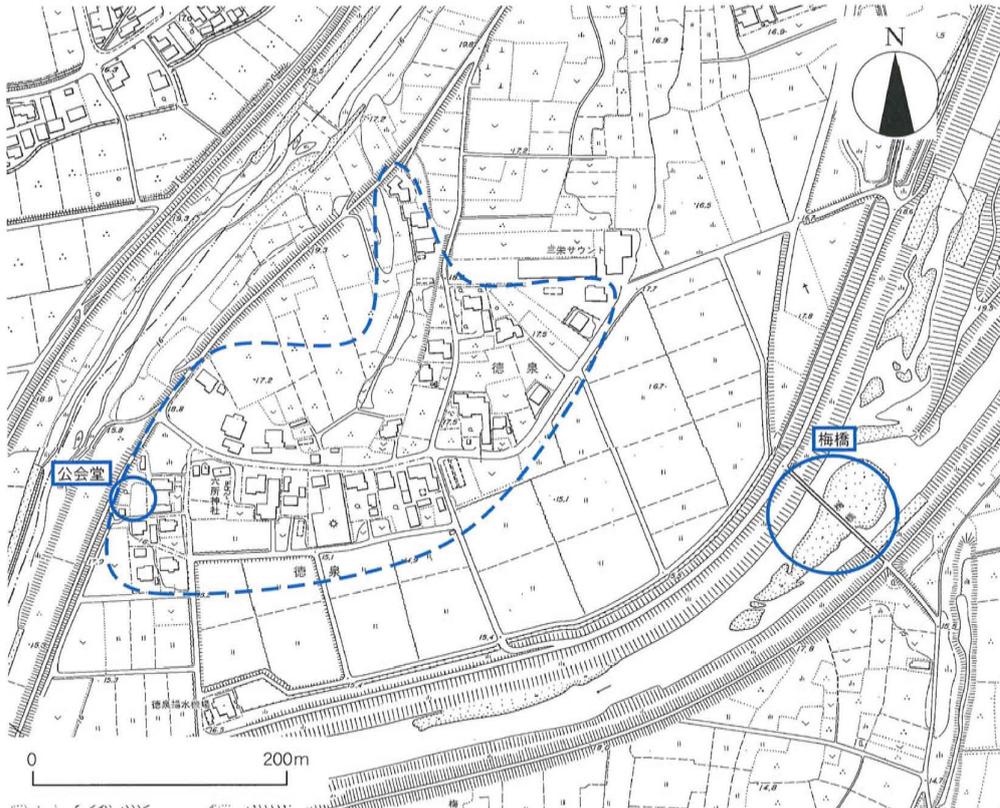
施餓鬼旗を笹に付け終わると、公会堂を出発した。この時は、灯籠を先頭に、施餓鬼旗を付けた笹、双盤と続いた。道中「ジャンジャカジャカジャン」の唱えごとと、双盤叩きを交互に繰り返した。双盤の竹竿は2人で前後を持ってうち1人が叩くが、これは上級生が務めた。

梅橋まで行って、橋の上から灯籠、施餓鬼旗が付いた笹、双盤を吊るした竹竿を流した。担ぐ竹を流した双盤は、2人で担いで公会堂まで持ち帰った。

梅橋で納め終わると、公会堂に戻り、先輩がお礼を分配した。金額は、学年によって差があった。



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



ジャンジャカジャカジャン関係の位置図

(11) ^{かくわ}各和区

1) 地区の概要

市の北西部に位置し、原川の北側に隣接する。西に標高50m程度の各和原、東に標高30～50mの岡津原があり、その間に幅700mほどの平野が広がり、平野の西端近くを原野谷川が北から南に流れている。集落は、平野の西寄り、南端は旧東海道までの南北2kmほどに及んでいる。

『掛川誌稿』には、戸100、寺社は、八幡宮、曹洞宗の永源寺、永源寺末の宝正院、見正寺、本（法）願寺の記載がある。

明治22年に、高田村、吉岡村と合併し、和田岡村となり、昭和29年に北小笠村、昭和32年からは掛川市の大字となる。

世帯数は、昭和52年に171、平成元年に182、22年に213と近年増加している。

2) 行事の概要

各和では、盆に「かさんぼこ」が、ウラ盆に「精霊送り」が行われていたが、昭和40年代前半に廃れてしまった。

「かさんぼこ」は、傘鉾と太鼓台から成る。傘鉾は、開いた番傘の縁に赤い幕を付けたものであった。「かさんぼこ」の時は、この傘鉾を掲げて歩き、太鼓台を先導する。精霊送りは、「かさんぼこ」で使用した太鼓台を使う。

各和は、^{かみ}上と^{しも}下の組に分かれていて、それぞれで「かさんぼこ」「精霊送り」を行っていた。

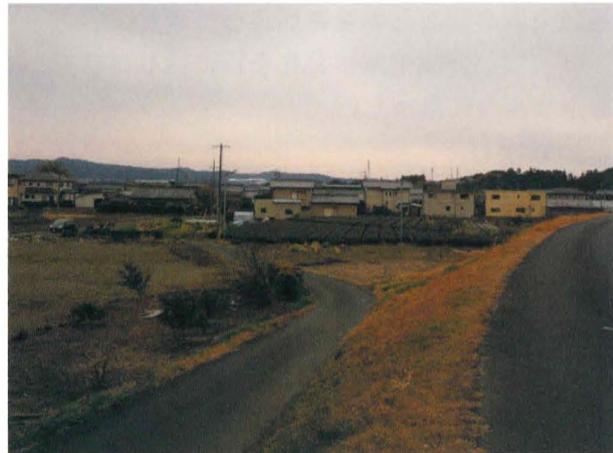
3) 昭和22～30年頃の例

昭和16年生まれの男性が各和上で行った記憶である。

i 準備

「かさんぼこ」「精霊送り」ともに、小学1年から中学3年までの男児が行った。

太鼓台は、後ろに大太鼓を前方に太鼓を載せ、中央に松の木を立てた。大太鼓も太鼓も歩きながら叩いた。太鼓台は、各和上が法願寺(現在廃寺)、各和下が永源寺に保管されていた。「かさんぼこ」の練習が始まると、子どもが太鼓台を組み立て、「精霊送り」が終わるまでの間、中学3年生の家で保管した。



集落の景観



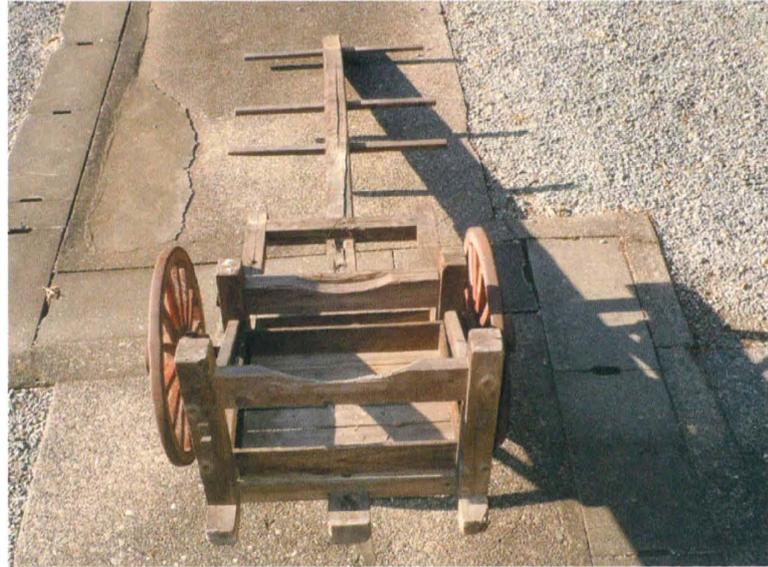
各和下の太鼓台

役割は、中学生が太鼓を叩き、小学校低学年が太鼓台を引いた。小学校高学年が、施餓鬼旗の回収とお礼をもらう役であった。

ii 当日

8月24日の午前9時頃、火の見櫓がある辻から開始した。精霊送りの時間は、かさんぼこの終了時に伝えられていた。

太鼓台は、中学3年生の家で保管されていたので、上級生が火の見櫓がある辻へ引っ張ってきた。太鼓台は、太鼓を叩きながら進んだ。曲は、「テンテケバッチン」と呼び、「屋台下」のようなリズムであった。太鼓台は家には入らず、常に道で待っていた。家々には小学校高学年が手分けして回り、施餓鬼旗の回収とお礼をもらってきた。



各和下の太鼓台

戦前は、施餓鬼旗とお礼を笹に括り付けて、玄関先に挿してあった。戦後は、お礼を手渡しでもらうようになった。

iii 精霊送り

すべての家から笹に付けられた施餓鬼旗を回収すると、区の東外れの岡津原の堂山と呼ばれる場所に向かった。

岡津原に到着すると、施餓鬼旗と太鼓台の松をそこに納めてきた。納めた後は、また太鼓を叩きながら火の見櫓の辻に戻った。

お礼の分配は、昭和30年頃が、小学校低学年が10円とすると、6年は200～300円だった。金額については、だれも文句を言わなかった。当時は小遣いがなかったのでうれしかった。



堂山

4) 昭和29～37年頃の例

昭和23年生まれの男性が各和下で行った記憶である。

8月24日に、小学1年から中学3年までの男児が精霊送りを行った。午前の早い時間から施餓鬼旗を各組ごとに回収した。施餓鬼旗は、おひねりと一緒に笹に付けて門口に挿してあった。

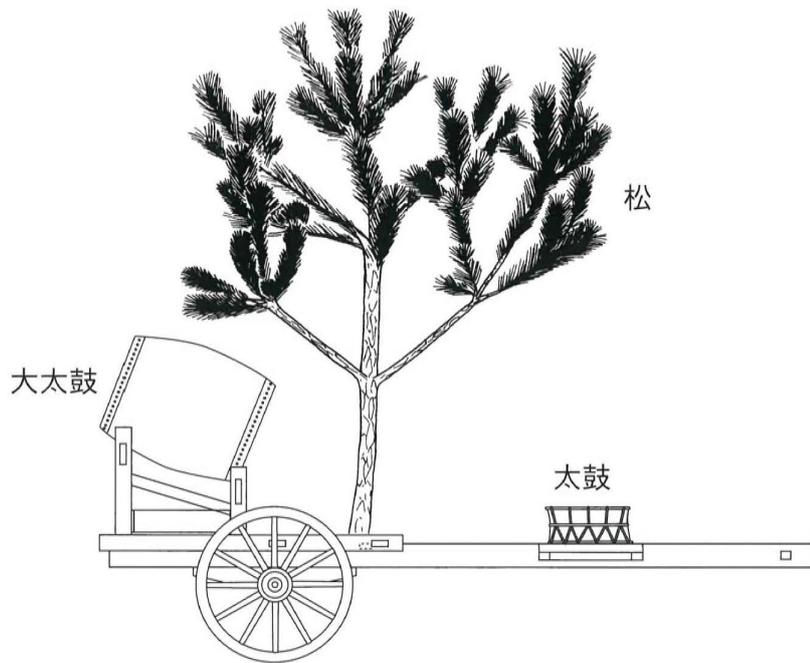
最後に権現橋の下に集まって、施餓鬼旗と笹を燃やした。おひねりは中学3年が分配したが、「かさんぼこ」より金額が少なかった。

各和下で使用された太鼓台が永源寺に保管されていて、全長2.7m、幅1mほどの大きさである。

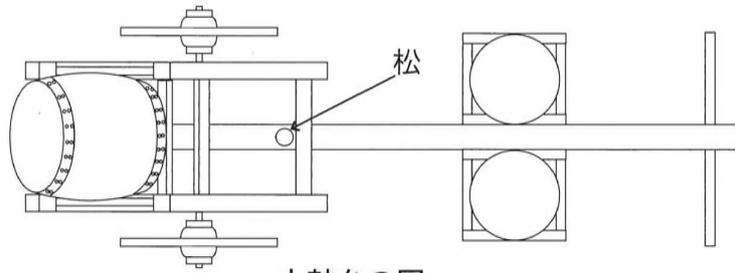


権現橋

横から



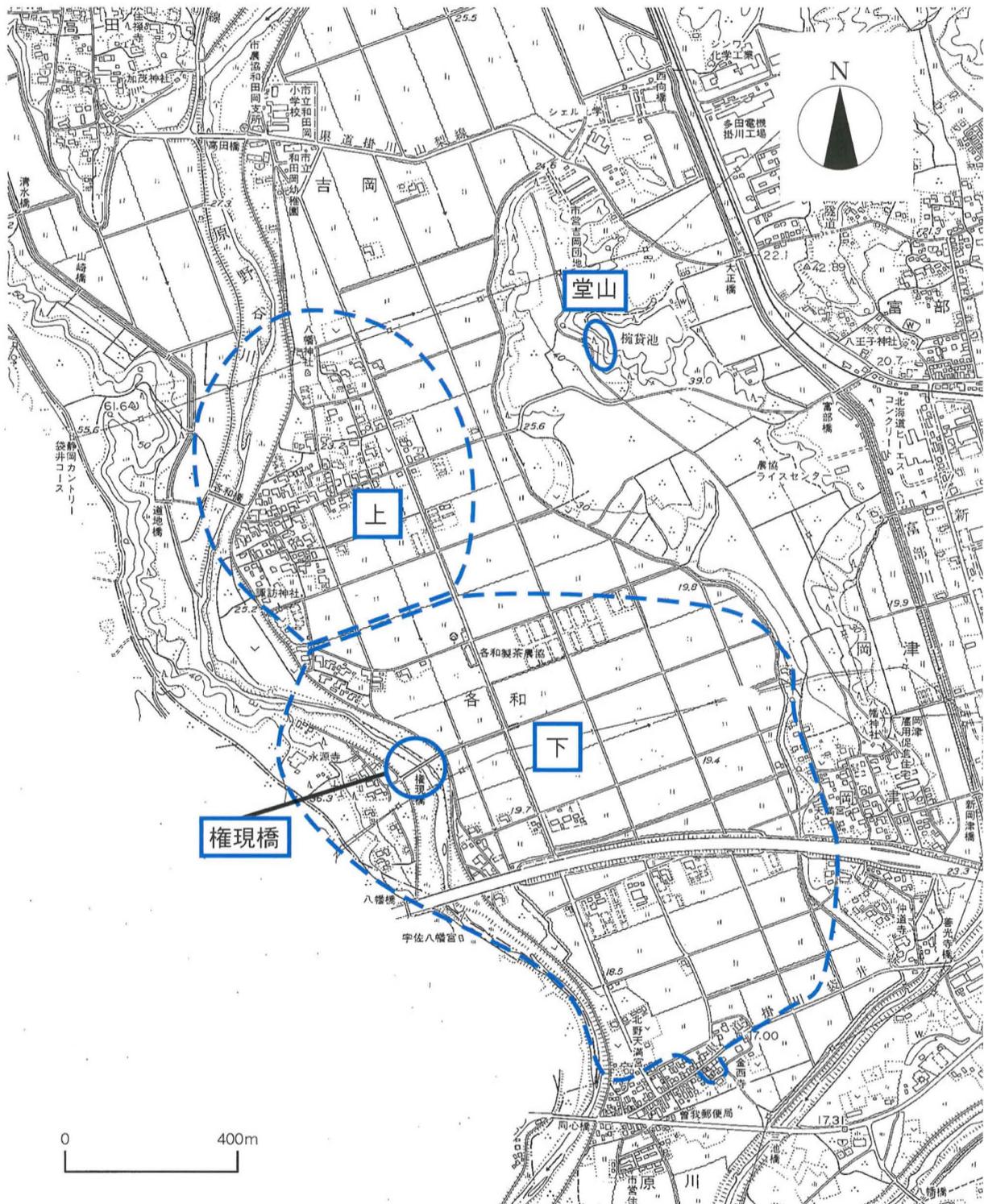
上から



太鼓台の図



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



精霊送り関係の位置図

3 ススハライ系

1 地区の概要

寺ヶ谷・影森の「ススハライ」、宮村の「ボンボン」、海老名の「オートロー（お灯笼）」を報告する。寺ヶ谷では昭和初期に「ショーリョー送り」、影森では農地改革以前の頃は「お精霊おくり」と呼んでいたようであるが、いつの頃か「ススハライ」に変化した。

寺ヶ谷と影森では現在も行われているが、宮村と海老名では廃れてしまった。市内を通る旧東海道の東端に近い日坂宿の南側に宮村が隣接する。宮村の西側に寺ヶ谷、南側に影森、東側に海老名が位置する。宮村の中を旧東海道が通り、寺ヶ谷は東海道の北側、影森の北端を東海道が横切るが大部分は東海道の南側に位置し、海老名は東海道から外れた場所にある。宮村の西側の旧東海道沿いに現在46世帯を数える塩井川原しおいがわらがあるが、『掛川誌稿』『遠淡海地志』等に名が見えないことから、江戸時代に集落はなかったと考えられる。この塩井川原には、「ススハライ」等のショーリョー送りは伝えられていない。

これらの地区は、江戸時代には佐野郡の東の外れで、隣は城東郡西方村であった。西方村では、ショーリョー送りが行われていた記録はない。

2 行事の概要

実施日は、すべて7月24日である。

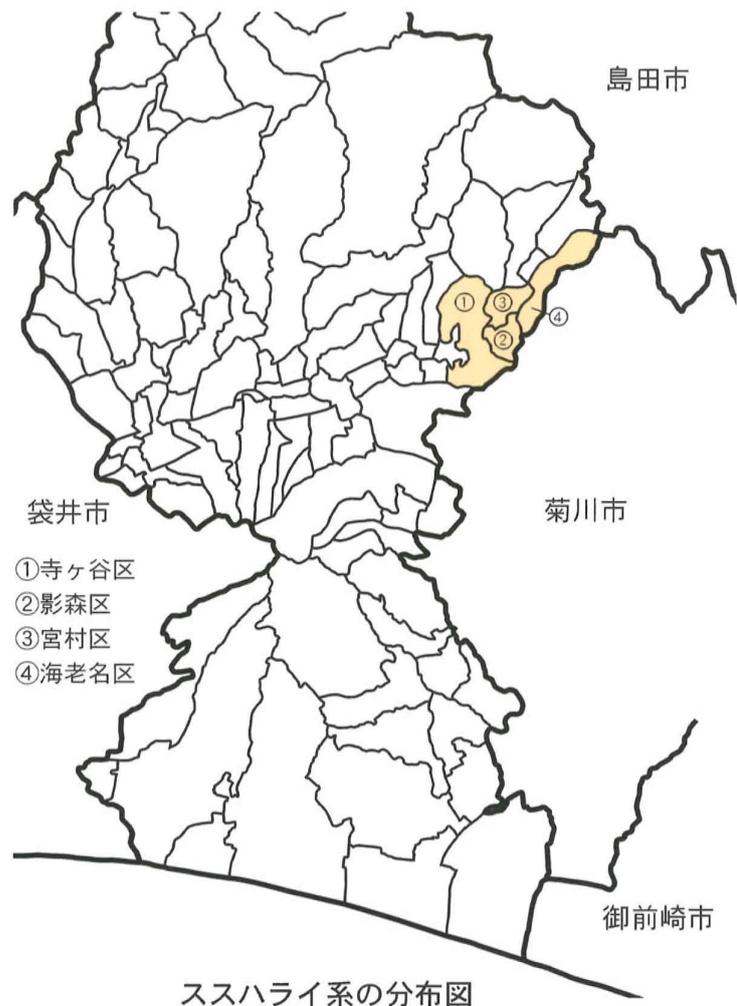
参加者は、かつては小学生だけ、または小学生から中学生の男児であったが、現在の寺ヶ谷と影森では小学生の男女に変化している。

実施時間は、現在の影森で午前中に行われているが、かつてはすべて学校から帰ってきた午後に行っていた。

笹振りは、海老名を除き行っていて、施餓鬼旗の回収は寺ヶ谷だけである。影森・宮村・海老名は初盆の家で灯笼を預かり、精霊送りで灯笼を燃やしていた。影森では、昭和18～23年頃には施餓鬼旗を畑や田圃の隅に立ててあったといい、現在は各家で処分している。

鉦はすべての地区で使用していたが、現在の影森では使用していない。

精霊送りの場所は、すべて村境である。寺ヶ谷は宮村との境にあるお地藏様、影森は、丘陵の道を登り久保くもみょう（公文名か）の村境の沢に納めていたが、海老名との境の河原に変わった。宮村は日坂との境である事任八幡宮ことのままの裏の逆川さかがわ、海老名は影森との境の河原であった。



ススハライ系の分布図

3 実施地区

(1) 寺ヶ谷区

1) 地区の概要

寺ヶ谷は、江戸時代から明治22年まで村であった伊達方の一部である。天文年間の創建と伝えられる曹洞宗の慶雲寺があることから、寺ヶ谷と呼ばれる。

丘陵に挟まれた、幅100m、長さ700mほどの南北方向の谷地形に作られた集落である。東側の宮村との間には丘陵があり、隔てられている。

世帯数は、昭和52年に23、平成22年に28でわずかに増えている。

2) 平成23年の概要

行事は、「ススハライ」と呼ばれ、7月24日のウラ盆に行われる。参加者は、歩けるくらいの年齢から小学6年までの男女で、今年は、小学生3人、幼稚園児3人、入園前の幼児2人が参加する。

i 準備

当日までに、子ども会の世話人が2mくらいの長さの笹を5本程度と、公会堂に保管されている鉦を用意する。

ii 当日

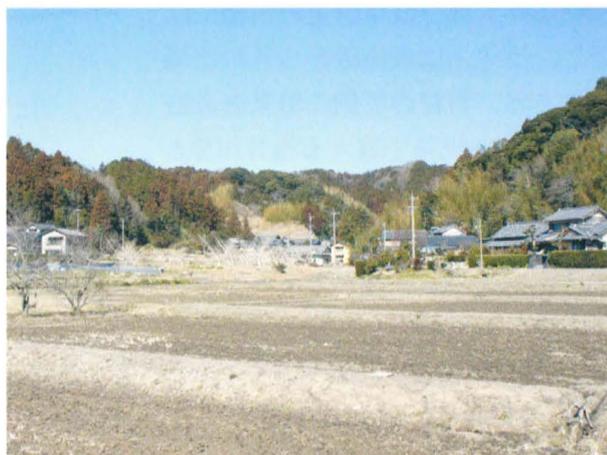
7月24日(日曜日)午後4時に公会堂に集合する。この時までには上級生は慶雲寺に行き、施餓鬼旗をもらっておく。公会堂で、慶雲寺からもらった施餓鬼旗、事前に預かった施餓鬼旗を竹(女竹)に付ける。初盆の家では、竹(男竹)に盆提灯を付けて公会堂へ持ってくる。

役割は、笹を持つ役と鉦を叩く役がある。

鉦は、直径20cmほどあって重たいので、交代で持つ。鉦は道中ずっと叩き続ける。特に決まったリズムはなく、適当に叩く。



位置図



集落の景観



慶雲寺



公会堂

家に着くと、「ススハライに来ました。」と挨拶し、笹で軒先を払う。この時に施餓鬼旗を付けてくれる家もあり、お礼をもらって次の家に向かう。初盆の家ではお礼を多くくれる。当日留守の予定の家は、施餓鬼旗だけでなく金も世話人宅へ届けてくれる。

回る道順は、公会堂から北へ向かい、そこから南下してくる。

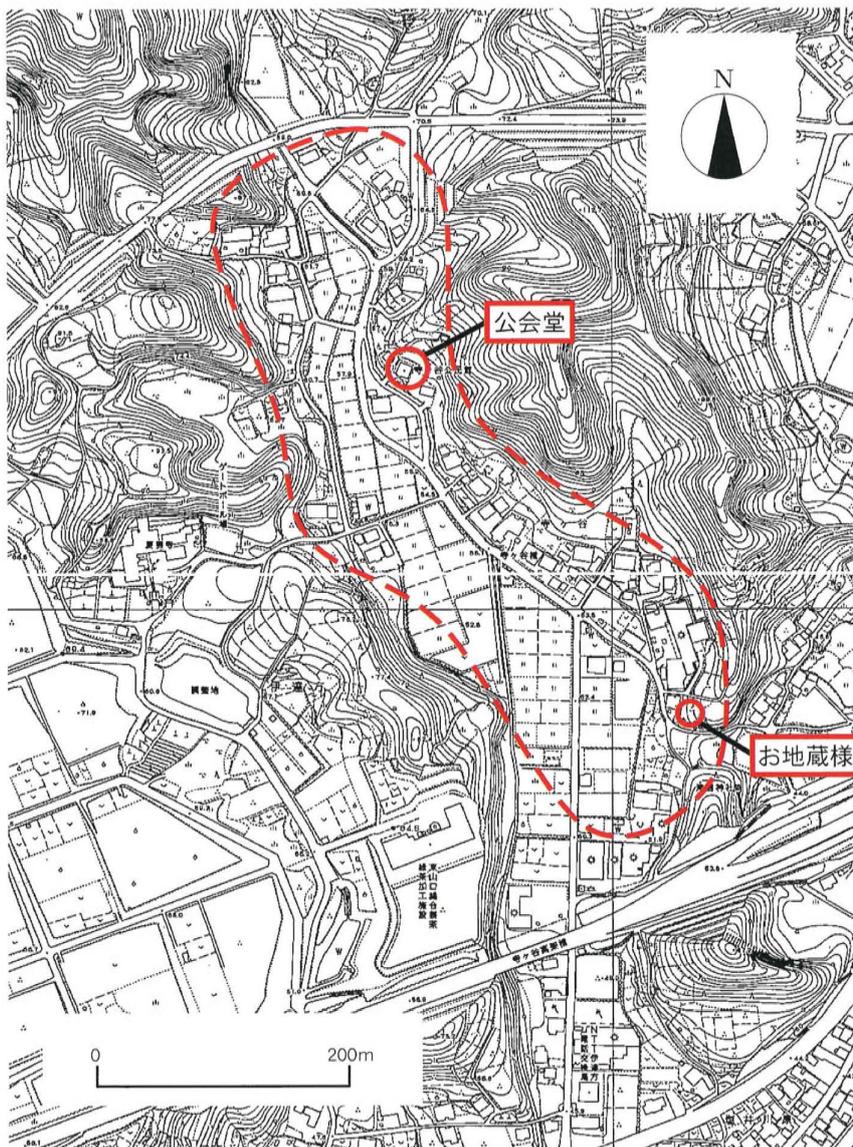
iii 精霊送り

集落を回り終わると、宮村との境にあるお地蔵様で、施餓鬼旗、初盆の家で預かった提灯、笹を燃やす。当日は、お地蔵様でお念仏が行われていて、大人が燃やしてくれる。

燃やし終わると、区が用意した菓子と500円ほどの金を一人ずつもらい、午後5時30分頃解散する。



お地蔵様



現在のススハライ関係の位置図

3) 昭和6～13年頃の例

大正13年生まれの男性の記憶による。

行事は「ショーリョー送り」と呼ばれ、7月24日に行われていた。対象は、尋常小学校1年から高等小学校2年の男児であったと思うが、未就学と思われる子どももいた。

当日、学校が終わってから、自分の家のものだけではなく、まわりの家の施餓鬼旗、お灯笼を持って、公会堂に集合した。上級生が、施餓鬼旗とお灯笼を付ける女竹の新竹を人数分、ススハライに使う男竹、鉦をぶら下げる竹を採った。採った竹に、施餓鬼旗、お灯笼を付け、鉦を竹にぶら下げた。

役割は、ススハライ、鉦叩き、集金係、オトーロー（お灯笼）、施餓鬼旗があった。道中は、この順番で並ぶように言われた。鉦は、公会堂を出る時からお地藏様に着くまで、ずっと叩き続けた。リズムは、特に決まっておらず、適当に叩いていた。

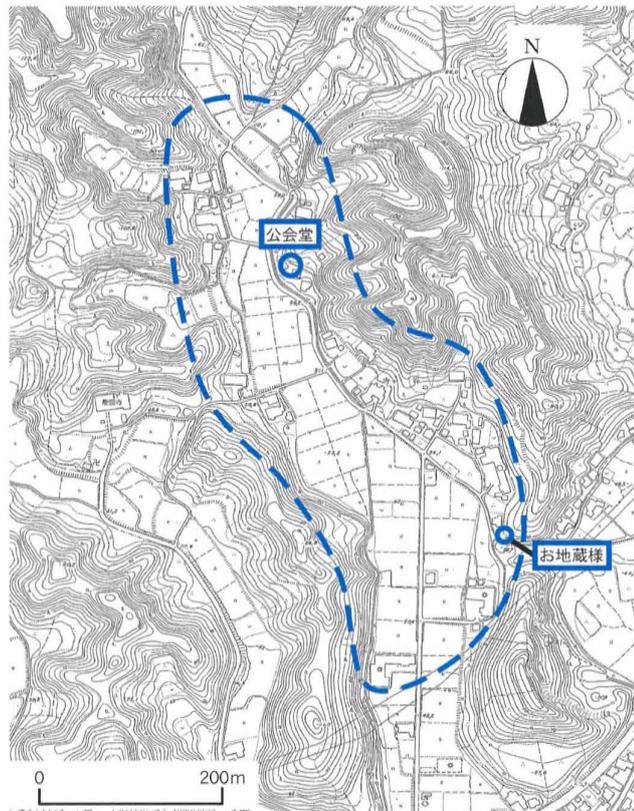
家に着くと、ススハライと集金係が敷地に入って、ススハライが軒を払った。その間、他の者は道路にいて、竹を担いでいるだけだった。

途中で慶雲寺に立ち寄り、宮村との境にある寺ヶ谷のお地藏様でお灯笼、施餓鬼旗、笹を燃やした。施餓鬼旗等を燃やした後、上級生の家で夕食を呼ばれた。食事は、白い飯とみそ汁くらいだったと思う。夕食が終わると、そこで上級生がお礼を分配した。お礼が、1戸あたり1～5銭、多くても10銭くらいだったと思うので、分け前は知れたものだったと思うが、学年でそれなりに差があった。

この夕食は、子どもが食べ散らかして汚い、ということで止めになった。



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



過去のショーリョー送り関係の位置図

(2) かげもり区

1) 地区の概要

江戸時代から明治8年まで村で、明治8年に海老名村、宮村、鴨方村と合併し、八坂村となり、現在区の名となる。

『掛川誌稿』によれば、戸32、社寺は潮河明神、山王、曹洞宗の龍昌寺がある。

宮村と鴨方村の東側に位置し、逆川と丘陵が境である。

北から流れてきた海老名川が、海老名と影森の境付近で向きを西に変え、影森の集落の南端近くを蛇行し、逆川の手前で30mほどの高さがある丘陵を削り逆川に注ぐ。

標高は、南端近くの海老名川沿いが低く、北に向かうほど高くなり、46～54mを測る。

世帯数は、昭和52年に41、平成22年に45でわずかに増えている。

2) 平成23年の概要

行事は、「ススハライ」と呼ばれ、7月24日のウラ盆に行われる。参加者は、小学生の男女であるが、希望があれば幼稚園児も参加するとのことで、例年10人程度が参加する。

i 準備

当日までに、各自笹を用意する。ない場合はもらいに行く。

ii 当日

7月24日(日曜日)の午前8時頃、公会堂に集合する。東西2組に分かれて回る。

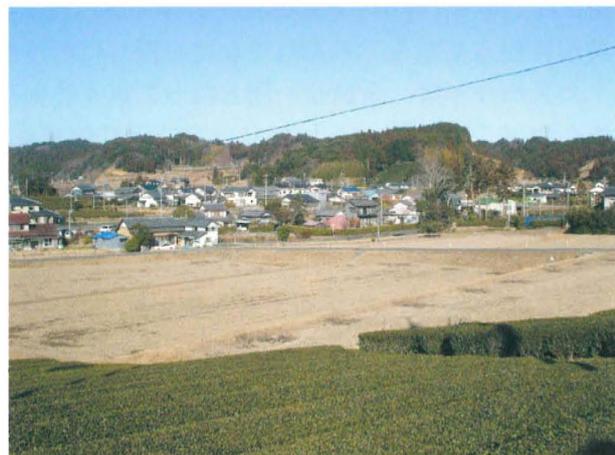
家に着くと、玄関で「ススハライに来ました。」と挨拶して、笹で軒を払う。お払いが終わると「終わりました。」と言って、お礼をもらう。最後に「ありがとうございました。」とお礼を言って次の家に向かう。提灯・施餓鬼旗の回収はなく、これは各家で処分する。

集落を回り終わると、公会堂に戻る。お払いの笹は、子ども会の代表者が持って帰り、ごみとして処分する。

お礼の金は、子ども会のクリスマス会や卒業式関連の行事等の資金にする。



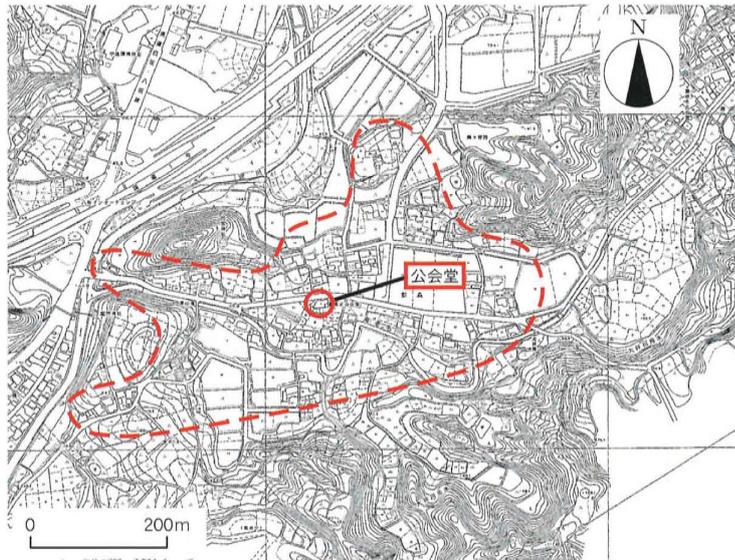
位置図



集落の景観



公会堂



現在のススハライ関係の位置図

3) 昭和18～23年頃の例

昭和12年生まれの男性の記憶による。

実施日は、7月24日の午後からと決まっていた、対象は、小学1年から6年の男児のみであった。学校が終わってから、みんなで女竹を採りに行った。

ススハライは、全員が一団となって家々を回り、煤や蜘蛛の巣を取った。初盆の家では灯笼を回収し、お礼は他の家より多くもらった。

精霊送りは、子どもだけで、影森と海老名の境の河原で灯笼を焼いて川に納めた。

お礼の分配は、帝釈天で6年生が行った。お礼を6年生が集計し、1年生10円、2年生20円というように学年で差をつけて分配していた。最後に残った金は、6年生で分けたと思う。6年生が計算する間、帝釈天のところで待っていたのを覚えている。



帝釈天(竜生寺)参道



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)

4) 戦前～農地改革以前の頃の例

「くらしの中の行事」(昭和55年3月発行)に影森の状況が記されている。記述の中には具体的な年代は見られないが、地主という言葉が出てくるため、この頃と推定している。

影森では、7月24日の盂蘭盆の日に男子だけが童生寺(『掛川誌稿』では龍昌寺と表記)に集まる。最年長の子が地主の家に行って「お精霊おくりをするので、鉦を借りに来たでお願いします。」と言って、鉦を借りてくる。他の子どもは、その間に道路脇に生えているスクサ(かたばみ)を摘んで来る。そして、鉦をスクサ(かたばみ)でクキクキクキと磨き上げる。

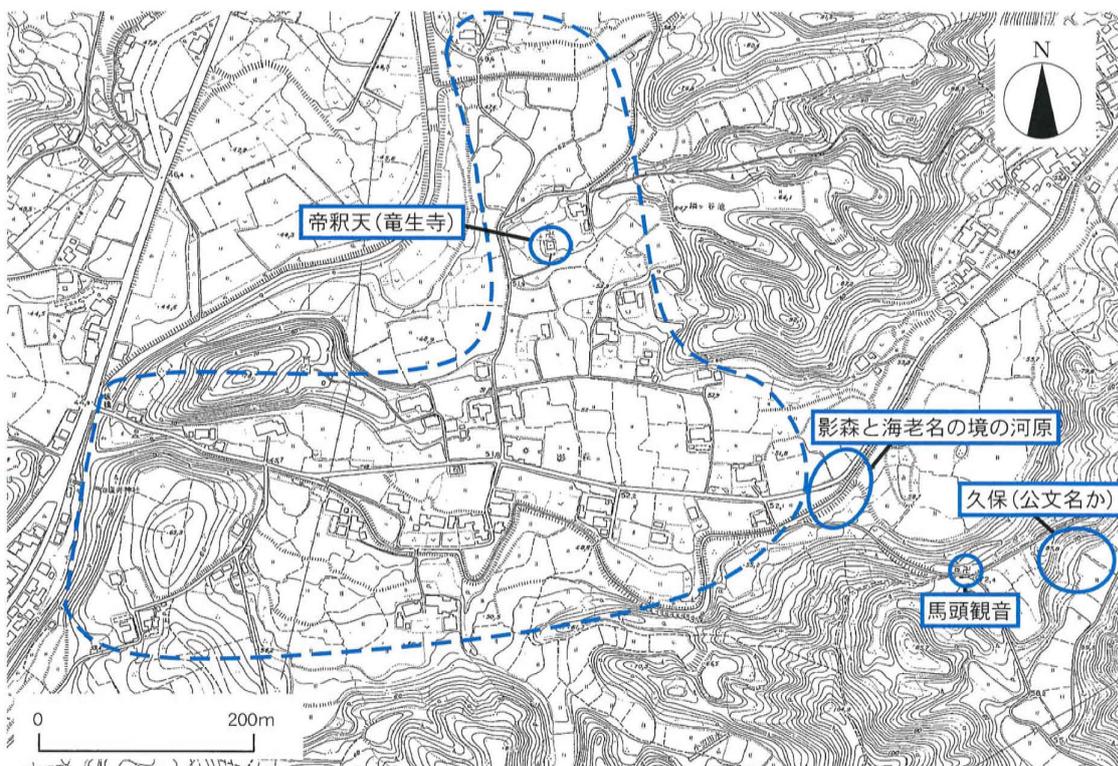
この鉦に青竹を渡して、2人の子が前後で担ぐ。後ろの子は、この鉦をチンチンと打ちながら。高学年の子どもは、笹竹を持ち、各戸の門口を払って歩く。低、中学年の子どもは、初盆の家で盆灯籠を受け取る。「ご苦労さん、ご苦労だね」と各戸よりお礼の駄賃が上級生に渡される。

全戸を回り終わると、盆灯籠を持って、海老名と影森の間にある道を久保(公文名か)の方へ登る。村境の沢の上まで来ると、イチ、二、サン、の号令で沢に納める。

そして、全員が一目散に影森の馬頭観音まで、決して後ろを振り返らずに駆け戻る。馬頭観音で一休みして童生寺へ戻り、年齢相応に礼金が分配される。



馬頭観音



過去のお精霊おくり関係の位置図

(3) 宮村区

1) 地区の概要

宮村は、およそ東西400m、南北1.2kmの大きさの集落で、ほぼ中央を南北に旧東海道が通る。

宮村の名は、北端に鎮座する^{ことのまま}事任八幡宮に由来する。この神社は、枕草子に名が見えるのをはじめとして、中世以降の紀行文にたびたび登場する。

日坂から流れてきた逆川は、事任八幡宮が鎮座する丘陵の北側から宮村の東端を通り、市街地方向に流れていく。

現在の宮村は、江戸時代の^{かものがた}鴨方村と宮村を含んだ範囲で、『掛川誌稿』に「鴨方村の地は宮村と相混ぜり、鴨方村は伊達方村と隣れる村なれば(中略)戸42」とある。江戸時代の宮村の戸数については『掛川誌稿』には記載がなく、『遠淡海地志』に30余とあり、合わせれば70戸ほどとなる。

明治8年に^{あびな}海老名村、^{かげもり}影森村、^{かものがた}鴨方村と合併し、八坂村となり、現在区の名となる。

人家は、事任八幡宮周辺、ほぼ中央の旧東海道沿い、西側の丘陵の裾にまとまりが見られる。世帯数は、昭和52年に67、平成9年に75、その後増加し、22年に84を数える。

2) 行事の概要

行事は、「ボンボン」と呼ばれ、7月24日に行われていたが、平成18年頃に廃れてしまった。

3) 昭和10～15年頃の例

昭和3年生まれの男性の記憶による。

i 準備

参加者は、小学1年から6年までの男児で、20人くらいいた。鉦を吊るす青竹1本とお灯笼を吊るす太い竹1本、軒を払う笹2、3本は、上級生の保護者が当日までに用意した。

役割は、上級生が鉦を担いだり、笹で軒を払ったりした。下級生はおひねりを受け取る以外に役割はないので、ただ上級生の後について行った。

ii 当日

7月24日の午後、学校が終わると、火の見櫓のある辻に集合した。大人に櫓から鉦を下ろしてもらい、青竹に吊るした。鉦は念仏鉦の大きいもので、直径30cmほどあった。

鉦が吊るされた竹を2人で担ぎ、後方の者が道中ずっと叩いていた。2組に分かれて、区内すべての家を効率よく回った。家に着く



集落の景観



火の見櫓の辻

と、全員敷地に入り、玄関前で「ボンボンに来ました。」と挨拶した。すると、家人が出てきて、袋を持った下級生がおひねりを受け取っていた。その後、上級生が笹で軒先を払っていた。初盆の家では、太い竹にお灯籠を付けてくれ、おひねりも普通の家より2～3倍多かった。施餓鬼旗は回収していなかった。

iii 精霊送り

事任八幡宮の裏側の逆川の縁に大きな岩があって、その岩の上でお灯籠と笹に火を点け、少し燃えたところで川へ納めた。

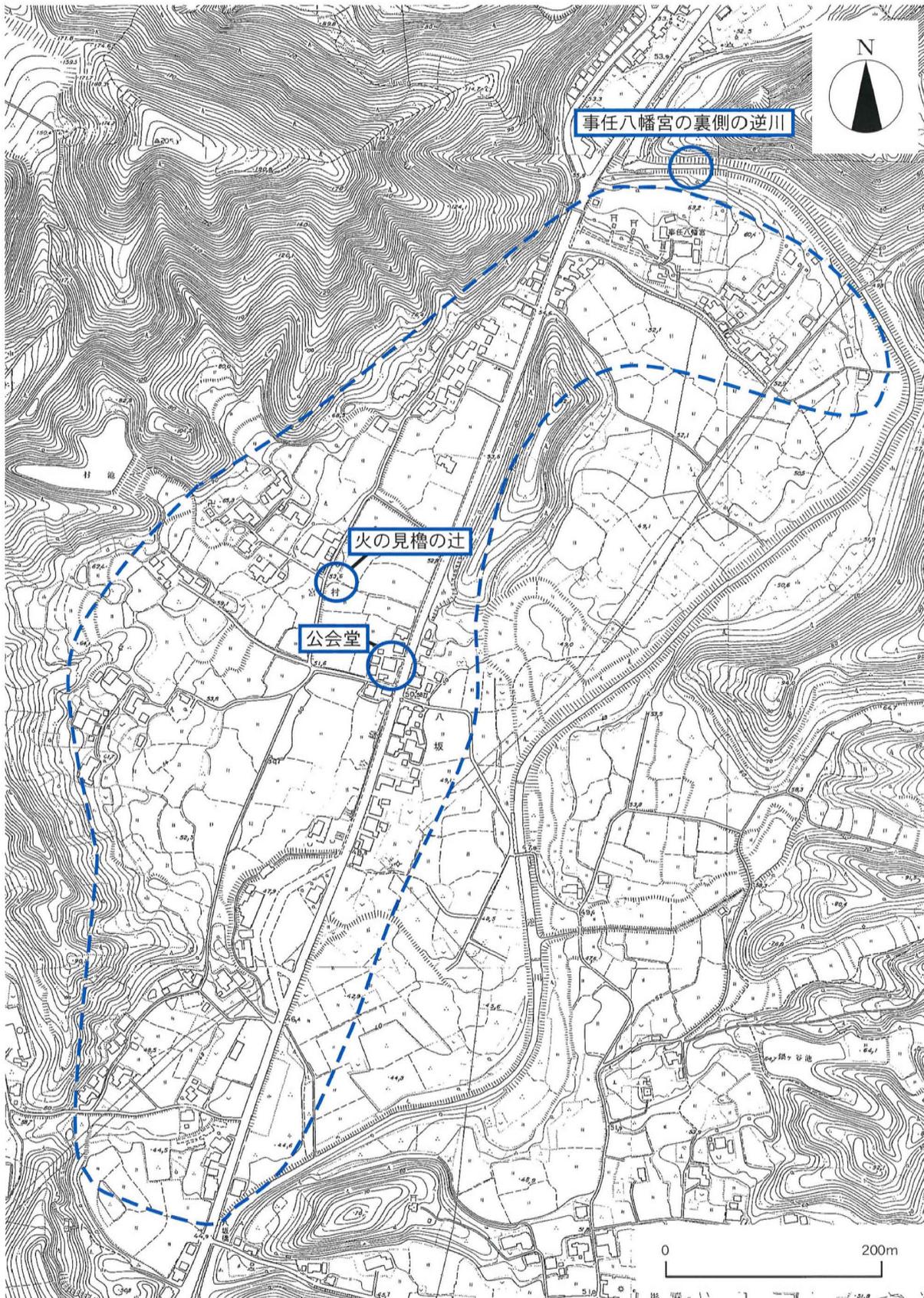
公会堂に戻ると、上級生がおひねりの分配を行った。金額は、年齢によって差がつけられていた。



事任八幡宮裏の逆川



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



ボンボン関係の位置図

(4) ^{あびな}海老名区

1) 地区の概要

南に影森、西に宮村が隣接する。海老名は、逆川の支流である海老名川に沿った谷地形にあり、幅150~200m、長さ700mほどの範囲に集落がある。海老名川は、海老名、影森を通り、逆川に合流する。影森とは海老名川沿いに平地がつながっているが、宮村との境には丘陵があり、南側は丘陵によって近世の城東郡に属する西方村と隔られている。

『掛川誌稿』には、戸24、寺社は若宮八幡宮、^{しんしょうじ}心性寺の記載がある。

明治8年に^{かげもり}影森村、^{みや}宮村、^{かもがた}鴨方村と合併し、八坂村となり、現在区の名となる。

世帯数は、昭和52年に30、平成5年から9年の間は29に減少したが、その後増加して、22年には33を数える。

2) 行事の概要

行事は、「オトーロー（お灯笼）」と呼ばれ、7月24日のウラ盆に行われていたが、平成16年頃に廃れてしまった。

3) 昭和15~22年頃の例

昭和8年生まれの男性の記憶による。

i 準備

参加者は、小学1年から中学2年までの男児で、20人くらいいた。

行事には、鉦と竹を使用した。鉦は、直径35cmくらいの大きさで、心性寺に保管してあった。昭和20年代の後半までは使用していたが、紛失したためその後は使用していない。竹は、近くの藪に採りに行って、灯笼を吊るすものと、鉦を担ぐものを作った。灯笼を吊るすものは、枝を少し残して先端をスパッと切った。

鉦を担ぐものは枝を払った竹を使用した。



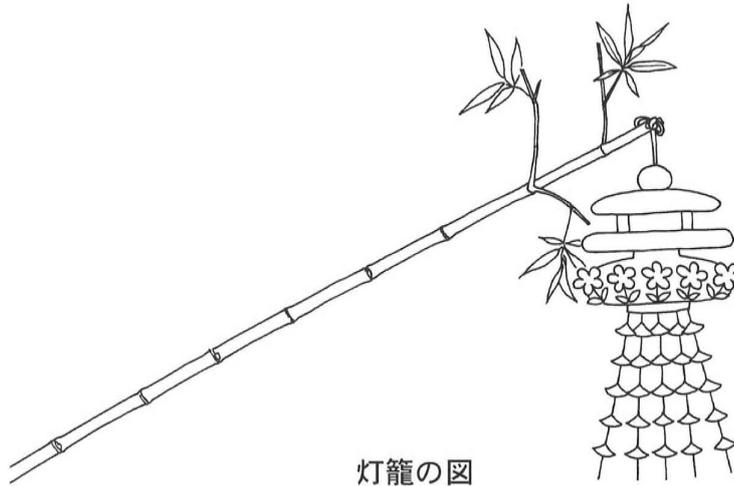
位置図



集落の景観



心性寺の跡



灯笼の図

ii 当日

7月24日の午後3時頃、心性寺を出発した。上級生を先頭に、一列になって集落内を奥から下まで回った。列の中ほどで鉦を吊るした竹を2人で担ぎ、別の子どもが撞木で叩きながら進んだ。唱えごとはなかった。

初盆の家から預かった灯笼を竹の先に吊るした。灯笼が1.2mくらいの高さがあったので、引きずらないように持ち上げて歩いた。村内全戸を回り、お金をもらった。



川上

iii 精霊送り

終点は、海老名と影森の境付近の川上^{かわかみ}と呼ばれる場所で、海老名川の河原に下りて灯笼と竹を燃やした。

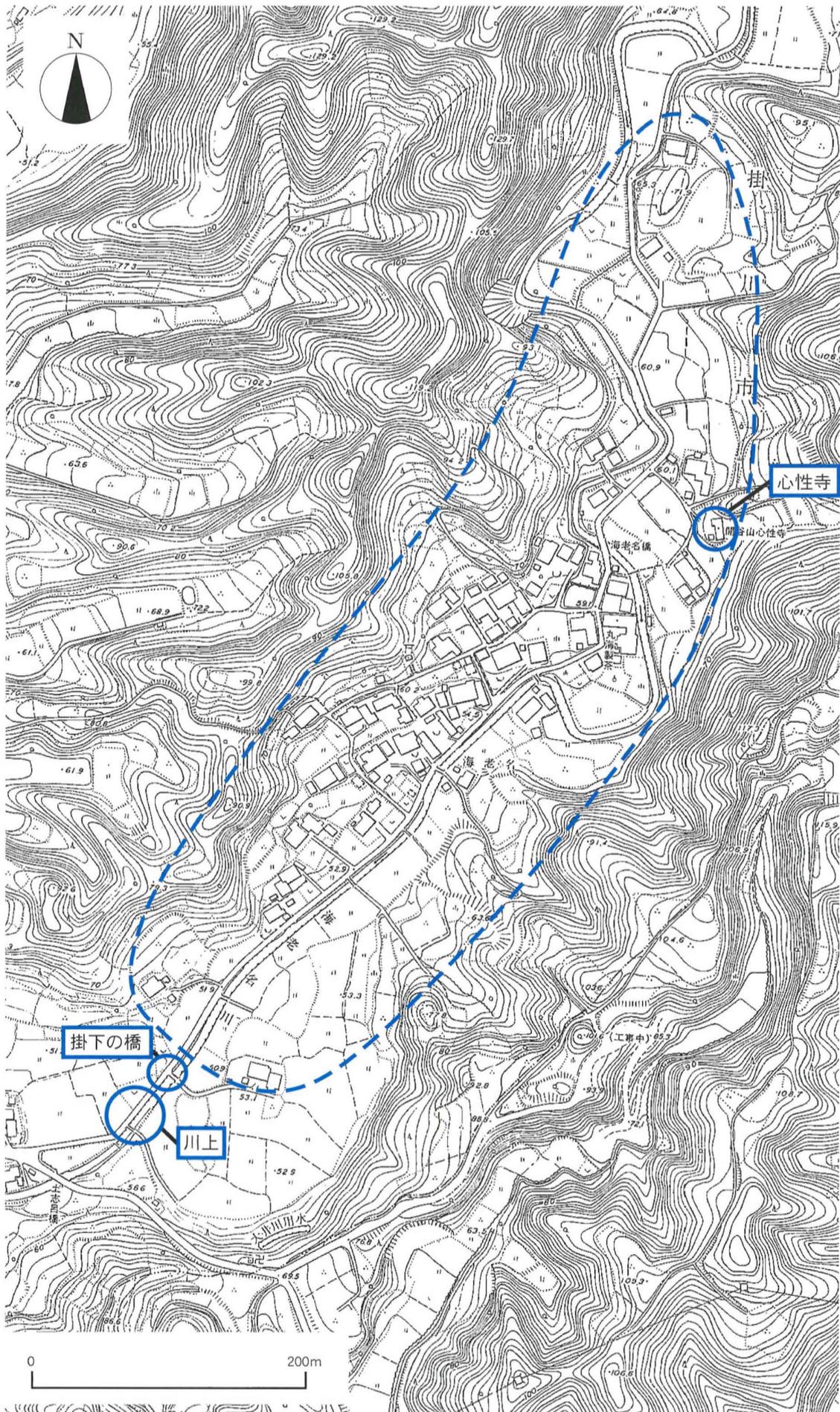
その後、川上^{かけした}の掛下の橋の上でお金を分配した。分配は、年長の者が行い、額は年齢が下がるに従って少なくなり、小さい子は2銭か3銭だった。



掛下の橋



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



オトロー関係の位置図

4 ショーリョー送り系

1 地区の概要

掛川市の北端に近い^{ゆずっぱ}柚葉の「送り神」、北東端の東山区^{かみ}上の「ショーリョー送り(後にショーリョー納め)」を報告する。

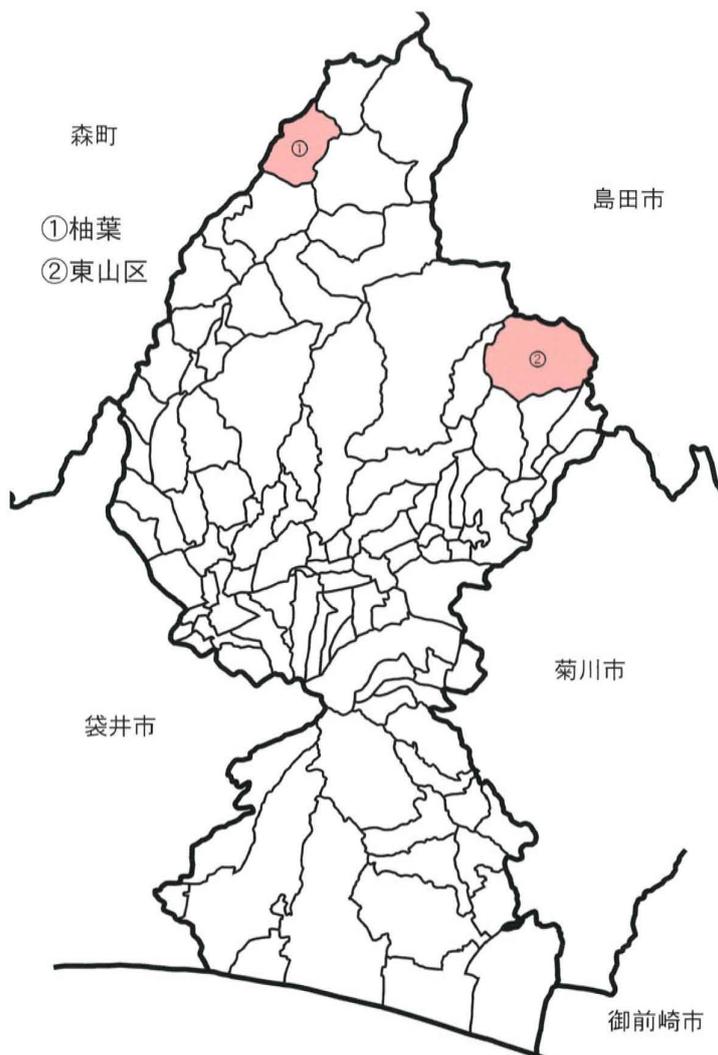
柚葉は、標高670mの大尾山^{おびさん}から南西に800mほど離れた標高400mほどのところにあった7戸ほどの集落であったが、住民は集落を離れ現在の居住者はいない。江戸時代には佐野郡の北の外れで、周智郡に接していた。集落は、周囲を山に囲まれ、西の谷を田代川が流れている。田代川は、森町方向に流れ、太田川に合流する。かつての住民は、この田代川沿いの道を通して、森町方面に生活必需品を買いに行っていたようであり、森町との結びつきが強かった。

一方、東山は、標高500mほどの粟ヶ岳^{あわがたけ}の南東に位置する。江戸時代には佐野郡の東の外れで、東側に隣接する村は榛原郡^{はいばら}に属していた。丘陵の間を二級河川逆川^{さかがわ}が北から南に流れていて、この河川沿いに上と下の集落がある。標高100mほどの逆川沿いから標高250mほどの粟ヶ岳の中腹にかけて、上と下の集落が形成されている。東山の集落は、この逆川沿いと、この川筋から1.5kmほど離れた丘陵中腹の白津倉^{しろづくら}にある。

2 行事の概要

柚葉の「送り神」は、8月17日に行われた。8月13日から15日のお盆の後、16日に家々で沢に行き、供え物を送った翌日に行われた。朝、先端に御幣を付けた「ヘイソク」と呼ぶ竹で、家の中、家人を払う。午後に集落の大人や子どもが集まって村境の峠にある「送り神堂」まで行き、ヘイソクを地面に突き刺し、鉦と太鼓で囃しながら送る。さらに夕方にはヒャクハツタイで送るというものである。仏教に基づくお盆の後に神道と結び付いた御幣で送り、さらにその後には仏教に起源を持つと考えられる「ヒャクハツタイ」を行うという神道と仏教がミックスされたような行事である。

東山区上の「ショーリョー送り」は、7月16日に行われた。これは、各家の子どもが、施餓鬼旗を持って台地を登り、村境の沢に挿してくるというものである。子どもがいない家では大人が行い、初盆の家では灯籠を挿す。このほか、下では日坂との境に納め、白津倉では集落内の河川に納めていた。上と下の施餓鬼旗、灯籠は人目に付く場所にあったようで、「東山に行ったら、東山の村境のところにギラギラ光った灯籠がいくつもぶら下がっていて気持ち悪かった。」とか「夏のお茶刈りの時に通ると首切り沢に施餓鬼旗や灯籠がたくさんあって、首切り沢という地名でもあり気味が悪かった。」というような印象を他の地区の人々に与えていた。



ショーリョー送り系の分布図

3 実施地区

(1) 柚葉^{ゆずっぱ}

1) 地区の概要

柚葉は、市の北端近くに位置し、森町に隣接する。周囲を山地に囲まれ、水田はほとんど見られない。

『掛川誌稿』によると、田代村の一部にあたり、戸数7と記載されている。田代村は、明治6年に大畑村ほか2か村と合併して上西之谷村となる。

周囲を山に囲まれ、山の中腹の標高380～450mほどの場所に集落があったが、現在居住者はいない。

2) 行事の概要

行事は「ショーリョー送り」と呼ばれていて、昭和35年頃まで行われていた。

3) 昭和15年頃の例

昭和6年生まれの男性の記憶による。

i 準備

行事には、男女の子どもと男性の大人が参加した。

8月12日、新竹を切りに行った。竹を「ひがえりたけ」と言って、切って一晩寝かせておかなければならない。13日、門口に松明を点け、迎え台を焚いた。仏様に夕食を進げた後、戸を開け、庭の「遊び台」の3本の松明に火を点した。この時は、「庭で仏様が遊んでいるので、側に行ってはいけない。」と言われた。14日、仏様に夕食を供え終わると遊び台に5本の松明を点した。15日、仏様に夕食を供え終わると、遊び台に7本の松明を点した。16日、朝暗いうちに集落より少し低い場所にある沢へ供え物を送った。この時、「人より遅れてはいけない。」と言われた。線香を焚いていたかもしれない。16日夜には、「送り台」を焚いた。

ii 当日

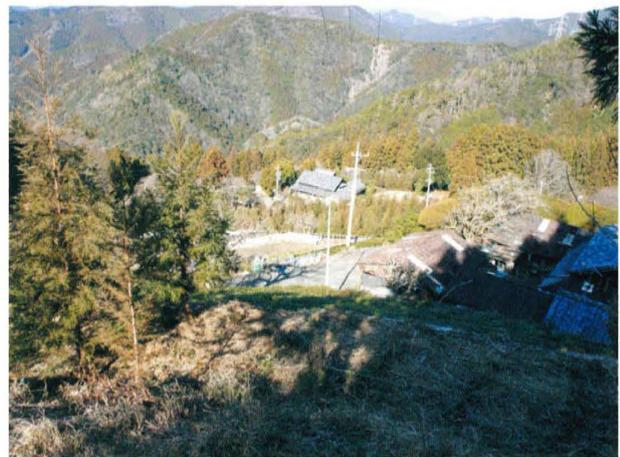
8月17日の朝、松明の竹の先端を切り御幣を付けた

「ヘイソク」と呼んでいた竹で家の中、人まで払った。

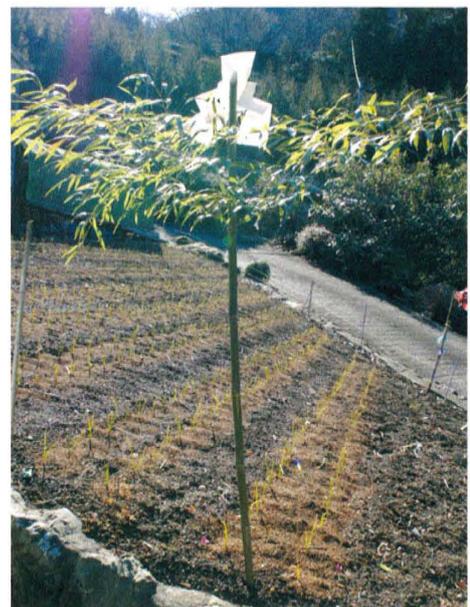
午後3時頃から柚葉の集落から人が出て来て、自分の家の前に集合した。「さあ、今から登るぞ。」のかけ声で送り神堂へ登り始めた。先頭が「送り神送れよ。」と言うと、後からみんな続いて言った。行列は、鉦、太鼓、ヘイソクの順である。鉦は、2尺くらいある重たい双盤で、ふたりが棒で担いだ。前を若者、後ろを年配の人が



位置図



集落跡の景観



「ヘイソク」(復元)

担ぎ、後ろの年配の人が「送り神送れよ。」と大声を張り上げながら藤で叩いた。太鼓は首からかけていた。10～15分ほど歩くと、峠にある送り神堂（現在は道路になっている。峠はかつての居尻村との境である）へ着く。送り神堂に着くと、ヘイソクを地面に突き刺し、鉦と太鼓を鳴らしながら「おーい。」と手を叩いて送った。「お大事によー。」「また、おいでよー。」など様々な言葉が飛び交った。この場所は、海や居尻の集落が望める見晴らしの良い場所で、大人が子どもに昔の話をしたり、大人が遊んでくれたりして、帰ってくるのは夕方であった。

夕食後、各家16～18本の松明を用意し、集落のどの家からも見える高いところにある道へ行った。そこで道の両脇に108本の松明に火を点した。この様子を「送り神で送る」と言い、夜道が暗いと帰って行く仏様に申し訳ない、と火を焚いたのだと思う。「送り神をやる時は蝮も食つかない。」と年寄りも言っていた。大人達は午後9時頃まで108本の松明の火の番をしながら、よもやま話をしたり酒を飲んだりして、松明が消えるのを待った。



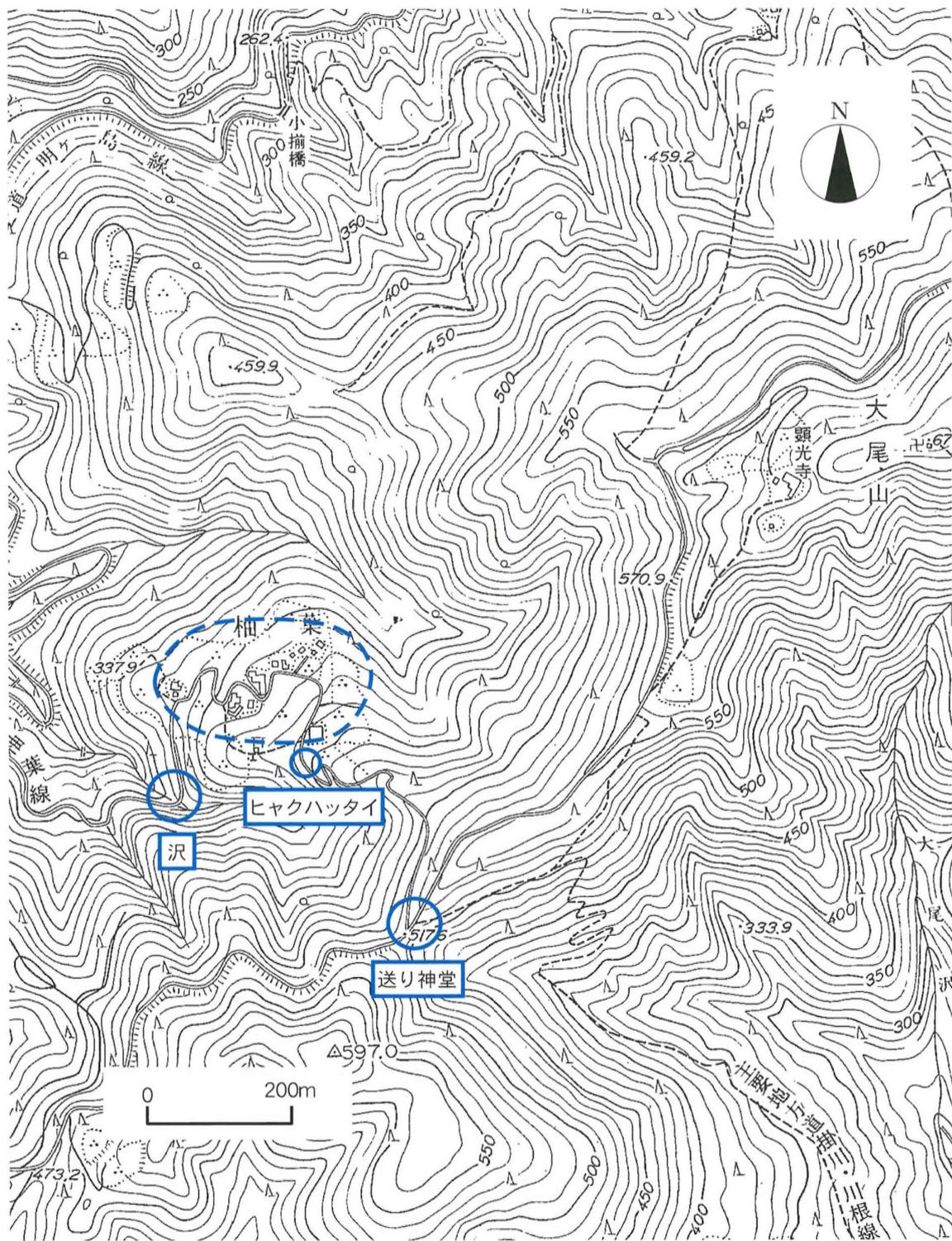
送り神堂の跡



「ヒャクハツタイ」の跡



国土地理院撮影の空中写真(昭和41年)



ショーショー送り関係の位置図

ひがしやま (2) 東山区

1) 地区の概要

東山は、東海道の難所として名高い小夜中山の北西、粟ヶ岳^{あわがたけ}の南東側の麓に位置する集落で、約6km²と広大な面積を占めている。

粟ヶ岳の麓から2級河川逆川の源流近くの川に沿った狭隘な平地と丘陵に集落が形成されている。

延享4(1747)年の「遠州佐野郡東山村明細帳」によると、田畑の他に、松・木樨等の林が22町ほどあり、農作業の合間に薪にして金谷宿・日坂宿に持って行って金に替えている、とある。

現在、粟ヶ岳の山裾から山腹にかけて茶畑が広がっているが、これは明治時代以降の開墾によるものである。

集落の東隣は、島田市^{おおじろ}大代地区で、かつては榛原郡^{はいら}に属す大代村であった。『掛川誌稿』によれば、大代地区を流れる菊川が、かつての佐野郡と榛原郡の境である。

東山村は、昭和30年に掛川市に合併し、大字として残る。

世帯数は、昭和52年に134、平成22年に127を数える。

2) 行事の概要

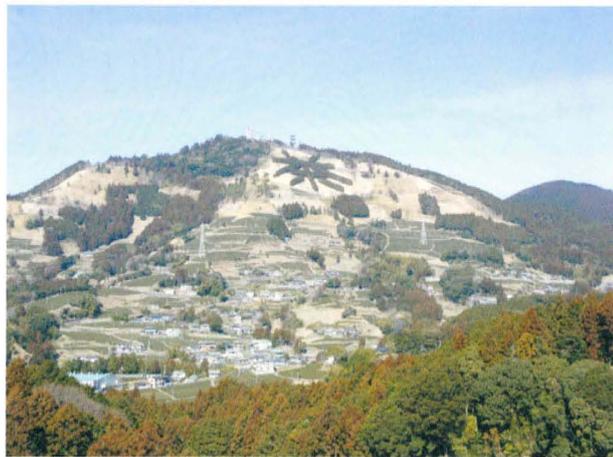
東山北部の上^{かみ}で行われていた行事の概要で、昭和初期には「ショーリョー送り」、後に「ショーリョー納め」と呼ばれ、昭和35年頃まで行われていた。

集落から笹・灯籠を納める沢に行くには、標高140mほどの集落から逆川の源流まで徐々に上り、そこから標高210mほどの台地に出るが、直線距離にして1kmほどの道程がある。

ちなみに、南部の下^{しも}は東山と日坂との境に納めていて、南東部の白津倉^{しろづくら}は集落内の河川に納めていた。



位置図



集落の景観



下の精霊送り場



白津倉の精霊送り場

3) 昭和初期の例

東山の上に住む、大正13年生まれの男性の記憶による。

i 準備

施餓鬼旗を女竹に付けるが、これは大人がやってくれた。

ii 当日

7月16日、施餓鬼旗が付いた竹を担いで30分くらい歩き、安田あんだ（現在島田市）の集落の外れの菊川まで行って、首切り沢の洲に挿してきた。初盆の家は竹の代わりに灯籠を挿した。子どもがいない家では、大人が行っていて、納めに行く時間は、朝とか昼とか特に決まりはなかった。

みんな同じ場所に納めていたので、沢にはたくさんの笹が挿してあった。首切り沢という名前が子どもには怖くて、笹を挿すと走って家に帰ってきた。



首切り沢

4) 戦前～昭和35年頃の例

昭和3年生まれの男性の記憶による。

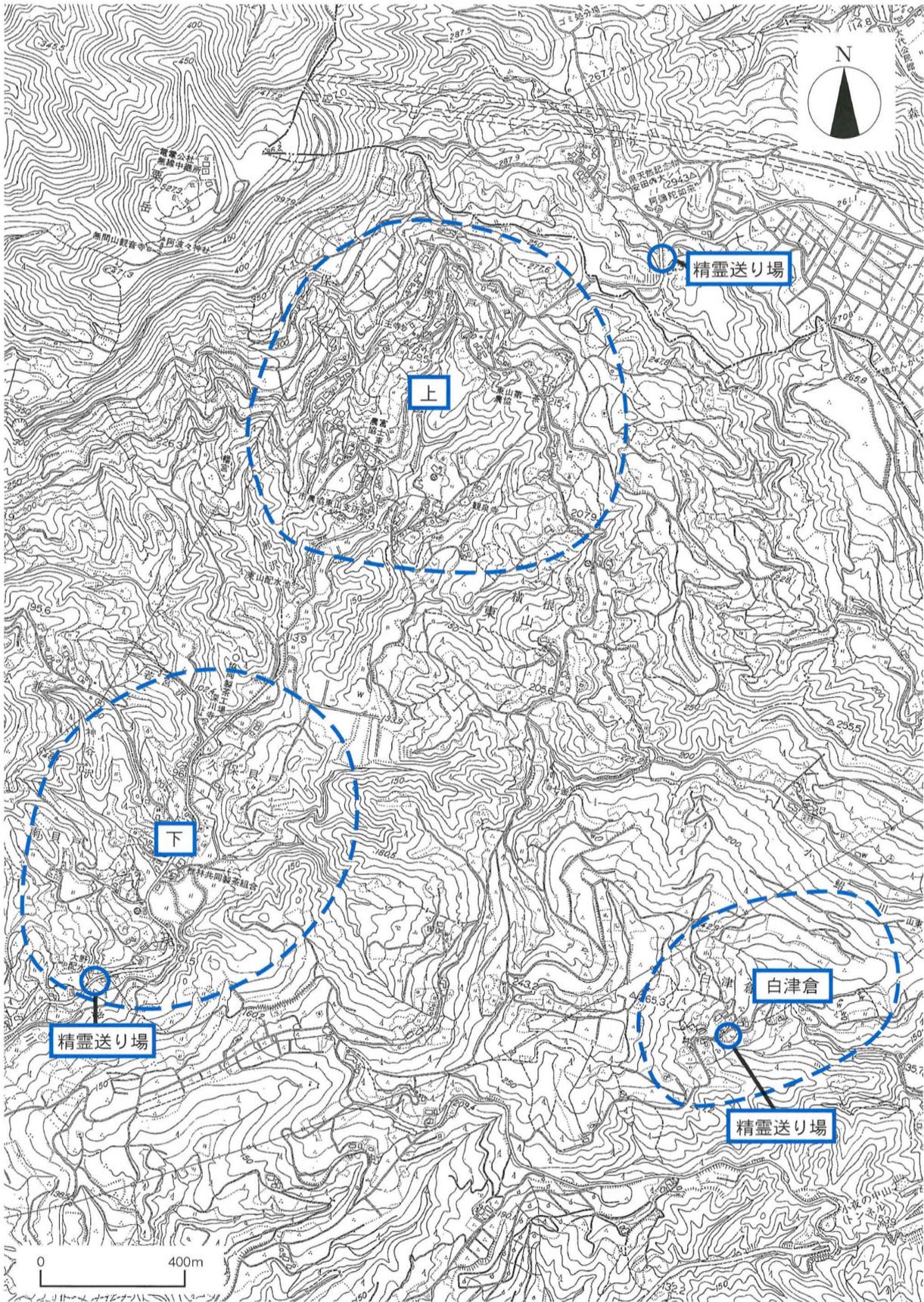
行事は「ショーリョー納め」と呼ばれ、7月16日に家の主が行った。

戦前は、首切り沢で施餓鬼旗や灯籠を燃やしたが、戦後から焼かずに置いてくるようになり、横に倒してあった。大代の集落もそこに納めていたので、たくさん施餓鬼旗や灯籠があった。

昭和35、36年頃に、納めた灯籠や施餓鬼旗が川をせき止め洪水になり、下流の田んぼに被害が出てから納めないようになった。



国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)



ショーリョー送り・ショーリョー納め関係の位置図

第3章 山の神

1 地区の概要

掛川市の南部に位置する川久保^{かわくぼ}区で、12月に行われている。川久保の南に位置する三俣から大淵地区まではさなぶりが分布し、一方、東海道沿線の農村、山間部の集落では盆の行事が伝えられている。

川久保以外に山の神の行事が伝えられているところは市内にない。

2 行事の概要

12月、子どもが笹で軒先を払って集落を回った後、山の神の祠に笹を納め、豆腐を供えて拝礼する。その後、供物の豆腐を子どもたちが相伴に預かる。

3 実施地区

(1) 川久保区

1) 地区の概要

川久保は、江戸時代は川久保村で、『遠淡海地志』には、戸数30余り、寺社は法華本勝寺、内明神、産土社天王とある。明治22年に一部を中村に編入し、土方村の大字となる。

集落は、下小笠川に沿った標高12~14mほどの平野に立地し、南北800mほどの広がりがあり、平成22に47世帯を数える。西側から南側にかけて集落を囲むように丘陵が連なっていて、東側には菊川市まで見渡すことができる平野が広がっている。

2) 行事の概要

小学生の男女が対象であるが、今年は1人しか該当者がいないため、幼児から高校生、親戚の子ども、大人も参加する。

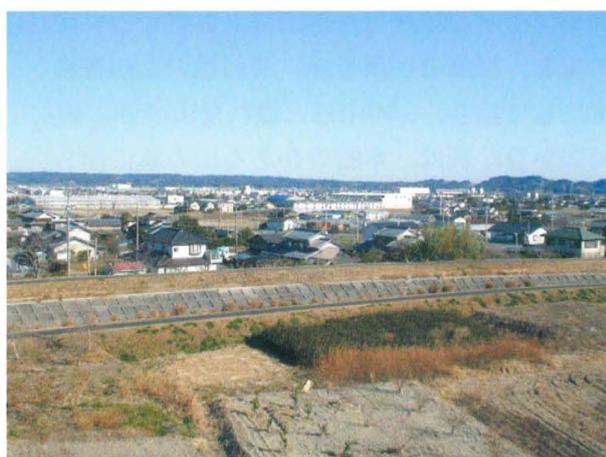
i 準備

行事は12月4日(日曜日)に行われるので、区長が事前に、笹、鉦、祠に付けるシデを用意する。祠の櫛の取り替え、藁・しめ縄の作り替えも区長が行う。保護者は、女竹を2mほど、1mほどに切って大笹、小笹にし、1本当たり2枚のシデを付ける。鉦は、直径5cm、長さ1.1mほどの竹に吊るす。

ii 当日

12月4日(日曜日)の午後1時、公会堂に集合する。

笹振りは、最初に本勝寺を払った後、最北



集落の景観



鉦叩き

端まで北上し、南下してくる。鉦を2人で担ぎ、後方の者が叩く。笹は、鉦以外の全員が持つ。鉦が「カン カン カンカンカン」と叩き、笹持ちを先導する。笹持ちは、鉦を頼りに進んで行く。家の前まで来ると、鉦は道路に留まり、笹持ちが屋敷に入る。笹持ちは、「やーまの神のかんじんじ」と1回唱え、笹で軒先を払う。午後3時頃に家々を回り公会堂に戻ってくると、軒先を払った笹を小学生が回収する。この時、笹が地面に付かないように手渡しで受け取り、受け取った笹は長イスの上に置く。



笹振り

小学生が藁で作った皿二つとお供えの豆腐1丁を、保護者が菓子を用意し、その他の人が笹を束にして持ち、300mほど離れた山の神の祠に向かう。祠は、本勝寺がある山の麓に作られている。



藁の皿と豆腐

祠に着くと、藁で作った皿を置いて、それぞれに豆腐を半丁ずつ供える。祠の脇に笹を納め、前に菓子を供え、山の神に手を合わせて拝む。

山の神に供えた菓子を持って公会堂に戻る。菓子を子どもに配り、参加者全員で豆腐を分け合って食べる。豆腐は、当日、お供えに1丁、参加者全員で食べるために150g(半丁くらい)のものを21個、保護者が用意した。午後4時頃に解散する。



祠のある山



祠に豆腐の供物



供物の豆腐と納めた笹



配られた菓子と豆腐

3) 昭和14年頃の例

大正15年生まれの子の記憶による。

実施は、12月8日の午後からと決まっています、平日の場合は、学校が終わってから行ったと記憶しているが、早退していたかもしれない。対象は、歩けるようになった年くらいから15歳前までの男児であった。前日に、笹採り、シデ作り、シデ付け、鉦磨きを行った。笹採りは、女竹で自分が持てる範囲で一番大きなものを選んで切った。鉦を付ける竹は、特に太いものを選んでいた覚えがある。シデは、区長から紙をもらって、子どもたちで作った。作ったシデは、笹1本に1枚、一番下の枝が出ている部分に付けた。鉦磨きは、カタバミで磨くと真鍮の鉦が良く光った。山の神の祠は、一年前のものが朽ちてしまっているので、新たに藁の祠と藁で作った皿を二つ、区長が用意した。

役割は、上級生が鉦担ぎ（叩き）とお礼の受け取り、他は笹振りを務めた。

12月8日、公会堂の辺りにあった建物に集合して、区長の家からお払いを始めたと思う。それから、一番北の家に行って、本勝寺を回り、南に下ってきた。道中は、上級生がどんどん先に行ってしまう、家に上級生が行ってお払いをし、お礼の米を袋に入れると次の家に行ってしまう。しばらくして、下級生が家にやって来て軒を払っていくという様子で、上級生は何軒か先で待っていた。まだ幼い子どもは笹枝を持ち、祖母が背負って付いて回っていた記憶がある。

山の神の間中、鉦叩きは家に入らず、道にいて叩いていた。鉦は「チャン チャン チャンレンボン」と叩いていた。

笹振りは、軒先を払ったが、あまりしっかりやると藁葺き屋根の藁が落ちてくるので、あまり丁寧にはやらなかった。唱えごとは「やあまのかあみのかああんじ」で、4、5回唱えた。

一番南の家で笹振りが終わると、上級生は自転車に乗って米を売りに行った。売った金で、豆腐と茶菓子を買ってきた。

他の者は、どこだったか場所を覚えていないが、みんなで上級生の帰りを待っていた。上級生が帰ってくる頃は、辺りは真っ暗になっていた。東から上級生が帰ってくるので、みんな東の方から自転車のライトが見えるのを楽しみに待っていた。

上級生が帰ってくると、みんなで山の神に行って、皿に半丁ずつ豆腐を供えた。そして、一皿分の豆腐を「オンク様」（御供様）と言って、参加した子ども全員に少しずつ箸で分け、その場で食べた。

お供えが終わると、最初に集まった家に行って、上級生が買ってきた豆腐と茶菓子を分けた。分け方は、世話になった区長へ豆腐一丁と茶菓子、最上級生が豆腐一丁と茶菓子、上から2番目の学年が豆腐半丁と茶菓子、その他の子どもで残りの豆腐と茶菓子を分けた。



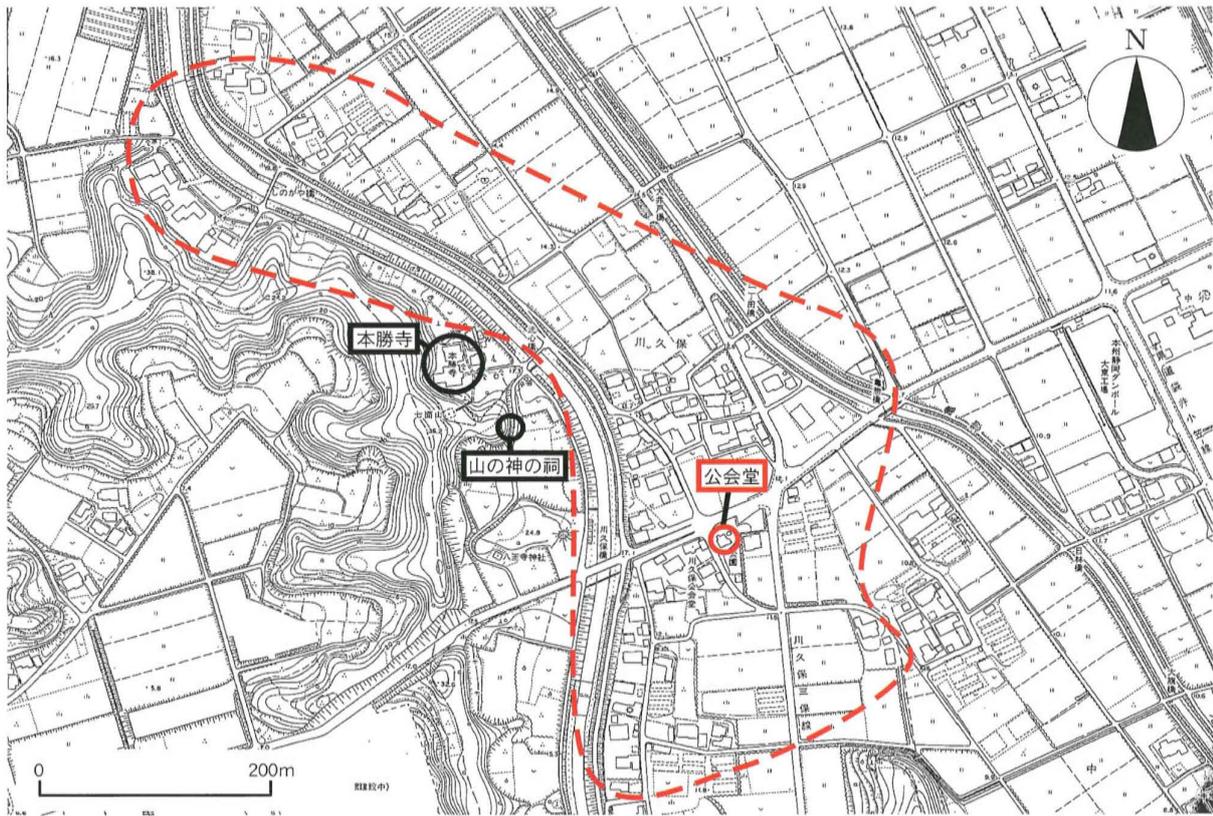
国土地理院撮影の空中写真(昭和37年)

4) 明治時代の終わり頃の例

「山の神をまつる童行事」に、明治29年生まれの子の記録があるので紹介する。

参加する子どもは男児であった。最上級生は14歳で、2人が鉦叩きを務め、「チャン、チャン、チャンーレンーボンレンーチャン」と叩きながら一同を誘導する。13歳になる男児が2人袋を持って、先頭で家ごとの軒先を訪ねる。

回り終わると、一同は天王ヶ谷の家を集まる。年長の子どもは集まった米を売って金に換え、山の神に供える豆腐一丁、天王ヶ谷の家へ一丁、鉦を叩いた14歳の子に一丁ずつ、13歳になる子に半丁ずつ買い、残った金で菓子を買う。山の神には豆腐を三箸ほど供え、残りを(天王ヶ谷の家)に持って帰る。待っていた一同の子どもたちは行儀良く一列に並び、そのひとりひとりに豆腐が行き渡るように配って回る。続いて、買っておいた菓子も一つずつ何回でも平等に配って回る。



山の神関係の位置図